

ORIGAMI TANTEIDAN

折紙探偵団

M A G A Z I N E

定価 **635円**
(本体605円)

クローズアップ Close-up

折紙探偵団新聞 創刊のころ

Origami Tanteidan: The Very Early Days

木村良寿

Kimura Yoshihisa



折り図 Diagrams

しゃちほこ

Shachihoko

川畑文昭

Kawahata Fumiaki

コアラ

Koala Based on Nishikawa's Kangaroo

渡辺 大

Watanabe Dai

展開図折りに挑戦! Crease Pattern Challenge!

フクロウ

Owl

勝田恭平

Katsuta Kyohei

つまみおり Information

第1回折り紙の科学・数学・教育研究集会報告

Report: The 1st Workshop of Origami in
Science, Mathematics, and Education

通巻 **101** 号

日本折紙学会 (JOAS) の理念

The Purpose of Japan Origami Academic Society

第一章 名称と目的

第一条 会の名称

1. 本会の名称は日本折紙学会とする。
2. 本会の英語での名称は、Japan Origami Academic Societyとする。
3. 本会の略称は、JOASとする。

第二条 会の目的

1. 本会は、折り紙の専門研究と折り紙の普及の促進、ならびに、それらを通しての広く国内、外の折り紙愛好家との交流の促進を目的とする。
2. 第一項の折り紙の専門研究とは、折り紙の創作、折り紙の創作技術の研究、折り紙に関する批評・評論、数学研究、教育研究、歴史・書誌研究、知的財産権等の研究、工学・商業デザインの研究等を意味する。
3. 第一項の折り紙の普及とは、折り紙の社会的認知度の向上活動、折り紙愛好者層の拡大活動、折り紙に関する人材の育成と発掘等を意味する。

規約第1章より抜粋

Chapter 1: Name and Purpose

Article 1: Name

1. This society is to be called Nihon Origami Gakkai in Japanese.
2. This society is to be called Japan Origami Academic Society in English.
3. The abbreviated name of this society is JOAS.

Article 2: Purpose

1. The purpose of JOAS is to promote studies of origami, diffusion of origami, and both domestic and international association of all origami-lovers.
2. The studies of origami mentioned above includes designing, designing techniques, criticism, mathematical studies, educational studies, history, bibliography, studies of the intellectual property rights, studies of industrial and commercial design, and so on.
- 3 The diffusion of origami mentioned above includes widening appreciation of origami, expansion of the community of origami-lovers, scouting and rearing the origami talent, and so on.

●折り方の約束記号 SYMBOLS FOR FOLDING

谷折り線
Line indicating
valley fold

山折り線
Line indicating
mountain fold

手前に折る
Fold paper
forwards

後ろへ折る
Fold paper
backwards

折り筋を
つける
Making a crease line

段折り
Pleat fold

裏返す
Turn paper over

引き出す
Pull out

図の見る
位置が変わる
Rotation

図が大きくなる
A magnified view

見えない
ところ
A hidden line

押す、
押しつぶす
Push paper in

切る
Cut

表紙解説

フクロウ
作:勝田恭平 (P.34)
Owl
by Katsuta Kyohei (P.34)

■コンプレックス作品で不可避となる複雑な層の重なりが、そのまま表面の質感あふれる造形として活用されています。全身にデザイン化された羽毛の重なり具合、空気を含んだボリュームのある胴体、特徴的な頭部の立体形状。これらを統合する確かな技術力の蓄積に圧倒されます。

(解説:北條高史) Comments : Hojyo Takashi

ORIGAMI TANTEIDAN
折紙探偵団
 MAGAZINE
 CONTENTS

No. **101**



Owl : Katsuta Kyohei

クローズアップ／Close-up

P.11 **折紙探偵団新聞
創刊のころ**
 Origami Tanteidan:
 The Very Early Days

木村良寿
 Kimura Yoshihisa

折り図／Diagrams and Crease Pattern

P.22 **しゃちほこ**

Shachihoko
 川畑文昭
 Kawahata Fumiaki



P.29 **コアラ**

Koala Based on Nishikawa's Kangaroo
 渡辺 大
 Watanabe Dai

P.34 **展開図折りに挑戦！**
 Crease Pattern Challenge!

フクロウ

Owl

勝田恭平 Katsuta Kyohei

カラーページ／Color

P.20 **オリガミ・フォトギャラリー**
 Origami Photo Gallery

解説・北條高史
 Comments : Hojyo Takashi

折り図／Thematic Series with Diagrams

P.4 **やわらかユニット物語**
 The Stories of Mellow Units
 開けポケット！
 Open Pocket!

川村みゆき
 Kawamura Miyuki

P.8 **おりがみ我楽多市**
 Origami Odds and Ends
 マコトコマ
 Makotokoma(The Top of Makoto's)

やまぐち真
 Yamaguchi Makoto

読み物／Articles

P.14 **アフタヌーン・オリガミ**
 Afternoon Origami
 CDOベルバニアコンベンション
 CDO Verbania Convention 2006/12

デビッド・ブリル
 David Brill

翻訳：羽鳥公士郎
 Translator : Hatori Koshiro

P.16 **藤本修三研究**
 Fujimoto Shuzo's Asymptotic
 平織りーアジサイ折り
 Origami Tessellation

西川誠司
 Nishikawa Seiji

P.18 **しつこく折紙散歩**
 Origami Sampo Doggedly Determined
 関東三大折板建築
 The three most prominent folding structures in the Kanto region

前川 淳
 Maekawa Jun

P.35 **ペーパーフォルダーの横顔**
 Paper Folders on File
 ジャン・ポーリッシュ Jan Polish

取材：羽鳥公士郎
 Hatori Koshiro

コラム／Columns

P.7 **折り紙の周辺**
 Origami and Its Neighbors

布施知子
 Fuse Tomoko

P.32 **おりすじ**
 Orisuzi ("Fold-Creases")

尾川 知
 Ogawa Tomo

P.33 **折紙三昧**
 Origami-Zanmai (This Origami and That)

日本折紙学会
 JOAS

情報／Information

P.36 **つまみおり** Rabbit Ear

第1回折り紙の科学・数学・教育研究集会報告
 Report: The 1st Workshop of Origami in Science,
 Mathematics, and Education



川村みゆき
Kawamura Miyuki

第 22 話 開けポケット！ Open Pocket!

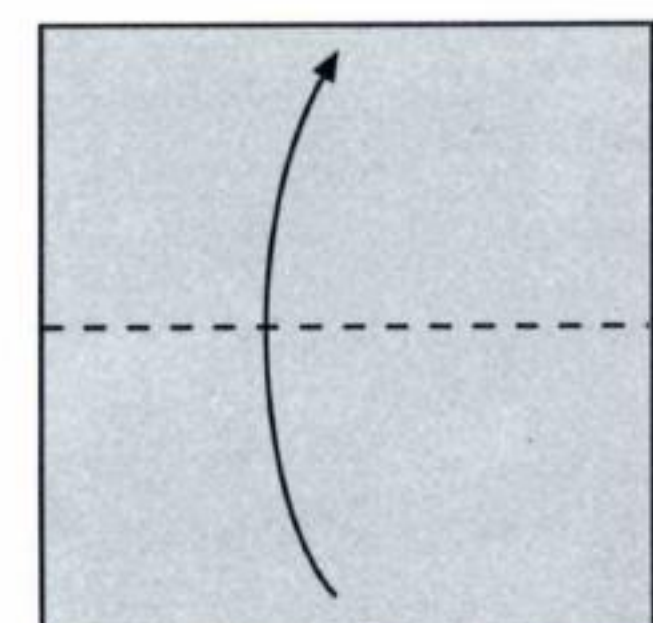
ポケットが閉じていなかったなので作品にならないと思っていたユニットですが、組んでみると結構丈夫でした。開いたポケットの中にはまだたくさんの作品が入っていそうです。

Since the pocket could not be closed, it was the unit currently regarded as being impossible to assemble into a model, but it was fairly strong when constructed. In the open pocket, many other works are still contained, it seems.

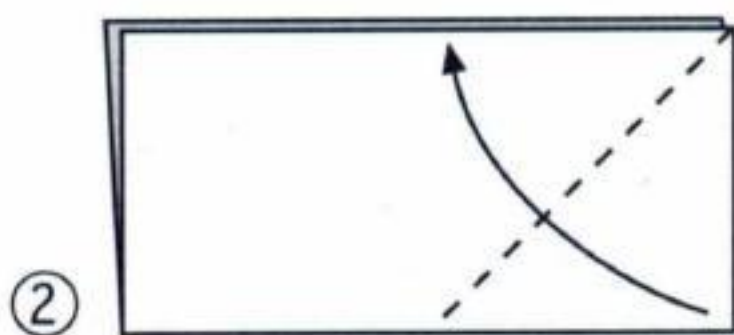


【 ジオスフィア 】 GEOSPHERE

©2007 Miyuki Kawamura
Created 20061024



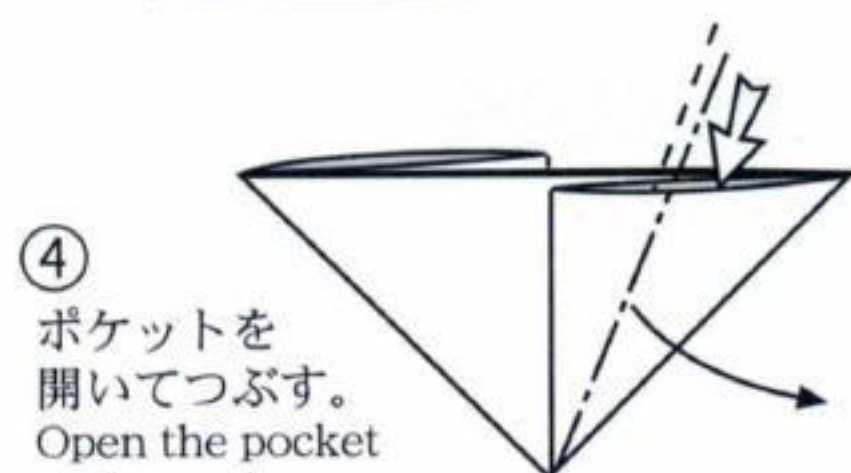
①



②



③

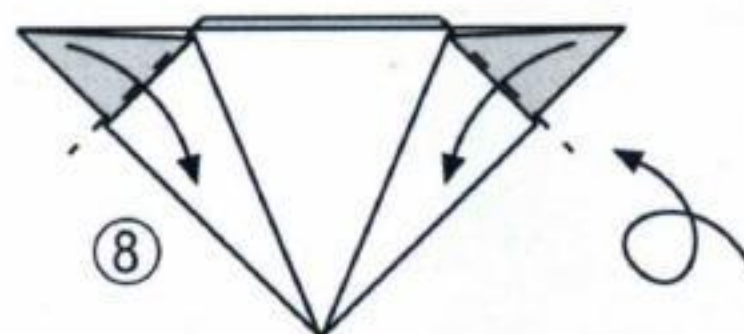


④
ポケットを
開いてつぶす。
Open the pocket
and squash.

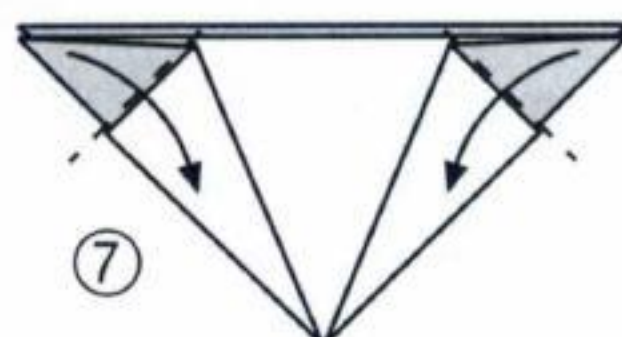
⑨



⑧



⑦



⑥

反対側も同じ。
Do the same on
the reverse side.



⑤



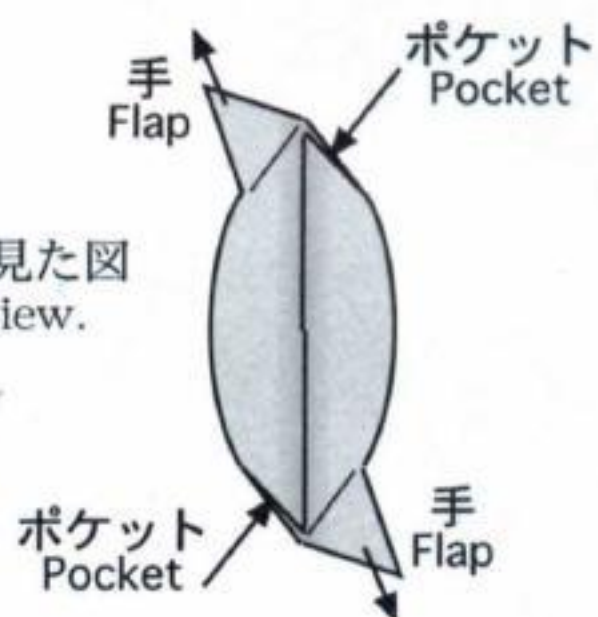
⑩

カドの先を
ポケットに差し込む。
Tuck the flaps into
the pockets.

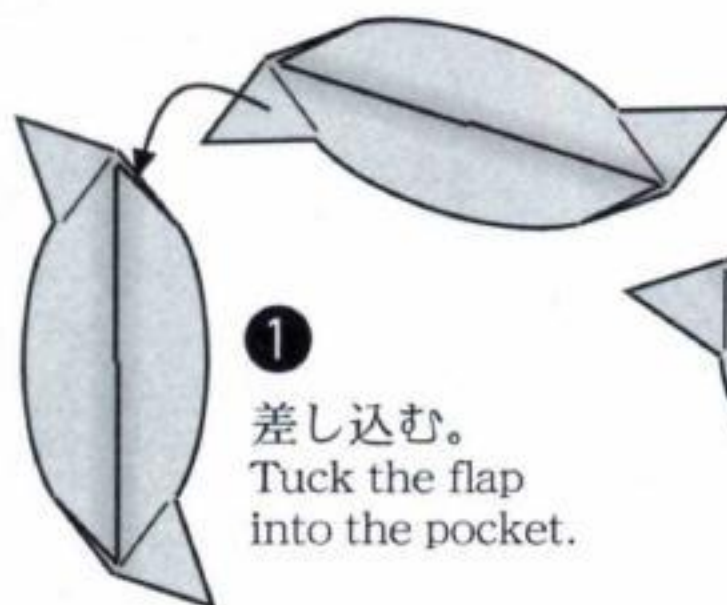


組み方 / Assembly

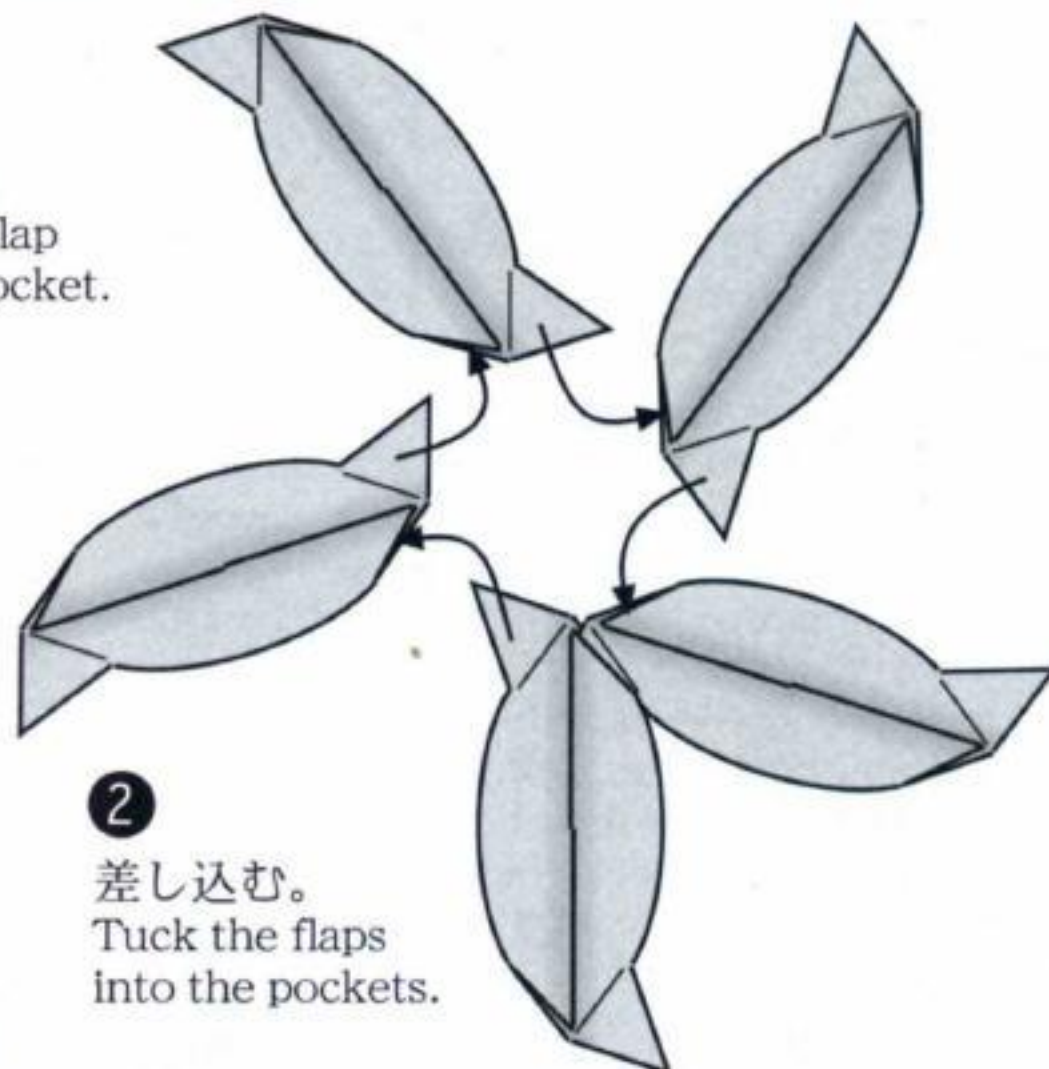
上から見た図
Top view.



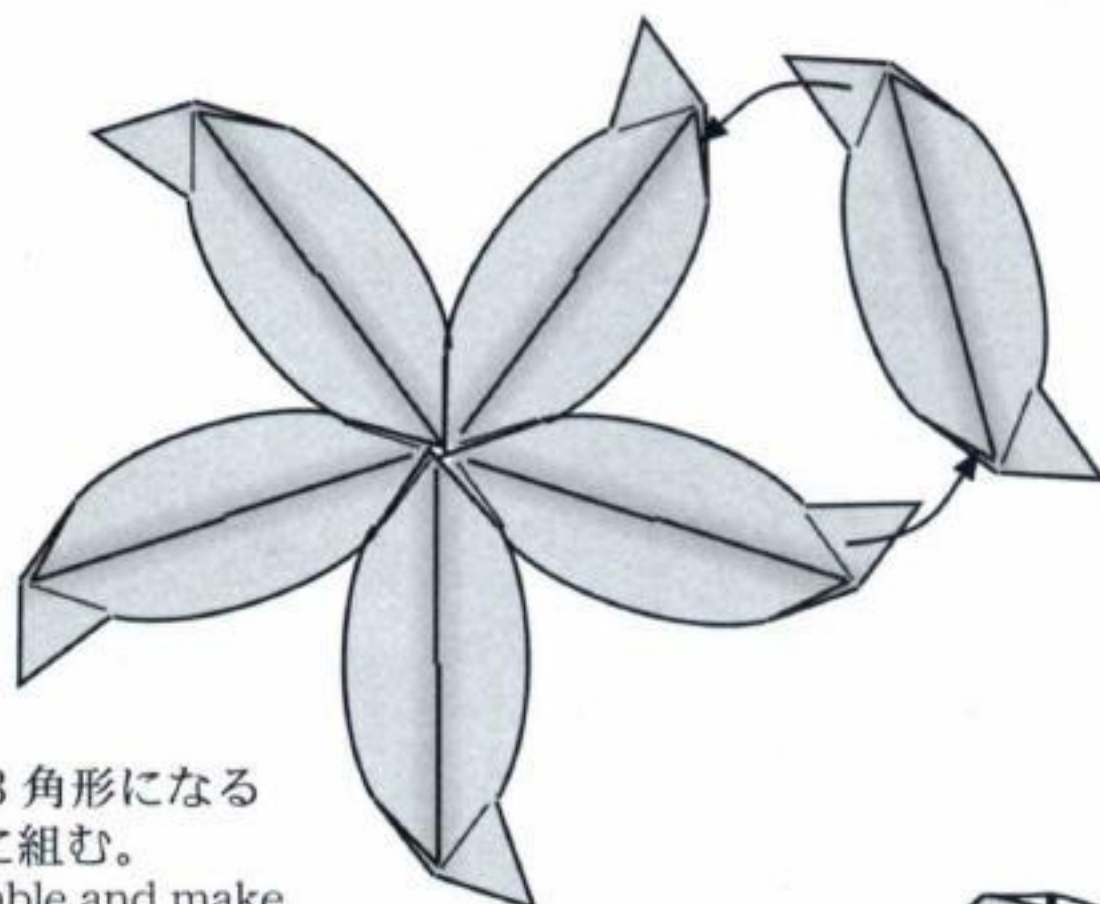
「ジオスフィア」のユニット
The GEOSPHERE unit
同じものを 30 枚作ります。
You need 30 units.



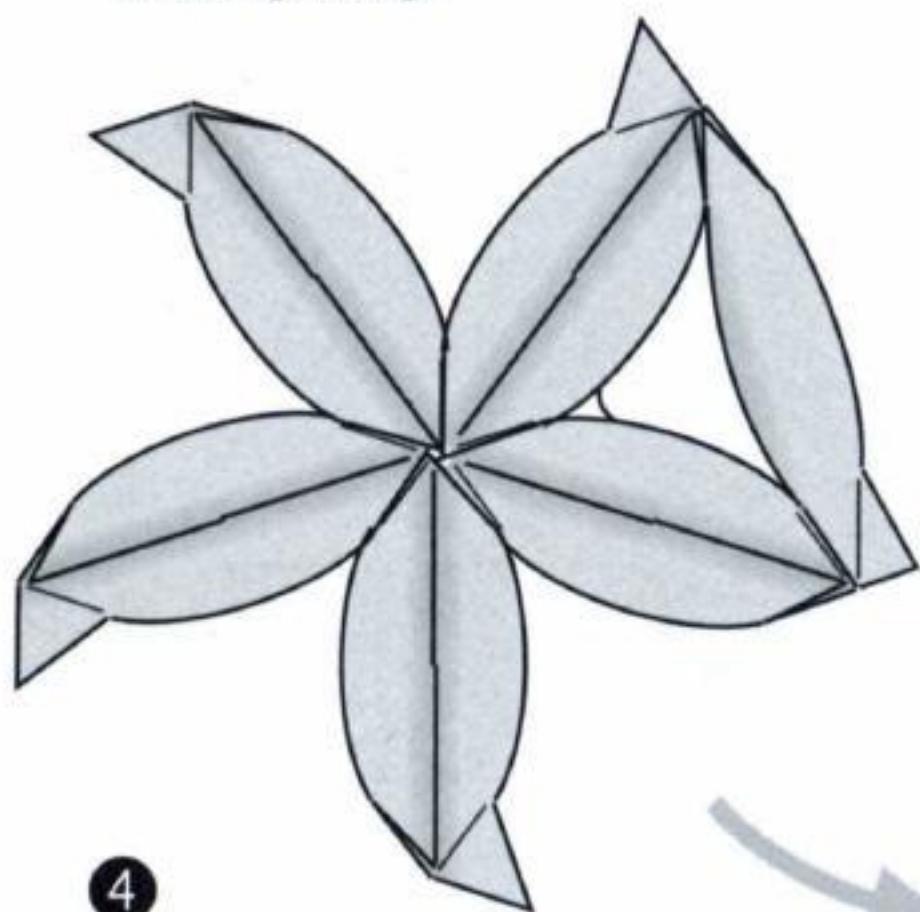
①
差し込む。
Tuck the flap
into the pocket.



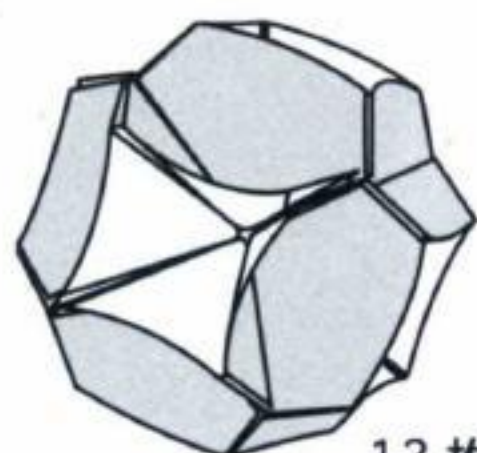
②
差し込む。
Tuck the flaps
into the pockets.



③
穴が 3 角形になる
ように組む。
Assemble and make
a triangle ring.



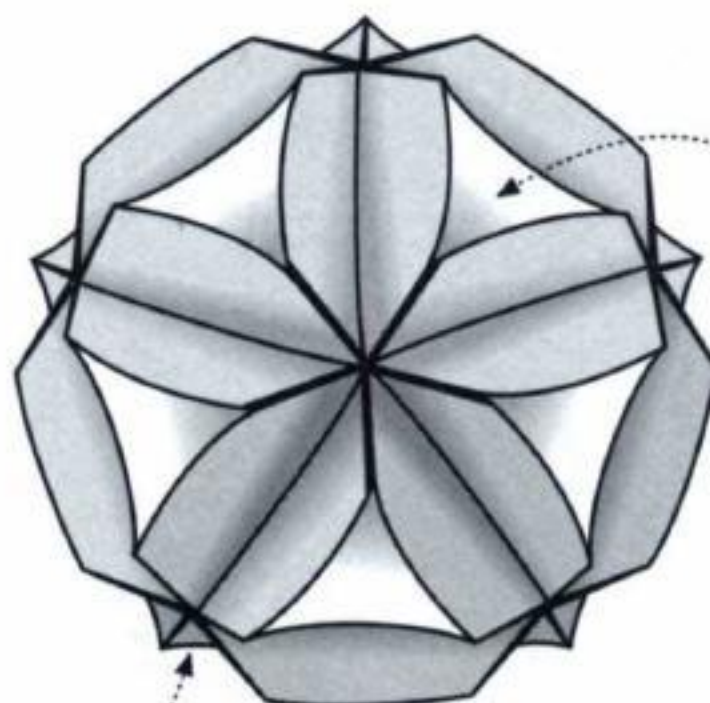
④
残りのユニットも
同様に組んでいく。
Tuck and assemble
the other units in
the same way.



12 枚組
12 units



90 枚組
90 units



「ジオスフィア」
30 枚組
GEOSPHERE
30 units

ここはユニット 5 枚
で出来ています。
This point is formed
with 5 units.

この穴はユニット 3 枚
で出来ています。
This hole is formed
with 3 units.

※ 6 枚では組めません
The model with 6 units
is impossible to make.



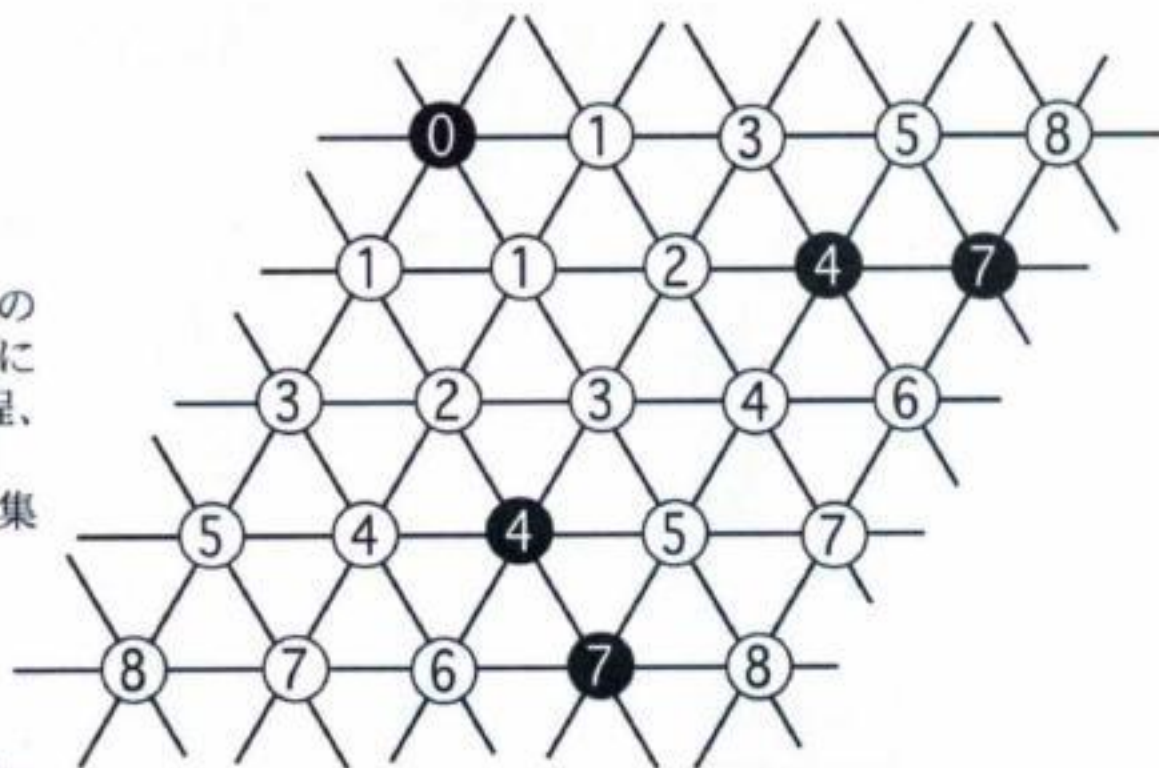
ジオデシック・ドーム Geodesic Domes

正三角形に近い三角形ばかりでできたジオデシック・ドームのような立体は、ジオスフィアのユニットを使うと比較的簡単に作る事が出来ます。ただし使用するユニットの数が増える程、球形にはならず正20面体の形に近付いていきます。

正20面体をベースにしたジオデシック・ドームには辺が5つ集まる頂点が12個あります。それ以外の部分は全て辺が6つ集まっています。5辺の頂点の1つを図の①としたときに、次の5辺頂点がどこにあるかを考えることで様々なジオデシック・ドームを作る事が出来ます。

A model like a geodesic dome which consists of only triangles close to an equilateral triangle can be made comparatively easily, if the GEOSPHERE unit is used. However, it does not become a ball shape but an icosahedron approximated, when the number of the units to be used increases.

There are special 12 points on the surface of a geodesic dome based on the icosahedron. These points have gathered five units and all other points have six units. In this figure the point ① is one of the five-edges point. You can make many designs of geodesic domes by deciding on the next five-edges point from the point ①.



① ユニット 30 枚
30 units



② ユニット 90 枚
90 units



③ ユニット 120 枚
120 units



④ 150 枚
150 units

④ 鏡像
mirror model



⑤ 270 枚
270 units

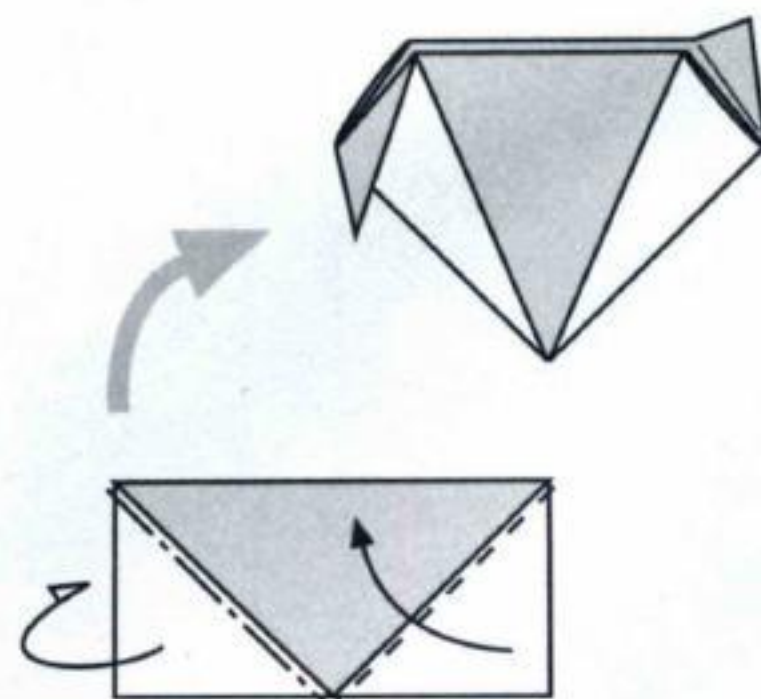
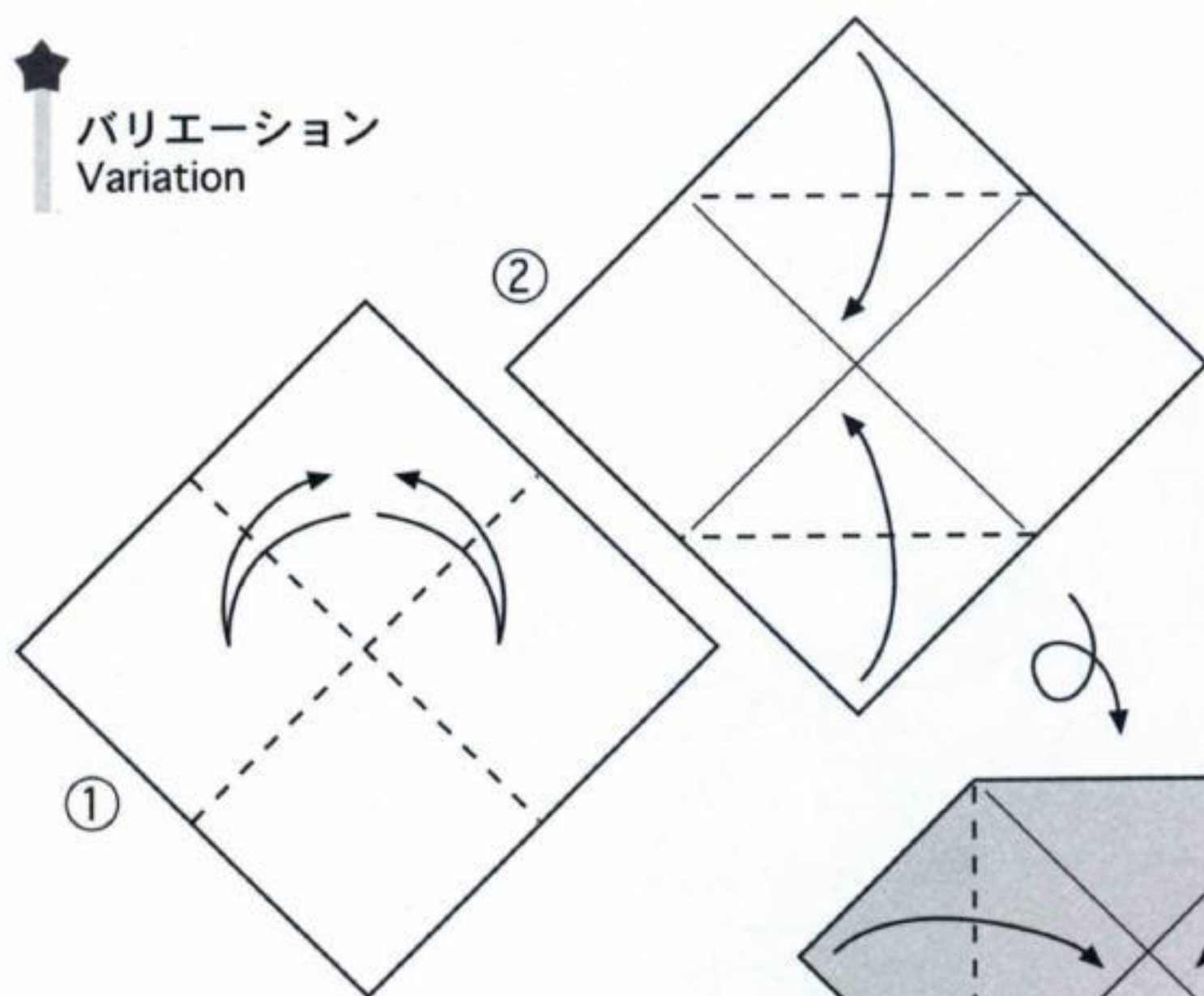


⑥ 360 枚
360 units

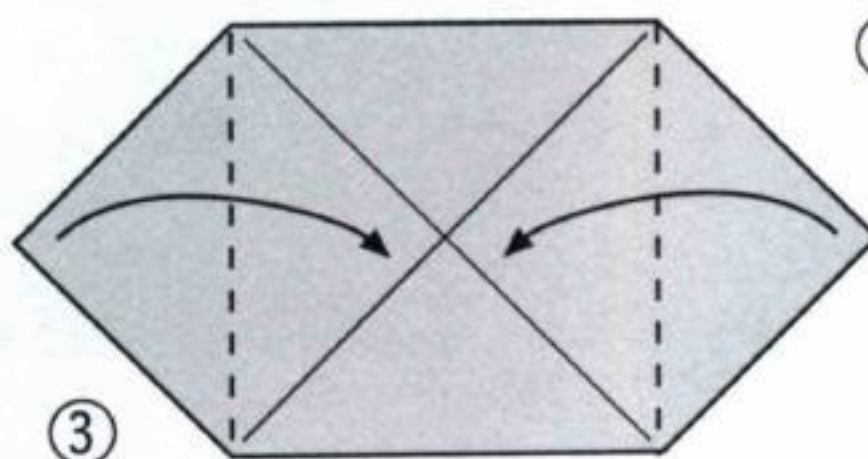
...



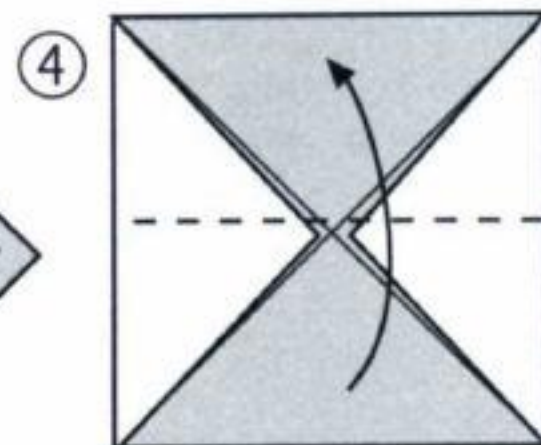
バリエーション Variation



⑤ 後は同様に折る。
Do the same steps.

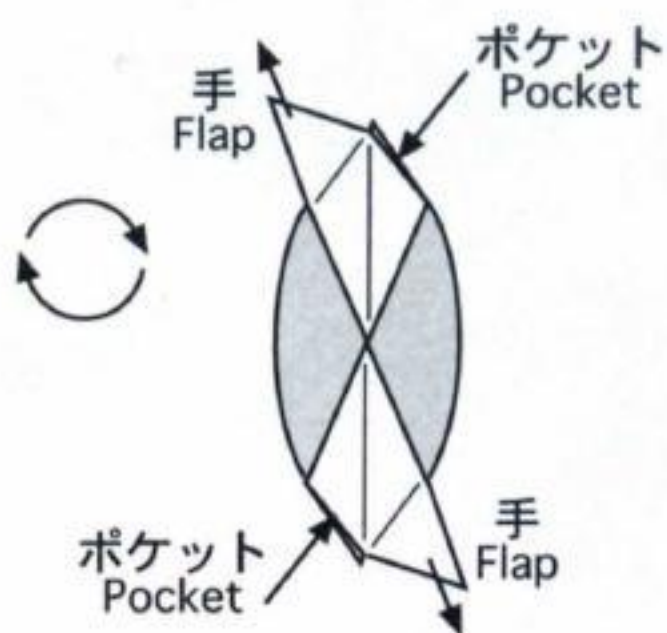


③



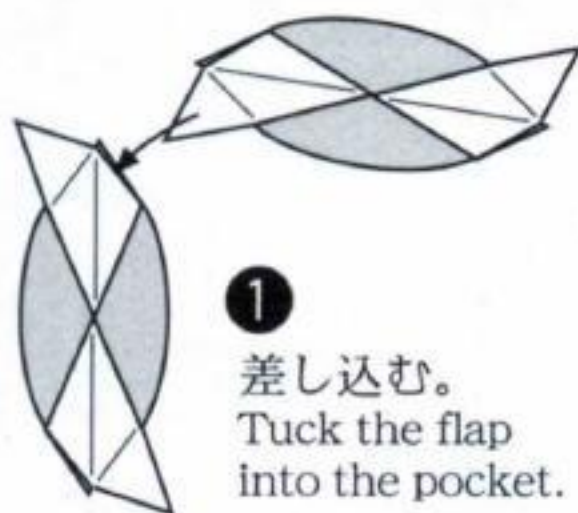
④

組み方 / Assembly



下から見た図
Bottom view.

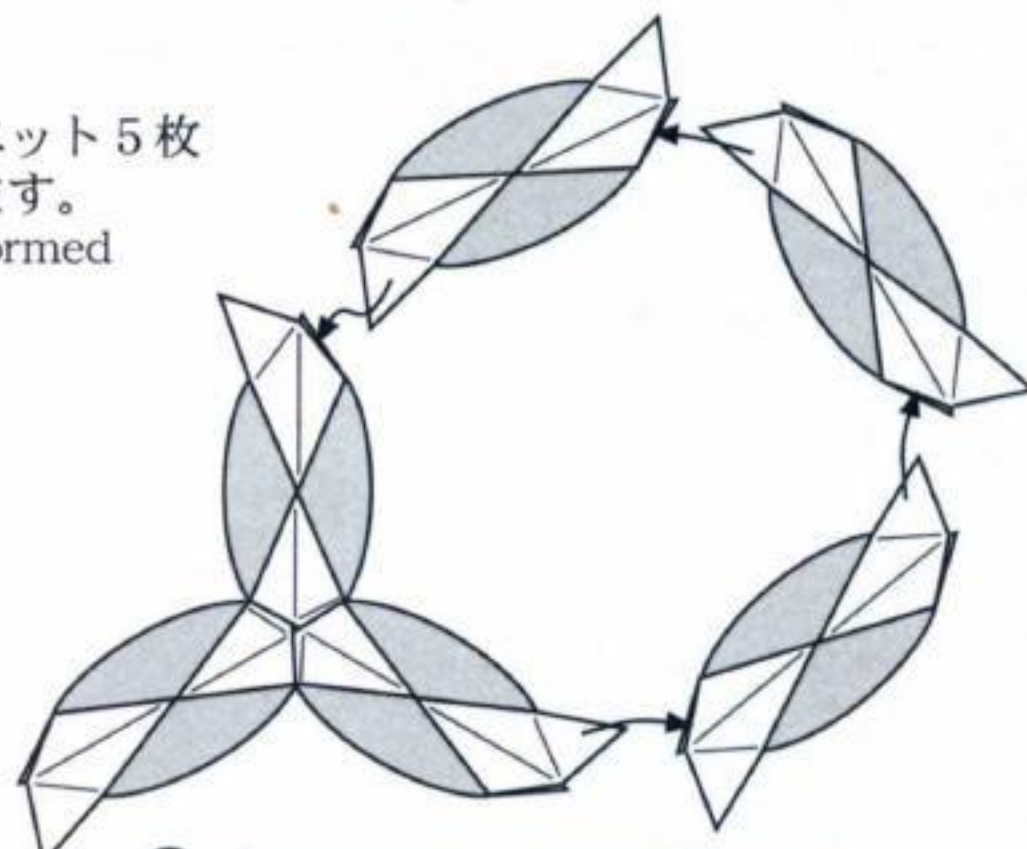
同じものを 30 枚作ります。
You need 30 units.



ここはユニット 3 枚で出来ています。
This point is formed with 3 units.

30 枚組
30 units

この穴はユニット 5 枚で出来ています。
This hole is formed with 5 units.



折り紙の 周辺

第21回 クマが来た ネコが来た A "Carni"val

Origami and
Its Neighbors

布施知子 Fuse Tomoko

昨秋、土蔵の脇の柿の木にクマが来た。実物を見たわけではないが、山側から生ゴミ捨て場を通り柿の木まで、太い大根で判を押したような足跡が点々と続き、ほうら、と指差すタロ氏の先をみれば、やや、これは！柿の木の枝分かれした基部に、枝を折ってたぐりよせたハンモックのような棚ができていた。生ゴミは捨てないように、干し柿も取り込むように、と役場

から指示があった。折しも全国各地でクマに襲われたという報が続出しており、注意して生活した。それまでも鈴をつけていたが、日課の散歩は安全と思われるコースに限定した。とはいえこのあたりはどこも人気なく藪が迫っている。その後も「ひもじいクマ」の足跡は家のまわりのあちこちで見られた。葉が落ちてから気づいたのだが、のんきに栗拾いしていた木にクマ棚が2つもあった。おお、ぶるる！人は野生動物をコントロールできない。自然破壊や温暖化等で結果としてコントロールしてしまうという場合はあっても。

クマ騒動が一段落したころ、ひょんなことから、思いがけなく、山口氏の知り合いから血統書付きのアビシニアン雄を貰い受けることになった。その際にまたひと騒動あり、いろいろな方

にいらぬ心配をおかけしてしまった。ともあれ2人と1匹は機嫌良く新鮮な暮らしを始めています。ありがとうございました。

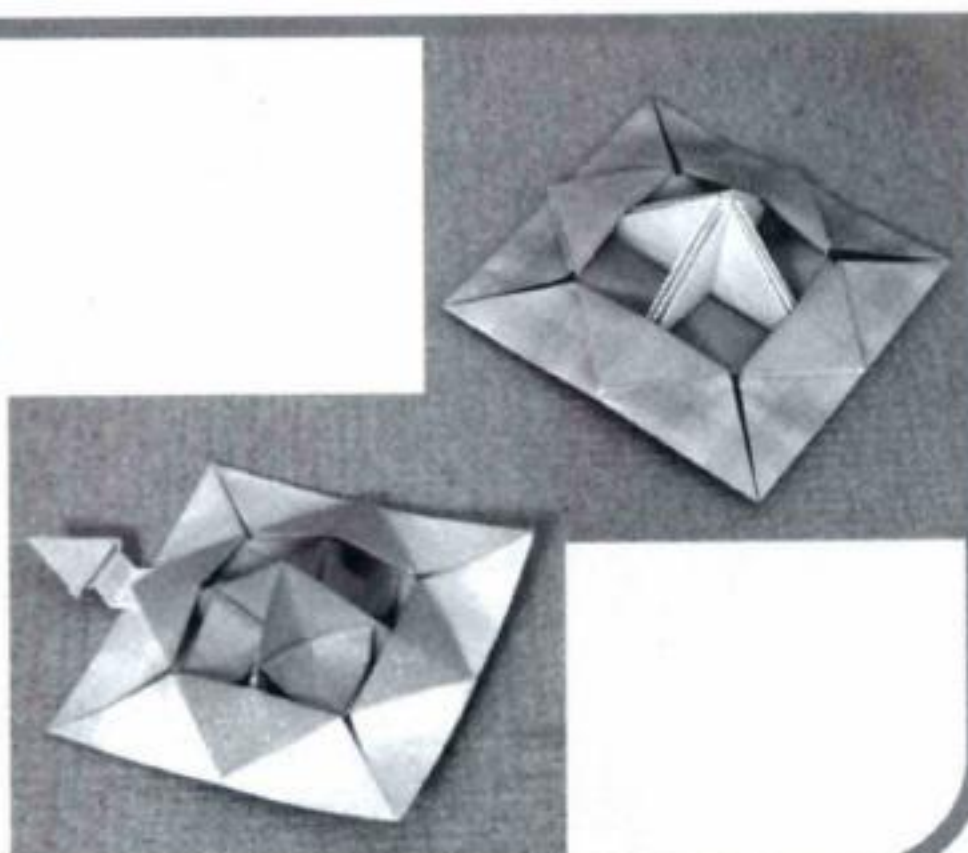
さて、その米(こめ)と名付けたベージュ色のネコは、すらりと筋肉質。小さいけれど力があり俊敏活発。はれはれするような跳躍をみせる。昨年2月に亡くなった亀久とは多くの面で正反対。米を飼い始めたことで、比べるせいか、亀久のこともより鮮明に思い出すようになった。タロ氏の描くネコのプロポーションも大きく変った。お目々きらら、好奇心旺盛、若く身軽にぴゅーんと走り、木登り大好き。おいでといってもつかまるもんじゃありません。

折紙もネコも、なかなかコントロールできません。

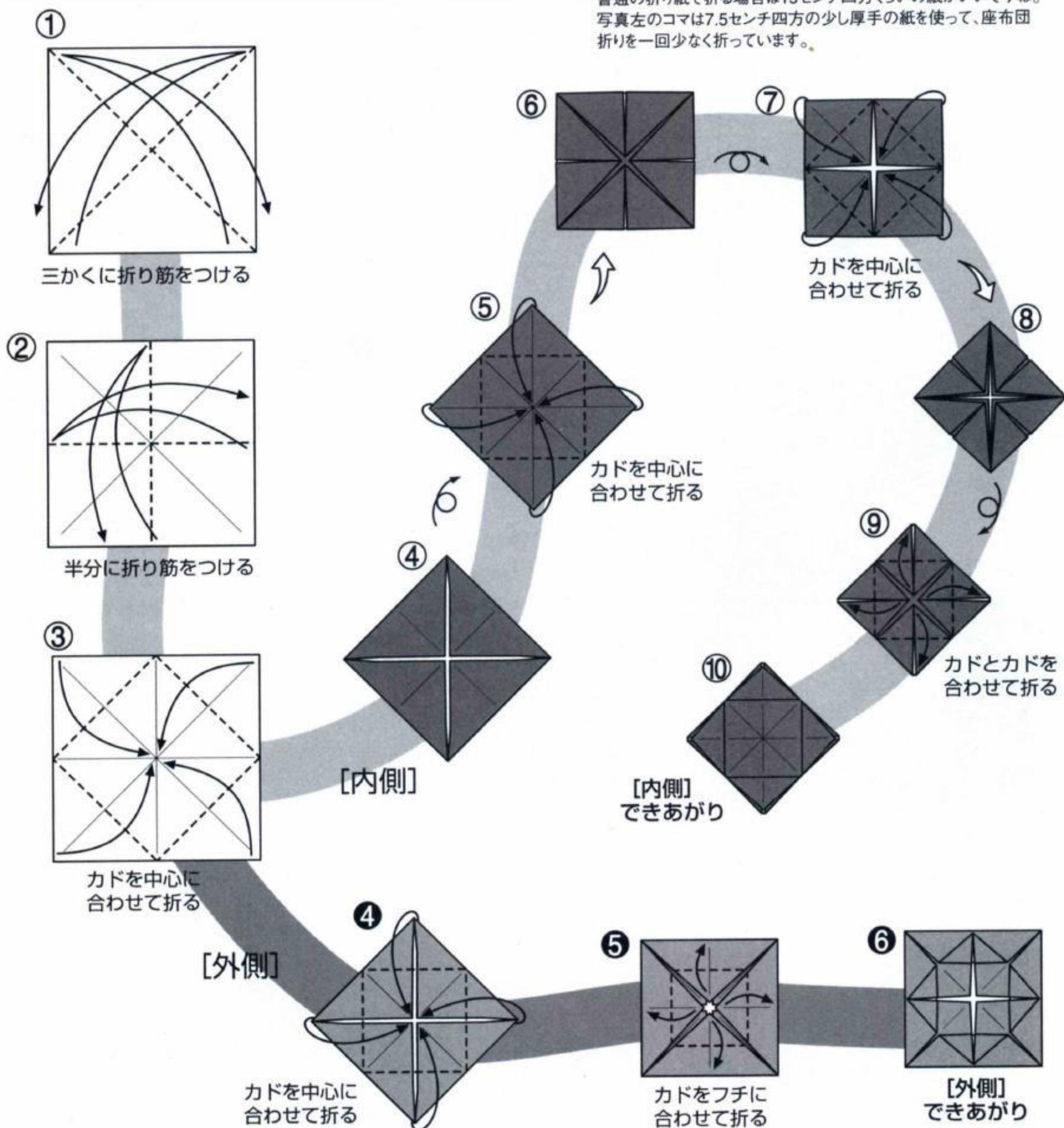
第22回 **マコトコマ**

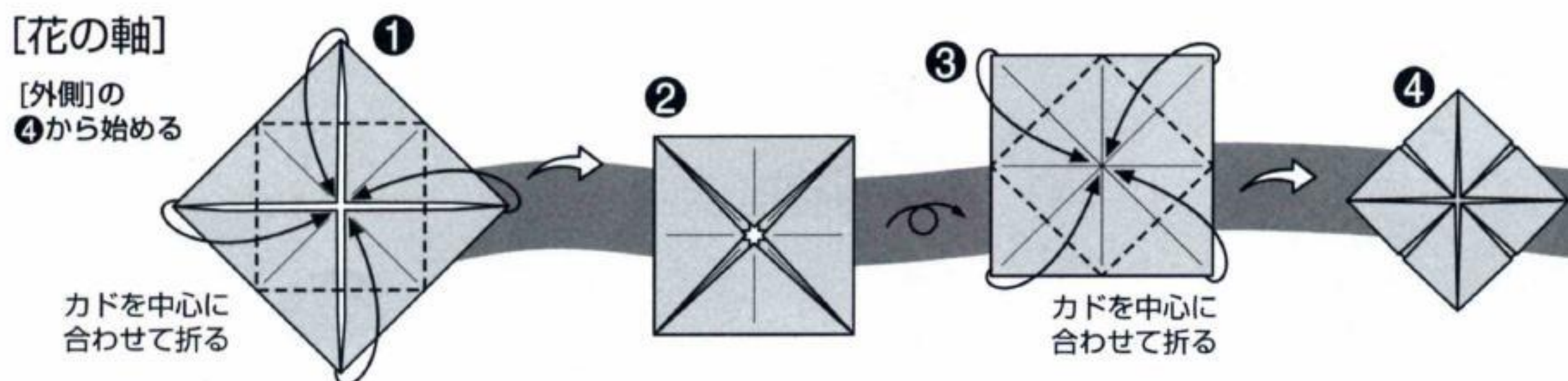
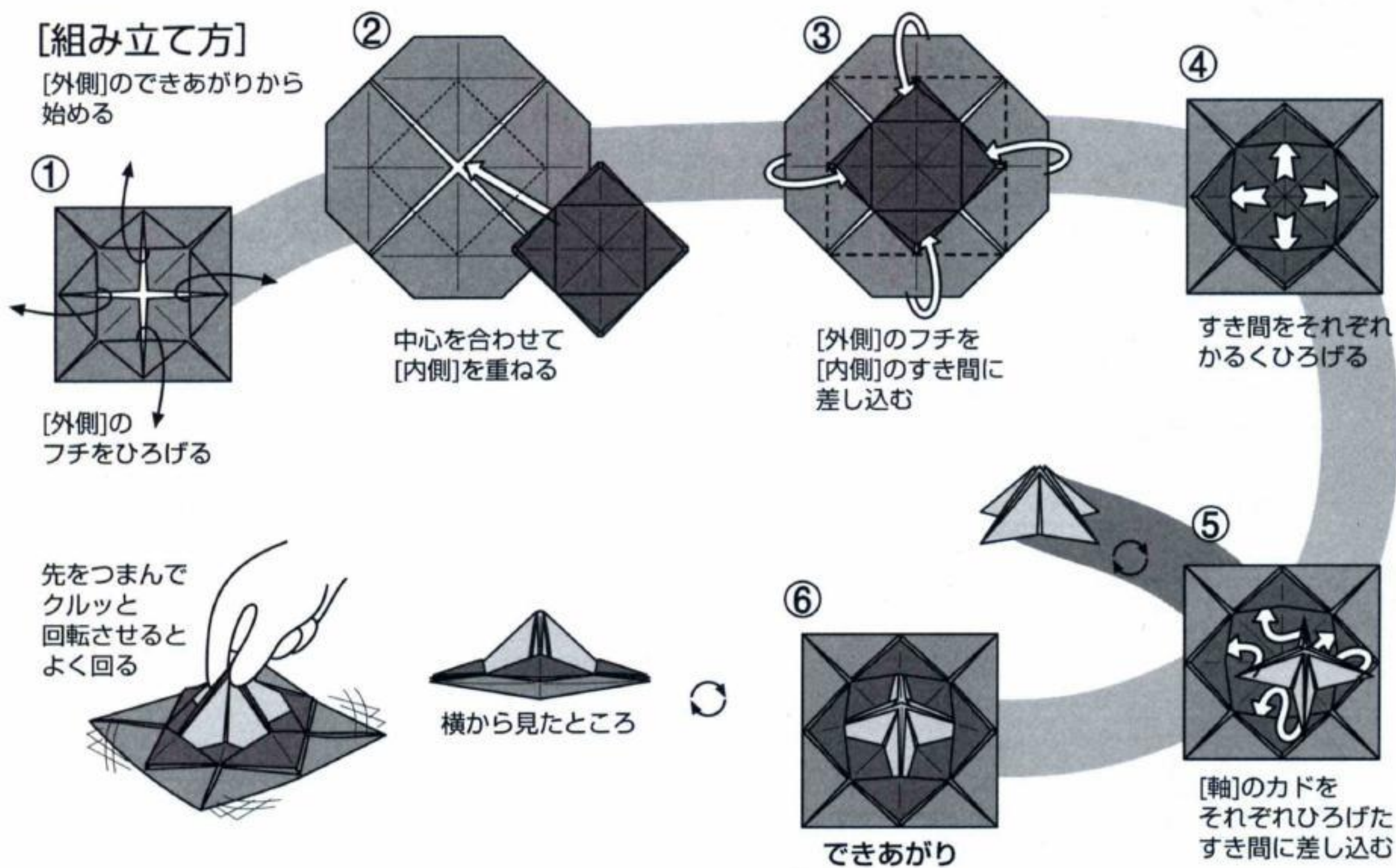
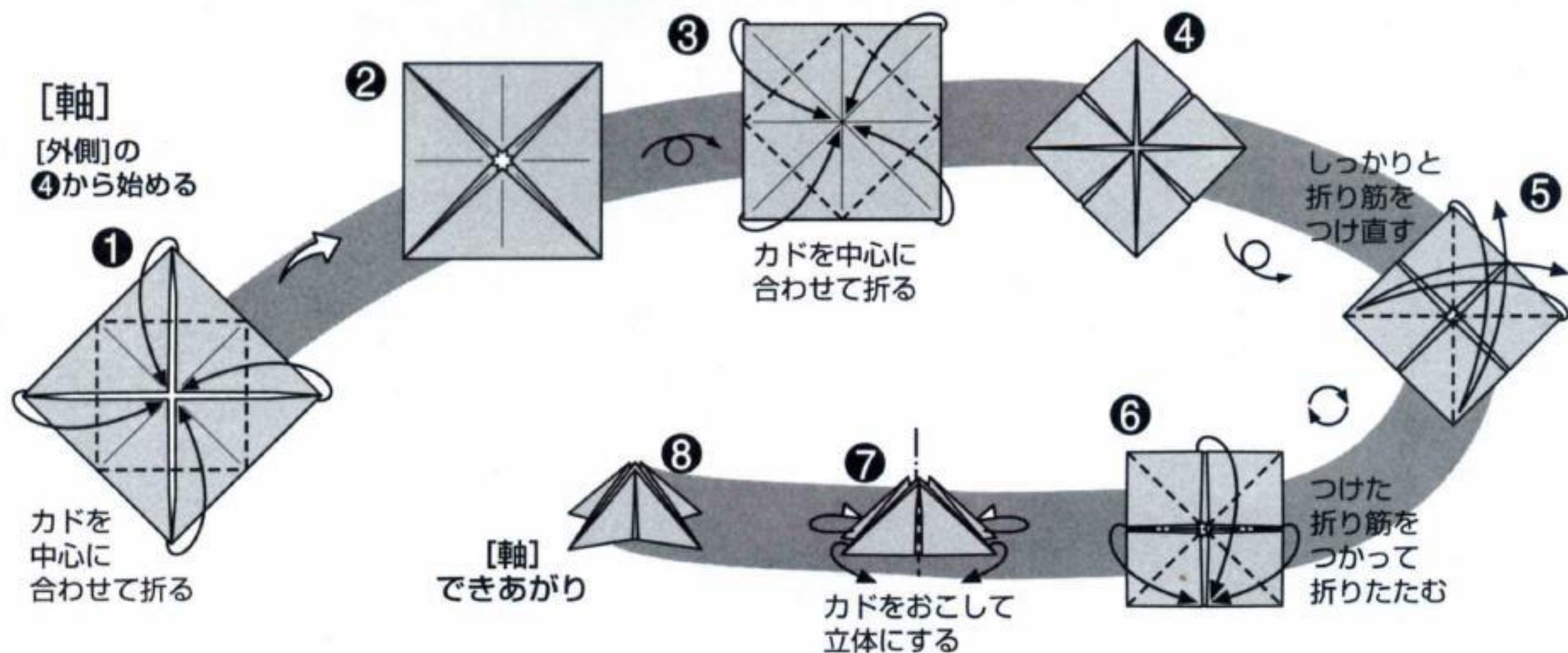
Makotokoma
(The Top of Makoto's)

コマがはやっているというので私も考えてみました。一見、これで回るのかなと思うような形ですが、自分でも驚くくらいによく回ります。昔、縁日などでスモモや、あんず飴などを買ったときにルーレットのように回す盤があったのを思い出し、矢印も作ってみました。



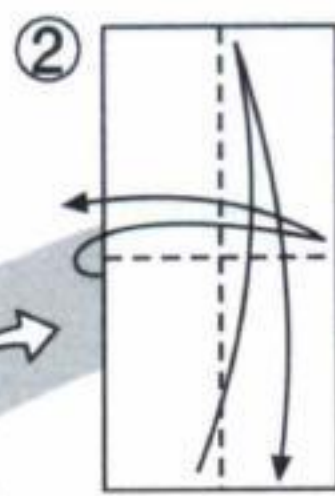
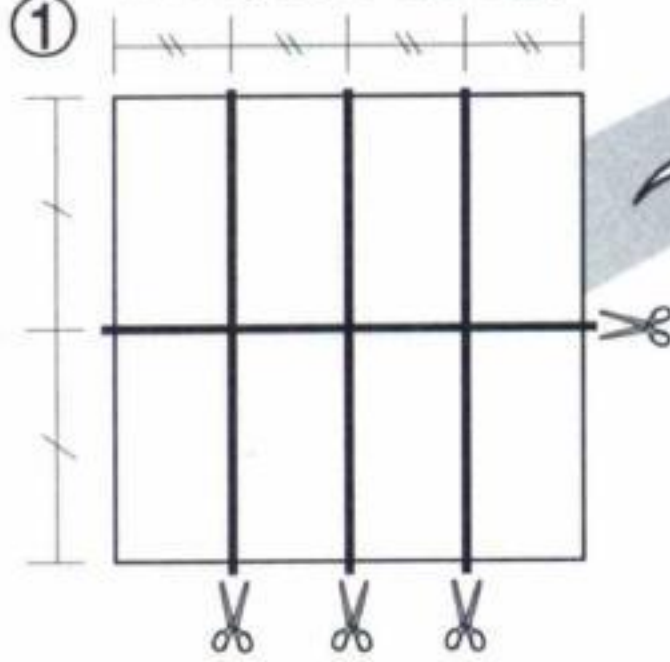
普通の折り紙で折る場合は15センチ四方くらいの紙がいいですね。写真左のコマは7.5センチ四方の少し厚手の紙を使って、座布団折りを一回少なく折っています。



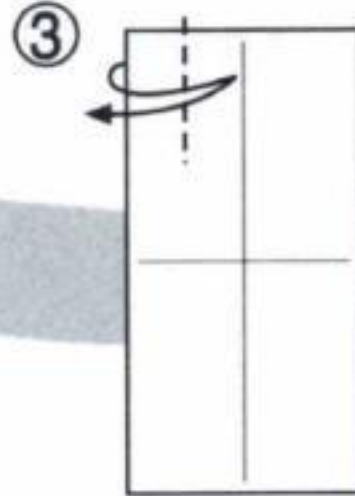


[ルーレットの矢印]

1/8の大きさの紙を使う



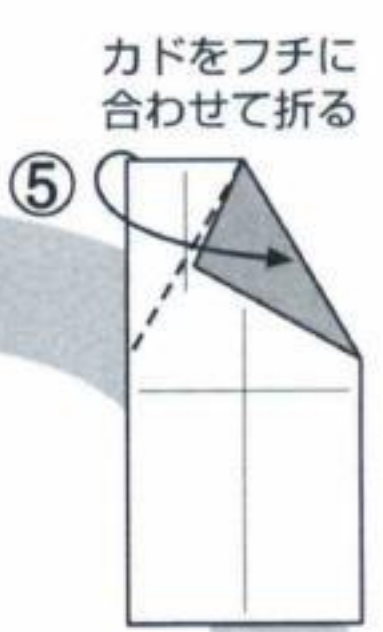
② 半分に折り筋をつける



③ フチを中心に合わせて折り筋をつける

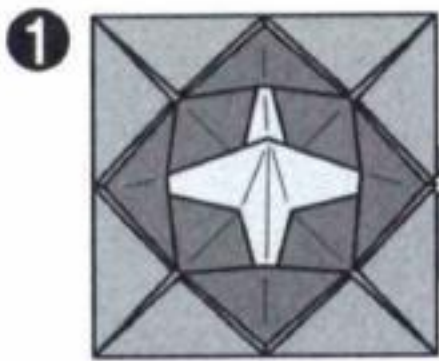


④ カドをつけた折り筋に合わせて折る

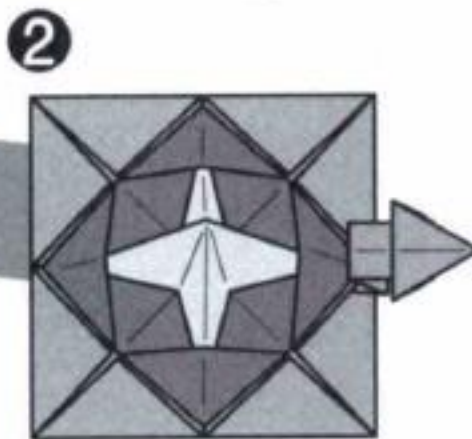


⑤ カドをフチに合わせて折る

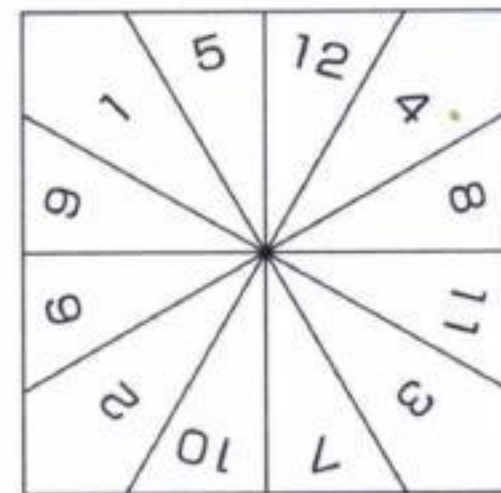
[組み立て方]



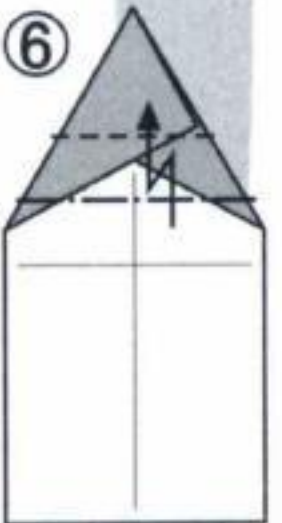
① [矢印]をすき間に差し込む



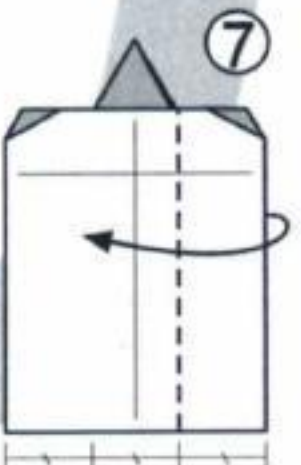
② できあがり



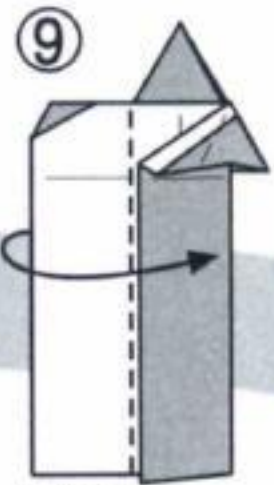
紙に適当な仕切を描いて数字を書いてマコトコマを回して遊びます。矢印が向いたところが当たり、ルーレットや双六にも使えます。遊び方は工夫次第です。



⑥ 段折り

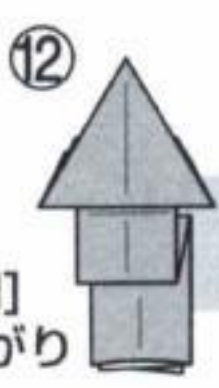
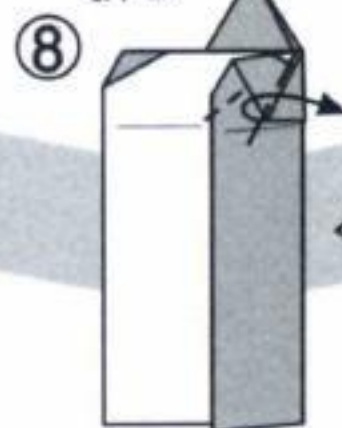


⑦ 1/3くらいのところで折る



⑨ 反対側も⑦～⑧と同じ

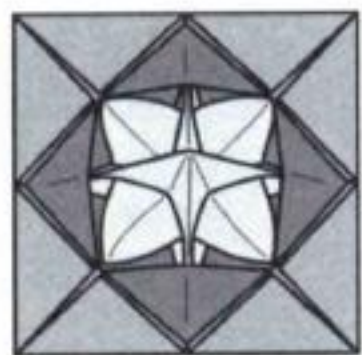
内側をひろげてつぶすように折る



⑫ [矢印]できあがり



⑪ 段折り



上から見たところ



⑫ できあがり

組み立て方は同じ

[花の軸]できあがり



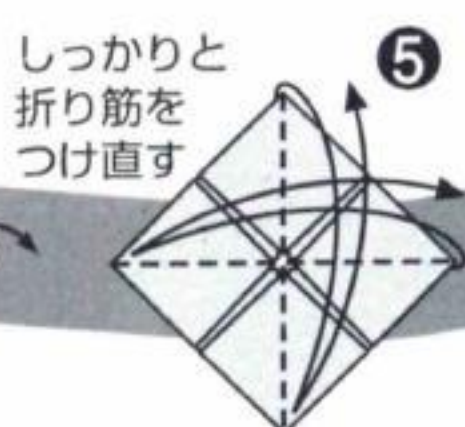
花びらのように少し丸みをつける



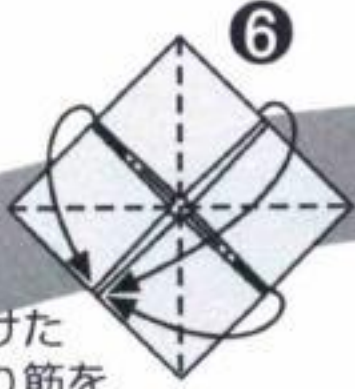
⑩ ついている折り筋を使って立体にする



⑨ カドが少し出るように中わり折り



⑤ しっかりと折り筋をつけ直す



⑥ つけた折り筋をつかって折りたたむ



⑦ カドが少し出るように中わり折り



⑧ ⑦で折ったカドをもどしながらそれぞれ反対側に折る

折紙探偵団新聞 創刊のころ

Origami Tanteidan: The Very Early Days

木村良寿 Kimura Yoshihisa

探偵団結成

折紙作家の山口真さんが、東京都文京区白山にギャラリー「おりがみはうす」をオープンしたのは1989年4月でした。その時の場所はやはり都営地下鉄白山駅の近くですが、道路の反対側の現在とは別のビルの2階でした。床面積も今の半分以下しかありませんでした。

「ギャラリー」とあるように、当初は折り紙作家諸氏の作品展を1ヶ月単位くらいで開催していました。美術館で言えば企画展のような物です(現在は常設展の状態でしょうか。少しずつ作品は入れ替わっています)。

そして89年の11月には、当時若手と言われていた西川誠司さん、吉野一生さん、そして私の3人で、「恐竜おりがみ



▲恐竜三人展の案内ハガキ

三人展」を行いました。これがきっかけとなって、おりがみはうすに折紙作家、愛好家が集まるようになり、折紙探偵団(編注=折紙探偵団の名称発案は筆者の木村氏。また折紙探偵団初代代表)が結成されたのです(なーんて書くと、最初から現在の陣容が集結していたかのように聞こえてしまうかもしれませんが、実際には上記の4人を含めても10人前後というところでしょうか。その時には前川さんも川崎さんも、もちろん北條さんも神谷さんも参加していませんでした)。

探偵団結成はたしか90年の1月末くらいだったと記憶しています。そして

「同人誌も作ろう」となって、4月初めには折紙探偵団新聞が創刊されたのでした。そう、現在のマガジンと比べると本当に同人誌でしたねえ。

この頃の様子は、第55号(探偵団マガジンとしては最初の号)掲載の座談会「折紙探偵団:歩いてこれた10年間」で詳しく語られていますが、55号自体が品切れでもありますので、内容が重複するとのお叱りを覚悟の上で続けさせていただきます。

創刊号(1990年4月5日発行)

それでは最初の1年間の内容を紹介してみます。創刊号はわずか8ページ。今と同じく隔月刊で、年会費は900円です。執筆者各自がワープロやパソコン(一太郎Ver.4など)で文章を印刷してきて、編集者経験も長い山口さんが、写植の要領で台紙に貼り合わせるという疑似DTP(デスクトップパブリッシング)。年賀状の大部分がパソコン製の昨今とは隔世の感があります。そういえばDTPなんて言葉、今では当たりすぎて一々言うようなことではなくなってしまいました。



▲探偵団新聞創刊号表紙

巻頭記事は西川さんの論文「折り紙批評体系」です。探偵団のサイトに再録されていますので、内容は現在でも読むことができます。URLはhttp://origami.gr.jp/People/NSKW_hihyo.htmlです。

次に岡村昌夫さんの書評「ピーター・エンゲルの大労作『おりがみ全世界』を読んで」です。実はエンゲルさんの著作の書評というより岡村さんの「折り紙の歴史」研究の序章と言うべき物かもしれません。

折り図は吉野さんの「プロントサウルス」1作だけです(この属名が時代を感じさせる。今ならアパトサウルス)。この折り図だけはマッキントッシュのFree Handというソフトで作成されています。現在の日本におけるコンピュータ折り図の草分けで、吉野さんは先駆者であり布教者であったと言えるでしょう(編注=折り紙仲間にFreeHandが使われるようになったのはアメリカのジョン・モンテロー氏の影響であった。故、吉野氏もモンテロー氏から手ほどきをうけた)。

最後のページには現在も続く最長の



▲故、吉野一生氏の「プロントサウルス」折り図

折紙探偵団新聞 創刊のころ

Origami Tanteidan: The Very Early Days

木村良寿

Kimura Yoshihisa

連載記事「おりすじ」。第1回は高井弘明さんの「なぜ、折るのか」です。この「おりすじ」は「私と折り紙」という内容なら何でも良しで、誰でもいいから目にとまった人に依頼することになっていますので、近い将来あなたの文章が探偵団マガジンに載ることになってしまうかもしれません。

そして、なぜか変な4コマ漫画「やなみくん」が載っています。主人公のやなみくんとこびやしくんは世浪健さんと小林昭範さんです。かなり実話に基づいています。作者の世間亭キニスキーは私なのですが、探偵団例会の常連でもかなり長い間気がつかない人もいました。



▲「やなみくん」左：第四話。当時のおりがみはうすの目印は黄色いテントだった。右：第六話。1期目は2人ともまだ大学生だった

▶モデルになったこびやしくんこと小林昭範氏(大学生当時)。今は何処にいるのやら



第一期 2号～6号

(1990年6月5日～1991年2月15日発行。あ、発行日がずれてる)

これ以降は、連載や主な記事についてまとめて紹介します。

□連載

巻頭論文「折り紙批評体系」は6号まで連載されます。

○私の好きな折り紙 目黒俊幸 2, 3, 5号掲載

折り紙の技法に視点を当てたエッセイで、川崎敏和さんの「まき貝」、前川淳さんの「らくだ」、蛇腹折りを取り上げています。当時は目黒さんは大学院生でした。

○折り紙異人館 布施知子 3～6号掲載
海外の折り紙作家、普及活動家を紹介しています。何度も来日されているトニー・チェンさん、ジャン・ポーリッシュさん(編注=ジャン・ポーリッシュさんは昨年の名古屋コンベンションのスペシャルゲスト)、OrigamiUSAの前身「フレンズ」の会長でしたが、残念ながら10年余り前に亡くなられたマイケル・シャルさんら

に取り上げられていますけど、イラストがこんなじゃ可哀想(あ、描いたの俺だ)。

○おりがみ庵 岡村昌夫 5, 6号掲載
長期連載の「おりがみ庵」ですが、5号というちょっと中途半端な時に開始されています。千羽鶴折形、かや草といったスタンダードナンバーからスタート。初期掲載分は探偵団のサイトに再録されています。http://origami.gr.jp/People/OKMR_/origamian1.html

○おりすじ 題名と筆者だけ。5号は数少ない休載号です。

2号「なぜ、折るのか」岡村昌夫、3号「おりがみ山」やまぐち まこと、4号「折り紙はん、おおきに」野間正路、6号「なぜ、折るのか」榎本宣吉

□単発記事

○コンピューターを使った未来の折り紙 高井弘明 2号掲載

高井さんは仮想空間内でのみ可能な折り紙について考察しているのですが、ここ2, 3年でそろそろ実践が始まっているようです。

○'90折紙シンポジウム in 広島レポート 4号掲載

○第8回世界のおりがみ展制作レポート 5号掲載、第8回世界のおりがみ展観戦レポート 6号掲載

どちらも日本折紙協会(NOA)のイベントです。元々、初期主要メンバーの多くは折紙協会会員だったこともあって、今はほとんど載らないNOA関係の記事が比較的あります。

□折り図

2号「プロトケラトプス」川畑文昭
3号「禁断のペア(はさみ&のり)」目黒俊幸・西川誠司
4号「ティラノサウルス」吉野一生
5号「ブラキオサウルス」川畑文昭
6号「ティラノサウルスの頭骨」吉野一生



▲折紙異人館。上、ジャン・ポーリッシュ氏(右上)とトニー・チェン氏(中央)。タイトル左は布施知子氏



▲マイケル・シャル氏(右上)

木村良寿(きむら・よしひさ)=1959年生まれ。
 今回昔の手書きのなさけない絵を載せることになって
 しまい汗顔の至りです。最近ではパソコンでの絵すら減
 多に描いてません。



▲3号の「禁断のペア(はさみ&のり)」

なんと、3号を除いて全部恐竜じゃない
 ですか!

折紙探偵団と恐竜

「ティラノサウルスの頭骨」は全身骨
 格の一部なのですが、この後7号から残
 りの部分の折り図に続いてゆき、11号で
 全身が完成します。

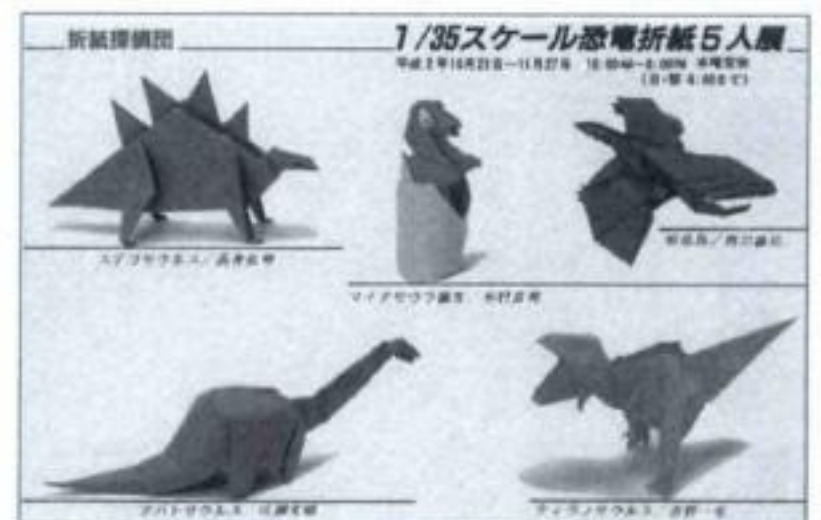
元々探偵団結成のきっかけが「恐竜
 おりがみ三人展」だったこともあってか、

初期の探偵団の活動は恐竜と関わるこ
 とが非常に多かったのです。そもそも、
 1990年は幕張メッセで(つまり、デパー
 ト・博物館級よりも広い大イベント会場
 で)大恐竜博が開催された年で、現在
 まで2,3年毎に繰り返される恐竜ブーム
 の最初の波であったように思います。
 90年8月には、日本橋三越で「もう一つ
 の恐竜博」という恐竜愛好家グループ:
 恐竜倶楽部主催のイベントが行われま
 した。それに探偵団も参加して、折り紙
 恐竜を展示するほかに、6.5mの紙を
 使って巨大折り紙を作るという実演も行
 いました。作品は創刊号の吉野さんの
 プロントサウルス。三越1階のホールで7
 人がかりで折りあげました。これに関し
 ては4号に高井さんのレポートが載って
 います。巨大折り紙はそれ以前、90年4
 月に西川さんと山口さんが、苦小牧の
 大昭和製紙で西川さん作のティラノサ
 ウルスを折っていますが、この経験が生
 かされたということでしょう。そして巨大
 折り紙の伝統は現在年3回の探偵団コ
 ンベンションにおいても受け継がれて
 いるのです。

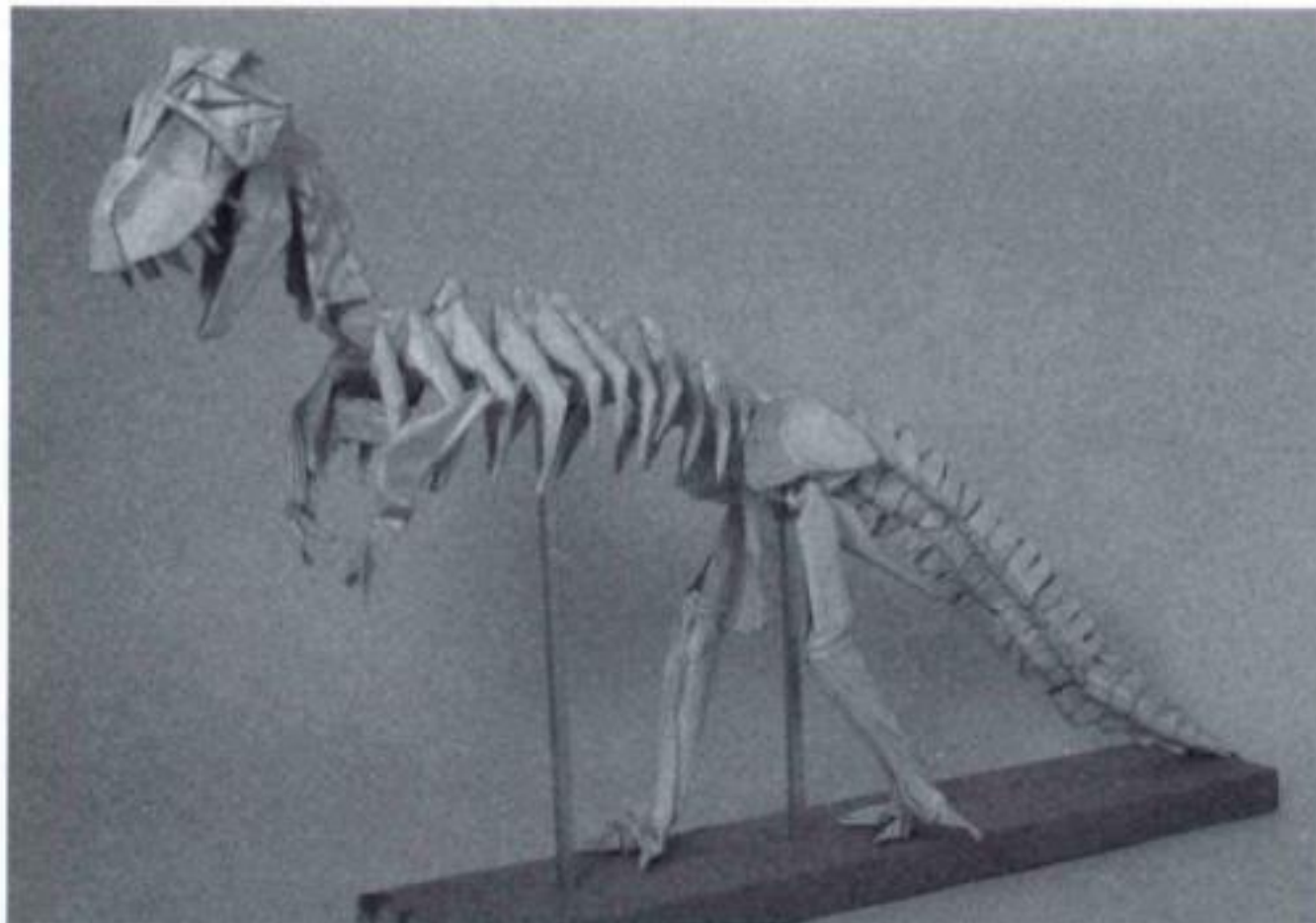
その後「三人展」のほぼ1年後、川畑



▲大昭和製紙の苦小牧工場。工場からできたば
 かりの6メートル四方の牛乳パックの紙を使って折
 られた西川誠司氏のティラノサウルス
 さんと高井さんを加えて90年10月25日
 から1ヶ月間、「恐竜おりがみ5人展」をお
 りがみはうすで行いました。さらに前出
 の「第8回世界のおりがみ展」(91年1月、
 渋谷東急東横店)でも探偵団メンバー
 の担当は恐竜ブースでした。まさに恐竜
 に明け恐竜に暮れた探偵団1年目でした
 が、恐竜はまだまだ続くのでした。



▲恐竜5人展の案内ハガキ



▲吉野一生氏のティラノサウルス全身骨格・第1作目。最初の作品は後に折り図になっ
 た物とはかなり異なる。創作、製作故、吉野一生(おりがみはうす蔵)



▲吉野一生氏の著書『ティラノサウルス全身骨格折図』で使われた
 ティラノサウルス全身骨格。創作、製作故、吉野一生(おりがみはうす
 蔵)。『ティラノサウルス全身骨格折図』は絶版

Afternoon Origami

第11回 CDOベルバニア・コンベンション、2006年12月

CDO Verbania
Convention 2006/12

イタリアでの折り紙といえば、私には楽しい思い出が数多くあります。1977年7月のフローレンスで、地元のロベルト・モラッシさんとジョバンニ・マルタリアーティさんに会ったのが、私が海外の折り紙友達を訪ねた最初でした。その2人が、翌1978年、CDOを創設しました。CDOは、会合に吉澤章さんを招待したり、また別の機会には高濱利恵さんを招待したりして、活動的な団体だという評価をまもなく確立しました。1983年には、童話『ピノキオ』の出版100周年を祝って、ピノキオの登場人物や場面をテーマにした折り紙展を開催し、私は再びフローレンスでオープニングに出席しました。

初期のコンベンションの1つ、1985年にシエナ近郊のパラッツォ・アル・ピアノで開かれたものには、私はエリック・ケネウェイさんと参加し、美しいトスカーナ地方を旅しました。はにかみ屋で内気な私たちイギリス人から見ると、イタリアの折り紙人たちは大らかで楽しいことの好きな性格で、そのためコンベンションの雰囲気も、私たちがBOSで慣れ親しんでいたような比較的まじめな雰囲気とはまったく異なっていました。もう1つ忘れられない旅といえば、1988年にペローナで開かれた第10回記念CDOコンベンションです。なんと、そのときのスペシャルゲストには、笠原邦彦さん、藤本修三さん、布施知子さん、阿部恒さんがいました。

そういうわけで、年に1度、通常は10月

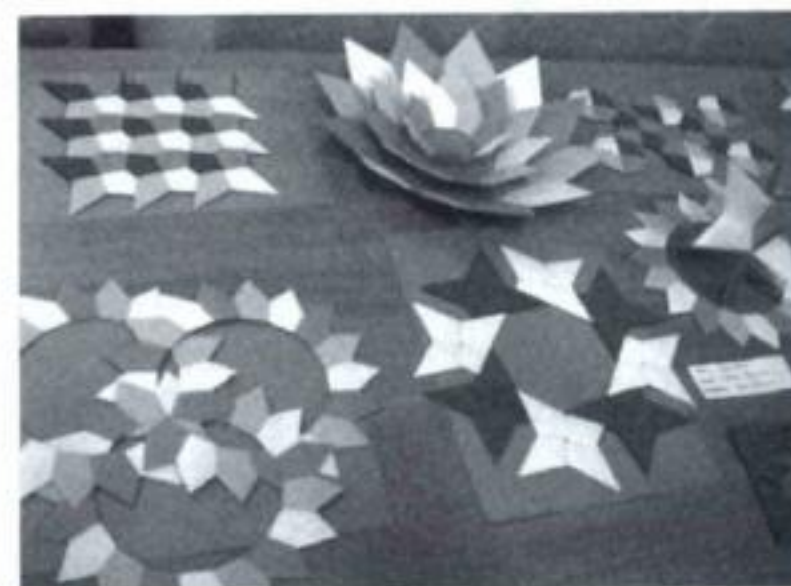
か12月ですが、CDOのコンベンションに行くというのが、私のカレンダーに欠かせないものになりました。

最近のボローニャ、フローレンス、サン・マリノでのコンベンションを訪れたのに続き、2006年12月の初め、イタリア北部、スイスと国境を接するマジョーレ湖畔のベルバニア・パラッツォで開かれたコンベンションに参加しました。ミラノ・マルペンサ空港から列車で北へ、イタリアン・アルプスに向けて1時間ほど旅すると、コンベンション会場に着きます。3日間のコンベンションの期間中、12月8日から10日までは、残念ながら(あるいは良かったのかもしれませんが)ひどい天候で、私たちはみな折ることに専念することができました。国内外から180人の参加者がホテル・カスタンニョーラに集い、ロベルト・グレッテルさんとドナテッラ・ギージさんの指揮の下、併設された会議場でプログラムが進行しました。この建物は、かつては大規模な大学だったそうです。

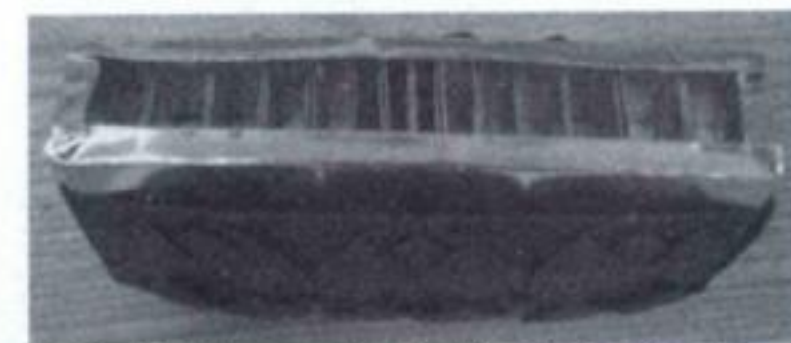
今回のスペシャルゲストは、マドリッドのフェルナンド・ヒルガド・ゴメスさん(<http://www.pajarita.org/usuarios/gilgado/>)と、ベルリン近郊ブランデンブルクのラルフ・コンラッドさん(<http://www.origami-online.de/>)でした。

彼らはそれぞれ、多様な作品を展示していました。ヒルガドさんは自然な形や人物を上品なユーモアと組み合わせています。コンラッドさんの平織り作品にはとても小さいものもあり、信じがたいほどに完璧な正確さが現れています。

ほかに目に留まった作品は、パウロ・バ



▲Variations with one unit by Paulo Bascetta
パウロ・バセッタ作、1つのユニットのバリエーション



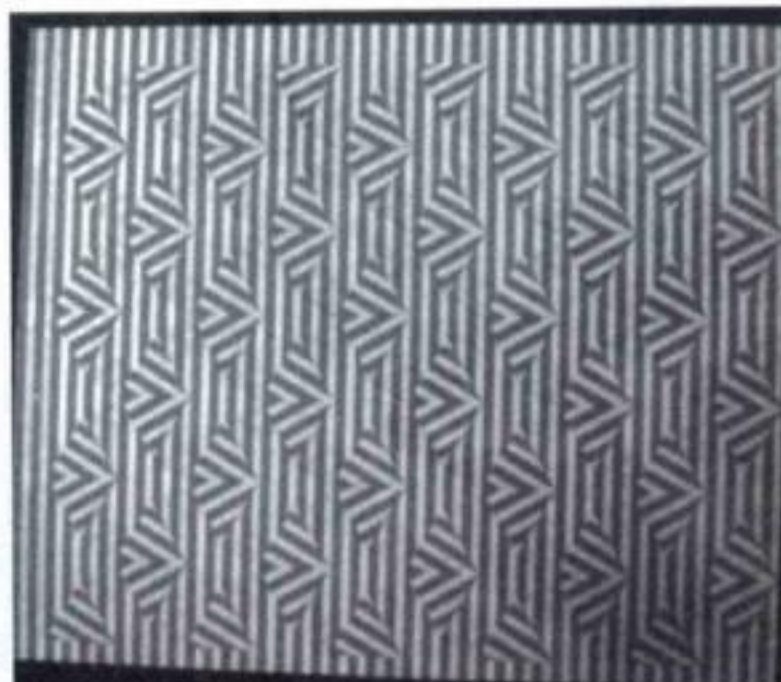
▲Working harmonica by Pasquale Dauria
パスカル・ドーリア作、吹けるハーモニカ



▲Cut and fold scene by Alfredo Giunta
アルフレード・ギンタ作、切りと折りによる情景



▲Figures by Fernando Gilgado
フェルナンド・ヒルガド作、人物作品



▲Tessellation by Ralf Conrad
ラルフ・コンラッド作、平織り作品



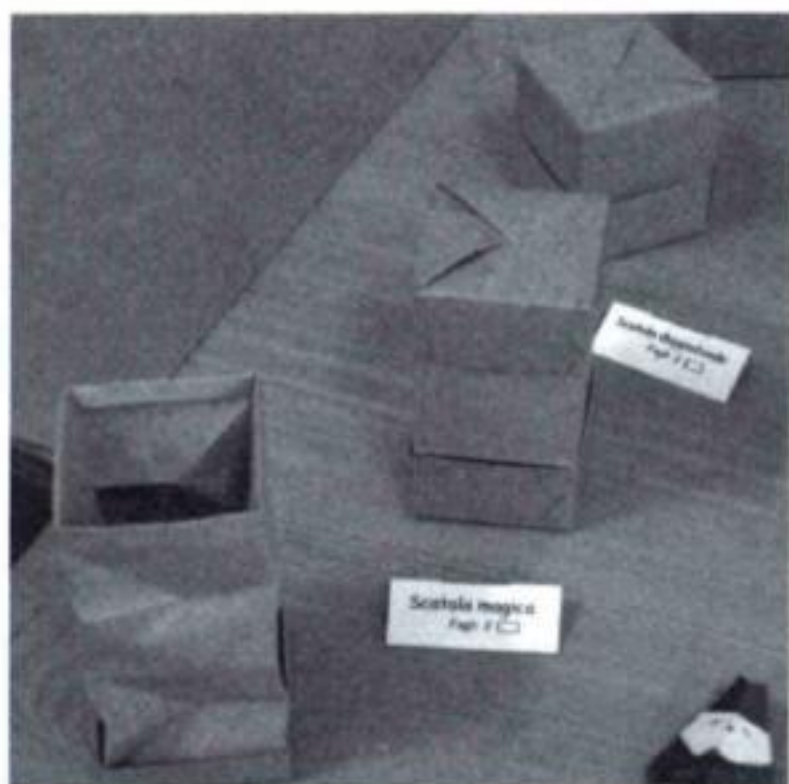
▲Verbania Landscape
ベルバニアの風景

セッタさんの、1種類のシンプルなユニットをさまざまに組み合わせた幾何学的なタイル作品、パスカル・ドーリアさんの実際に吹けるハーモニカ、アルフレード・ギュンタさんの切りと折りを使った美しい作品、フェデリコ・スカランブラさんの折り畳める箱と花瓶、シルバナ・ベッティ・マミーノさんの正十二面体、エリック・ジェルデさんの平織り作品、シッフォ・マボーナさんの人物と昆虫、ナターレ・フィエッタさんの曲面を使ったユニット作品、ヘルマン・バン・グーベルジャンさんの新作「夜を渡る船」などです。ヘルマンさんの新作にはいつも興奮させられます。今回の作品は、動く作品で、段折りされた「海」をゆっくりと動かすと、2艘の船が同時に反対方向に動きます。



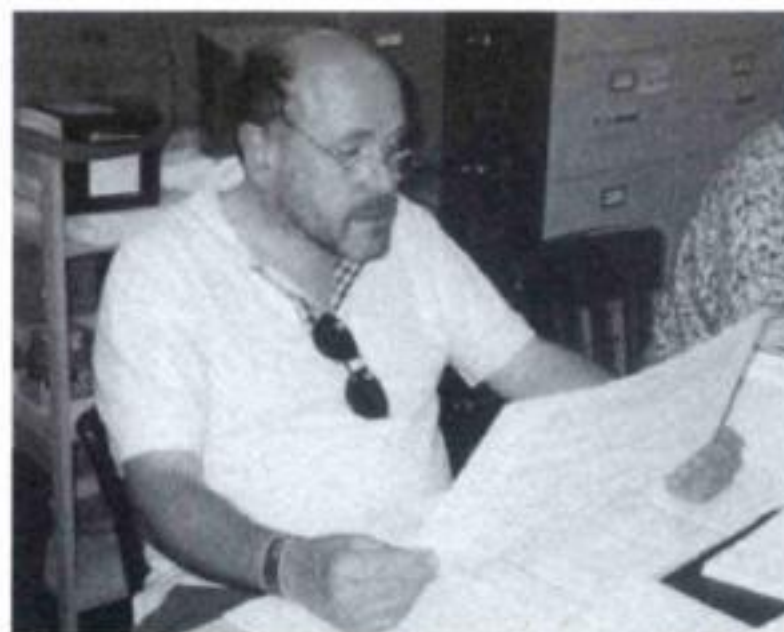
▲Herman Van Goubergen teaching
講習するヘルマン・バン・グーベルジャン

3日間のあいだ、教室が休みなく続きました。ゲストの2人にはそれぞれ専用の部屋が割り当てられましたが、そのほかの講師は大きなホールを分けあい、6つほどのテーブルに生徒が集まって折ったりしゃべったり笑ったりしていました。また、CDOの元会長ルイザ・カノー



▲Collapsing boxes by Federico Scalambra
フェデリコ・スカランブラ作、折り畳める箱

○David Brill(デビッド・ブリル)=イギリスを代表する折り紙作家の1人。1975年よりBritish Origami Societyの活動に積極的に参加、代表も務めた。折り紙以外の趣味は油絵。



ヘルマン・バン・グーベルジャン作の「新聞を読む人」?

ビさんが墨流しの講習を何度かしていました。これには折る行為と似たところがあり、興味深いものでした。私も少人数の教室に参加し、静かな部屋でじっくりと、この日本の芸術を堪能しました。周りが騒がしく活気に満ちていたのとは正反対の雰囲気でした。

大きな販売コーナーもあって、参加者はさまざまな国のさまざまな本を購入することができました。吉澤さんの『創作折り紙』(日本放送出版協会・1984年)の韓国語版があって、韓国の人の見たことのない作品が加えられているのを見たときは驚きました。誰が許可したのでしょ。紙やCDOの出版物も購入でき、お店はいつもお客さんで一杯でした。

「水」をテーマにしたコンテストも開かれました。湖がすぐそばにあって、天から雨がたえまなく降っているのですから、まさにぴったりのテーマです。コンベンション参加者が各自気に入った作品3点に順位をつけ、投票しました。精巧に作られたトイレ(!)や、最近流行の平織りを使ったシッフォ・マボーナさんの動く作品「フグ」など、独創的な作品がいくつかありましたが、受賞したのはロベルト・グレッテルさんの見事な作品「しずく」でした。これは、しずくが水面に落ちて、周りに波紋が広がった様子を表現したものです。

楽しい折り紙の合間には、もちろん、ホテルのレストランですばらしい食事が用意されました。おなかを空かせた180人の折り

紙人が集まると、騒がしくも楽しい空間になります。スペインのAEPコンベンションもそうですが、腹ぺこの折り紙愛好家が一緒に食事をするというのは、ちょっとした見物です。ぜひみなさんも体験してみてください。

私はさまざまな国のさまざまなコンベンションを訪れましたが、雰囲気はどこもよく似ています。私が初めて参加したCDOコンベンションは、無料で形式張らず、講習作品の見本があったり教室受け付けがあったりする、OUSAやJOASのようなよく組織されたイベントとは対照的でした。私も運営に関わっているイギリスのBOSコンベンションは、参加者は多くても100人で、ずっと小規模です。今では、CDOコンベンションははるかに大規模なイベントに発展し、今回もしっかりと組織されていたのがよく分かりました。教室は決められた時間に始まり(実際は少し遅れることがよくありましたが)、いつ何が起こるのかみなに知らされていきました。

12月10日の日曜日にコンベンションが閉幕した後、天気が良くなったので、私はヘルマン・バン・グーベルジャンさん、アッシア・ベリーさんと、翌日に少し観光をしました。フェリーボートに乗って湖を渡り、ストレーザの街まで行きました。背景の美しい山々は雪をいただき、沈む夕日が景色をばら色に染めると、晴れ渡った空がますます魅力的になりました。

2007年秋の次回のCDOコンベンションをお楽しみに。そこで皆さんとお会いできることを願っています。



▲Curvy unit designs by Natale Fietta
ナターレ・フィエッタ作、曲面ユニット作品



▲Dodecahedra by Silvana Betti Mamino
シルバナ・ベッティ・マミーノ作、正十二面体

Origami Tessellation

平織りーアジサイ折り

＜平織りーアジサイ折り＞

前号で北條氏は、藤本氏の最初の著書『創造性を開発する立体折り紙』(1976年)に87種もの“蛇腹円筒作品”が収載されていることを紹介しているが、同書の“平織り”作品は比較的少なく6種類の収載である(表1、写真1、図1)。しかしながら、すべてに透視的プレゼンテーションが示してあり“平織り”の今日的な作品イメージは完成している。平織り作品は『創造する折り紙遊びへの招待』(1982年)に大きく取り上げられている。

“平織り”と並んで藤本氏と言えば“アジサイ折り”を忘れるわけにいかない。“平織り”、“アジサイ折り”のように繰り返しパターンが二次元的に無限に敷き詰められた折りの形式を表す言葉として英語圏では“Origami Tessellation”という用語が定着しているようだ。上にも述べたように“平織り”に透視鑑賞の作品イメージが付随し、また、ねじり折りを平織りの条件と考えると、“平織り”～“アジサイ折り”へと連続する、繰り返し折りの形式を総括して表現するのに定着した

・写真1

『創造性を開発する立体折り紙』に掲載の両面表平織(C2、図1参照)の折り上がり例。16×23の格子から折ったもので、

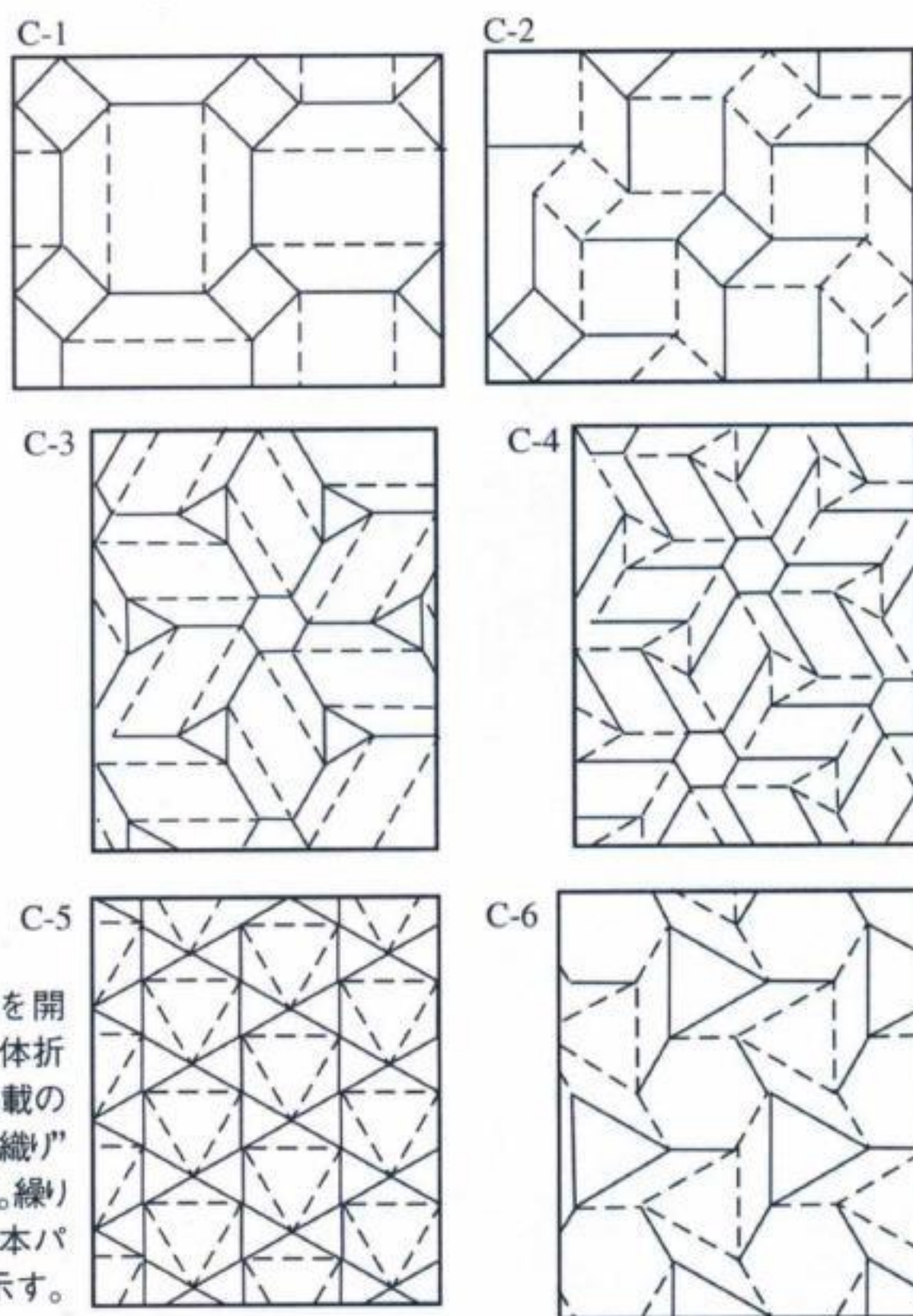
中央から表裏交互にねじり折り進めてゆくと、正に結晶が成長してゆくようにシステマティックに組み上がってゆく。自分の指を使っているのに、どこか自然観察しているような気分がしてくる。ところが、ちょっと油断して別の折り線を入れてしまったりすると、あっという間に“アジサイ折り”のパターンが現れる。“Origami Tessellation”の自発的なパターン発生過程を追体験することになる。



日本語が見当たらない(『をる』6号で川崎敏和氏は“結晶化”と呼んだ一実際、この手の作品を折っていると結晶が成長していく様子と比喻以上の類似性を実感する)。藤本氏の興味が“平織り”～“アジサイ折り”と繋がる“Origami

Tessellation”全体に広がった時期はいつ頃なのだろうか。ところが、アジサイ折りの創作時期がよくわからない。1983年の自費出版『創造性を開発するねじり折り(2)』に、ほぼ“アジサイ折り”と思われるパターンを見つけることが出来るが、全体としては紫陽花の形に仕上げたものではない。紫陽花に見立てられ、作品として切り取られた繰り返

し折りパターンがどの時点であったのかはつきりさせられなかった。同書のあとがきには、「化学の授業の中で、結晶構造を“折り紙”で教えてみよう、という発想で出発、ダイヤモンド、食塩など多くの作品を作り出し、“ねじり折り”はその副



・図1

『創造性を開発する立体折り紙』に掲載の6種の“平織り”の展開図。繰り返しの基本パターンを示す。

・表1 『創造性を開発する立体折り紙』の平織り作品一覧

記号	基本角度	作品名	表裏同等	完成写真掲載有無	項
C 1	45°	平織り	×	○ (透視)	96
C 2	45°	両面表平織	○	○ (透視)	97
C 3	30°	網代	×	○ (透視)	98
C 4	30°	—	×	○ (透視)	99
C 5	30°	亀甲	×	○ (透視)	100
C 6	30°	カゴメ	○	○ (透視)	101

○西川誠司(にしかわ・せいじ)＝1963年生まれ。JOAS評議員代表を6年間務め昨年退任。某石油会社の研究員(専門は生物工学)。小2のときに河合豊彰著『おりがみ』(保育社カラーブックス)で創作折り紙に出会って以来、折り紙を続け現在に至る。



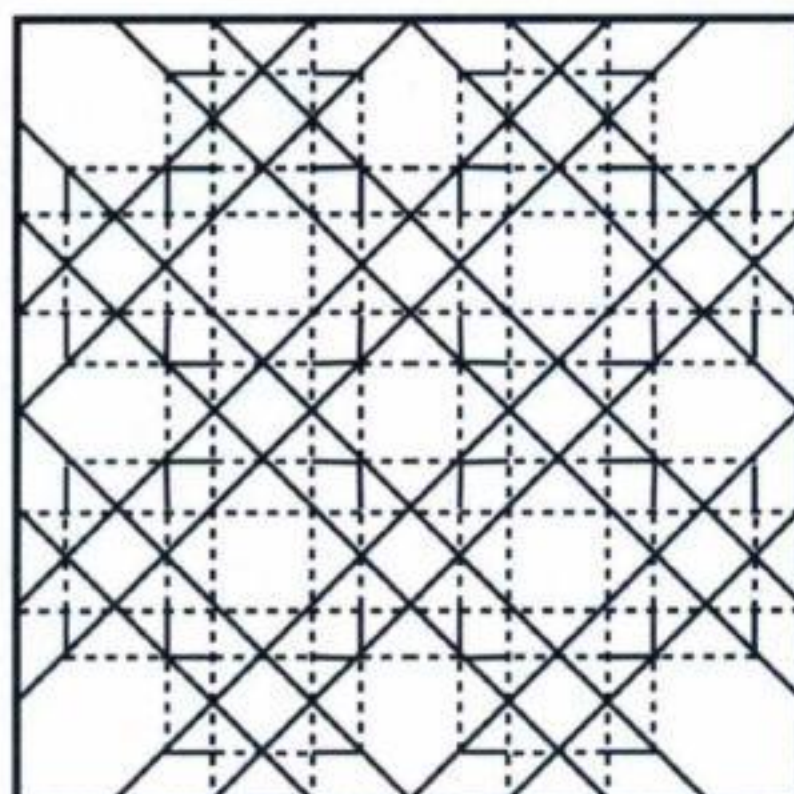
・写真2

『をる』4号(1994年)で特集された藤本氏の“アジサイ折り”の数々。

産物として生まれました。」とあるから、“平織り”～“アジサイ折り”が川崎氏の言うように“結晶折り”というのはまさに出自からしても言い得ている。藤本氏の“アジサイ折り”については『をる』(4号双樹舎1994年 JOAS図書収蔵)の特集記事(誌上作品展)で多くの作品をカラーでみることが出来る(写真2、図2)。いずれにしても最初の著書『創造性を開発する立体折り紙』に至る1970年前後から1980年代はじめにかけて化学教材として理科室で次々に生み出され続けた幾何造形(蛇腹円筒もの、平織り、多面体)の中にそのエッセンスがあったことは確かであろう。

<小史>

折り紙による幾何造形は、そのシステムティックさ故にこれまで何度も再発見が繰り返されていると言ってよい。特に、今日のような情報伝達の発達していない、1960-1970年代の同時多発的に出現する平織り作品の出現状況を独立の発見、何らかの影響下での系統的発生の別を論じるのは難しい。例えば、ごく最近、インターネット上で平織り作品を精力的に紹介しているEric Gjerde氏の



・図2

『をる』4号(1994年)でNo.4と付された「基本的な8等分アジサイ折り」の展開図。

ホームページ(<http://www.origamitessellations.com/category/origami/>)でアメリカの幻のデザイナーとされるRonald Resch氏が1960年代から1970年代にかけて極めて完成度の高い立体的なTessellation作品(折り紙というより構造物を意図したような)を制作していた証拠を幾つか挙げている(写真や特許明細!)。Eric Gjerde氏はRonald Resch氏について、Tom Hull氏から昨年のOrigamiUSAコンベンションで初めて聞いて知ったとweb上で記述しているから、アメリカにおいても折り紙愛好家に知られるようになったのは新しいことのように思われる。また、そういえば、前号の記事で北條氏も言っているようにランプシェード状の“蛇腹円筒造形”については、Peter Engel氏が著書『Folding the Universe』(1989年)の中で英語による折り紙本の最も古いものの一つとして紹介している『Houdini's Paper Magic』(Harry Houdini著 初版1922年)に文献的には遡れるようだ。このような幾何造形の系譜を論じるための新たな文献の発見も楽しみでもある。

さて、1994年に滋賀県大津で開かれた第二回折り紙の科学国際会議において、桃谷好英氏が1960年代終わりから1990年代はじめにかけて様々なパターンのTessellation作品を得ていることを図解入りで自ら述べている(『Proceedings of the Second International Meeting of Origami Science and Scientific Origami』p392, 1994年JOAS図書収蔵)。実際、桃谷氏の最初期の著書『折り紙入門』(西東社1971年JOAS図書収蔵)には、ねじり折り作品「あ

じさい」!(藤本氏のアジサイとは十分に趣を異にするものだが、“ねじり折り”から生まれる格子状の造形が普遍的に紫陽花の見立てを与えるのは面白い)が既に掲載されており、この分野の最も早い先駆者の一人だろう。一方、1970年代の藤本氏の成果が1979年のBOSの展覧会、そしてその後数年にわたりBOSマガジン誌上で新鮮さをもって紹介されていることは本誌97号で記した。また、上記の第二回折り紙の科学国際会議は、Chris Palmer氏やPaulo Taborda Barreto氏の1990年代の“Origami Tessellation”作品の数々の成果が華やかに日本に紹介された大会でもあった。Chris Palmer氏は、Proceedingsの中で「1987年刊の『Origami for Connoisseur』(『トップおりがみ』(1985年 笠原邦彦編著)の英語版—川崎ローズが登場)によって“ねじり折り”などを学んだ」と記しているため、1990年代以降の“Origami Tessellation”は、藤本氏/川崎氏らの日本の研究者の成果を欧米の作家が再発見して発展したとみることが出来るかもしれない。

第5回

関東三大折板建築

The three most prominent folding structures
in the Kanto region

This time, I will explain two constructs with folding structure in the Kanto region of Japan: Gumma Music Center planned by a Czech American Antonin Raymond and Art Tower Mito planned by Isozaki Arata. The two and Yokohama Osanbashi Pier, the one I explained in Origami Tanteidan 85, are the three most prominent folding structures in the Kanto region, I would say. In particular, Art Tower Mito, standing in a typical regional city of Mito, with its height of 100 meters, is worth watching as a huge origami construct.



折紙散歩 Origami Sampo
Doggedly Determined

関 東三大折板(せっぱん)構造建築というものがある。と言っても、いまわたしが決めたものなのだが、いままでもそんなことを決めたひとはいないと思うので、言った者勝ちである。言った者勝ちって、誰に勝ったのかも判然としないが、誇らしい気分である。

その三つとは、1.群馬音楽センター、2.水戸芸術館、3.横浜大榎橋国際旅客ターミナルである。うれしいことに、三つの建築物の配置はほぼ正三角形を構成する。そんなことがうれしいのもわたしぐらいかもしれないが、わたしぐらいかもしれないということが誇らしい気分である。

三大折板構造建築のうち、横浜大榎橋は「折紙散歩は健在なり」で紹介したので、今回は、群馬音楽センターと水戸芸術館を紹介しよう。

群馬音楽センターは、群馬交響楽団の本拠地・高崎市にある。高崎と言えば、身長41.8mの白衣大観音が有名である。白衣大観音は、56mの東京湾観音、62mの久留米慈母大観音、100mの仙台天道白衣大観音(高さとともに名前も長くなるらしい)等が建立される以前には、日本三大観音像のひとつに数えられた像である。今回、群馬音楽センターによって、失われた三大を高崎市が奪還したのはたいへんよろこばしいことである。もっとも、わが調布市(筆者在住)の深大寺だるま市、富士市の毘沙門天大祭(または白河だるま市)と並び、日本三大だるま市を有する市として、全国のだるまファンに高名をとどろかせている高崎市なので、余計なお世

話かもしれない。

さて。まずは、ヘリコプターをチャーターして撮った同音楽センターの全景を写真に示そう。というのはウソで、隣りに建っている地上21階の高崎市本庁舎の展望階から撮ったものである。高崎市本庁舎は、市役所としては破格に立派な建造物で、県庁所在地の前橋市に対抗して建てたものである…のかどうか知らないけれど、そんな気がする。日本三大市庁舎のひとつかもしれない。

同音楽センターは、ごらんのように、みごとな蛇腹折りである。設計者は、チェコ生まれのアメリカ人、アントニン・レーモンド氏(1888-1976)である。ル・コルビジェ氏とともに、前川國男氏(1905-1986)の師匠筋にあたるひとらしい。前川國男氏は親戚でもなんでもないのだが、前川一族の中で一番偉いひととして知られる大建築家である。日本三大建築家のひとりかもしれない。

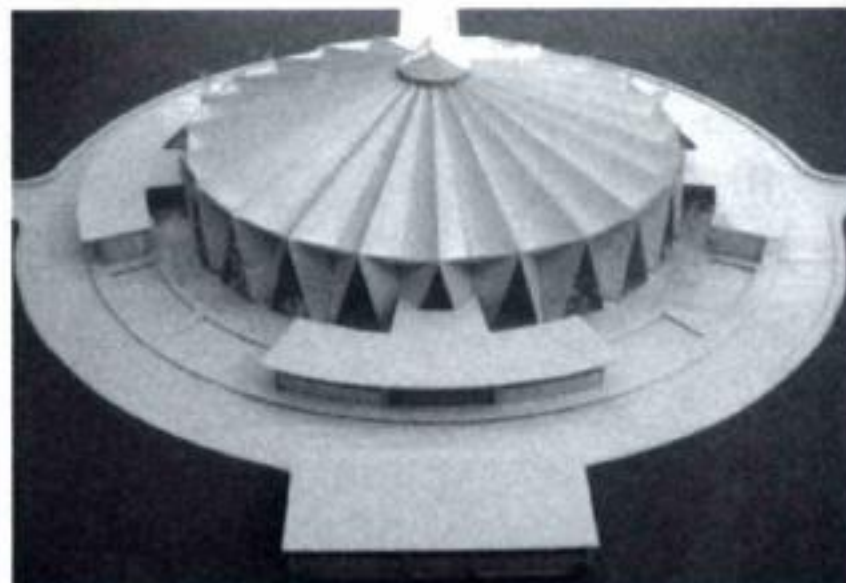
建造は、1961年。レーモンド氏の代表作で、全体構造だけではなく、階段や壁

画などの装飾もかなり力がいっている。高崎市としても自慢の建物で、ロビーの一角には「レーモンドギャラリー」なる小部屋もある。そこに飾ってあった第1案の模型も、全体のかたちは円形だが折板構造だった。レーモンドさん、折板が好きだったようだ。聖アンセルモ教会(東京目黒)にもそうした構造がある。前川國男氏の設計による世田谷区民会館にも似たような構造が見られるのも、知るひとぞ知るところだ。同区職員である妻は「そういえばそうかな」ということであったが。

なお、今回の訪問は、純粹にこの連載のための取材という目的であったが、高崎市本庁舎前に、脇田愛二郎氏の巨大彫刻作品「HELIX-983T」もあって、思わぬ発見に満足した。脇田氏は、惜しくも昨年亡くなられたが、パブリックアート愛好家の間では知らないひとはいない、螺旋構造づくりまくりの彫刻家である。前号で触れたように、パブリックアートを見ることもライフワーク化しつつ



群馬音楽センター(設計:アントニン・レーモンド)
Gumma Music Center (Architect: Antonin Raymond)



群馬音楽センター第1案模型(群馬音楽センター レーモンドギャラリー)
The First Plan of Gumma Music Center (Displayed at Gumma Music Center Raymond Gallery)

写真は、八ヶ岳で。2007年も折紙散歩は続きそうです。



前川 淳 Maekawa Jun

折紙創作・研究家。折鶴モノのコレクター。東京生まれで東京在住だが、1年の約1/3は、天文台の仕事のため、長野・山梨で過ごす。好きなもの：阪神タイガース、星空、書店、喫茶店、幾何学的調和。

あるわたしは、脇田氏の作品は、ああこれは脇田氏だなとすぐにわかるまでになっている。たいへん誇らしい。

その脇田氏の作風に似た建造物を有するのが、水戸芸術館である。設計は磯崎新氏。出身建築事務所というつながりだけで言えば、レーモンド→前川國男→丹下健三(91号の東京カテドラルセントマリア大聖堂)→磯崎新→坂茂(91号の紙の教会)という系譜があり、建築界において、折り紙的構造物が脈々と受け継がれてきたことが実感される。ちなみに、「実感される」には「こじつけられる」というルビをふって読んでもらいたい。

さて。水戸芸術館は前から見たいと思っていたのだが、群馬音楽センターを訪問した翌週、同館の現代美術ギャラリーの企画展(佐藤卓展「日常のデザイン」)も面白そうだったので行くことにした。この記事が群馬音楽センターだけでは弱いと思ったからでもある、と言えないこともない。

常磐線の始発駅である上野駅の長距離線ホームに立ったのはひさしぶりだったが、天井から多面体モデルが下がっていることを発見し、まずは幸先のよい収穫によるこんだ。そして、水戸は、あいにくの天候であったが、堪能した。小学6年と中学1年の2年間茨城県に住み、いまでも茨城県民の歌(♪いばらきー、いばらきー、われらのいばらきー♪)を歌えるわたしであるが、久しぶりの水戸であった。どこにでもある地方都市といった印象が強かった街なのだが、1990年に完成した複合芸術施設・

水戸芸術館の塔の存在が、街の風景にスペクタクルを与えていた。館周辺のきれいに整備された景観よりも、ごく普通の駐車場や、証券会社の看板の向こうにかいま見える巨大な塔という眺めがすばらしい。なにせ、塔の高さは100mもある。様々な場所から見えるのだ。しかも、その形状が、巨大な正四面体を27個つなげた三重螺旋という、特異なものなのである。ごく普通の街に現れた異形の建造物は、ポストモダンなどというより、特撮映画の1シーンみたいである。水戸に異星人進攻、てな感じである。館で配付・販売しているポストカードやウェブの写真などでは巨大さが伝わりにくいが、じっさいに見ると違和感が感動的である。

なお、塔にはエレベーターで登ることができる。頂上部には、ランダムに開いた直径30cmから50cmの丸窓があり、そこを覗き込むことで水戸市街が展望で

きる。まあ、眺望という機能はとってつけたようなもので、磯崎氏も上部三角形にポツポツと穴を開けるのは不本意だったのではないかな、などとも思う。

おみやげは、塔の模型の展開図が印刷された透明のファイルフォルダーである。帰ってさっそくつくってみた。よい模型だが、折紙者としては、「台形のりしろ」や、組み上がりにすき間ができていいところが、いまひとつ納得できなかった。ファイルフォルダーを切り抜くというのも、ちょっと貧乏くさい。なお、同模型の紙版はただで配っている。ということからも(と言っても、ただで配っていることではなく、紙の模型があることから)想像がつくように、塔の構造は実に折り紙向きである。折板構造なのだから当然であるとも言えるが、挑戦された感覚となったわたしは、似たようなモデルをつくったこともあったので、積み木のようなユニット折り紙で同じ構造を試作してみた。

けっこう面白いものができた。ふふふ、折紙者をなめてはいけない。



上野駅の多面体オブジェ
A Polyheral Construct at
Ueno Station



水戸芸術館(設計:磯崎新)
Art Tower Mito (Architect
: Isozaki Arata)



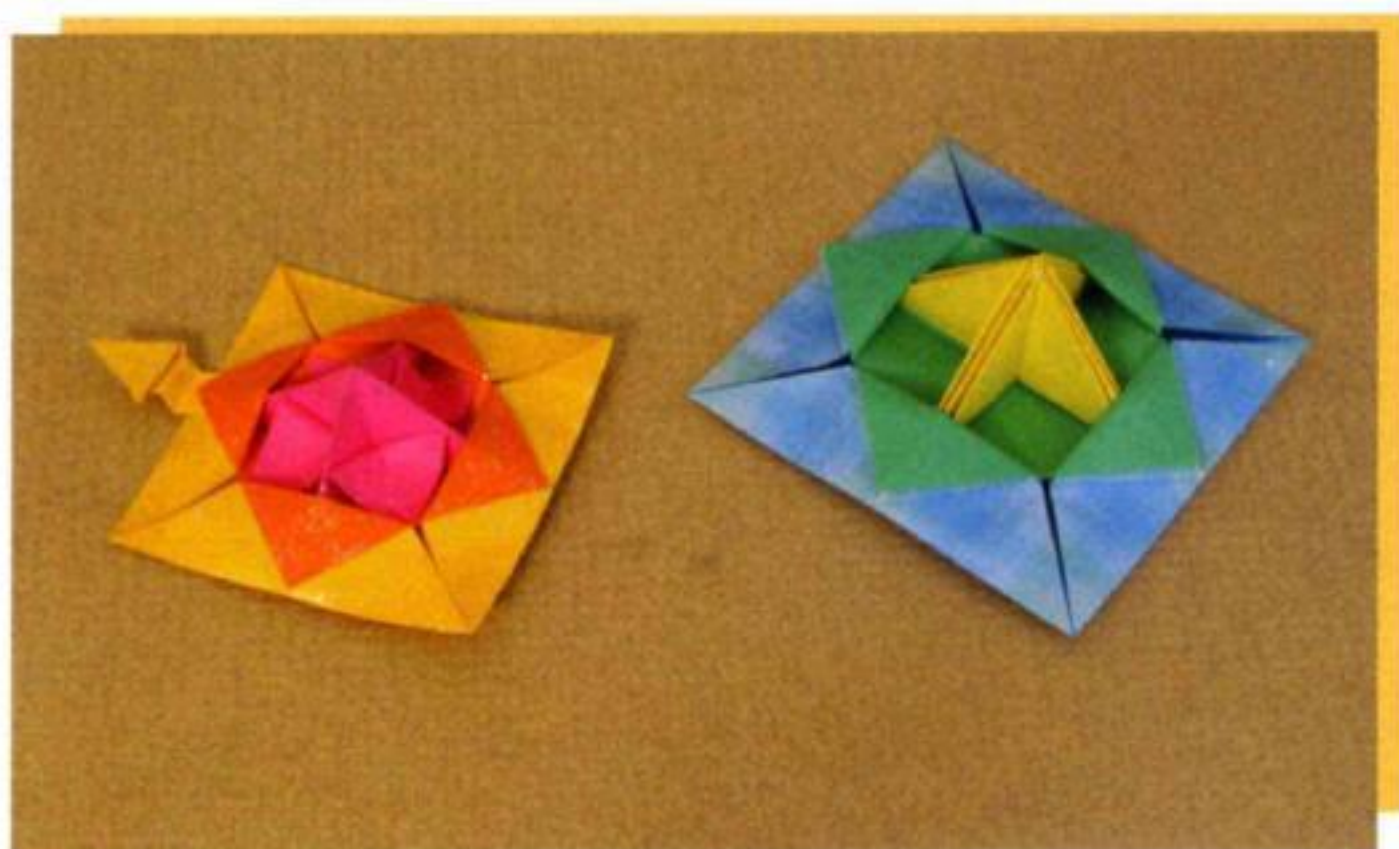
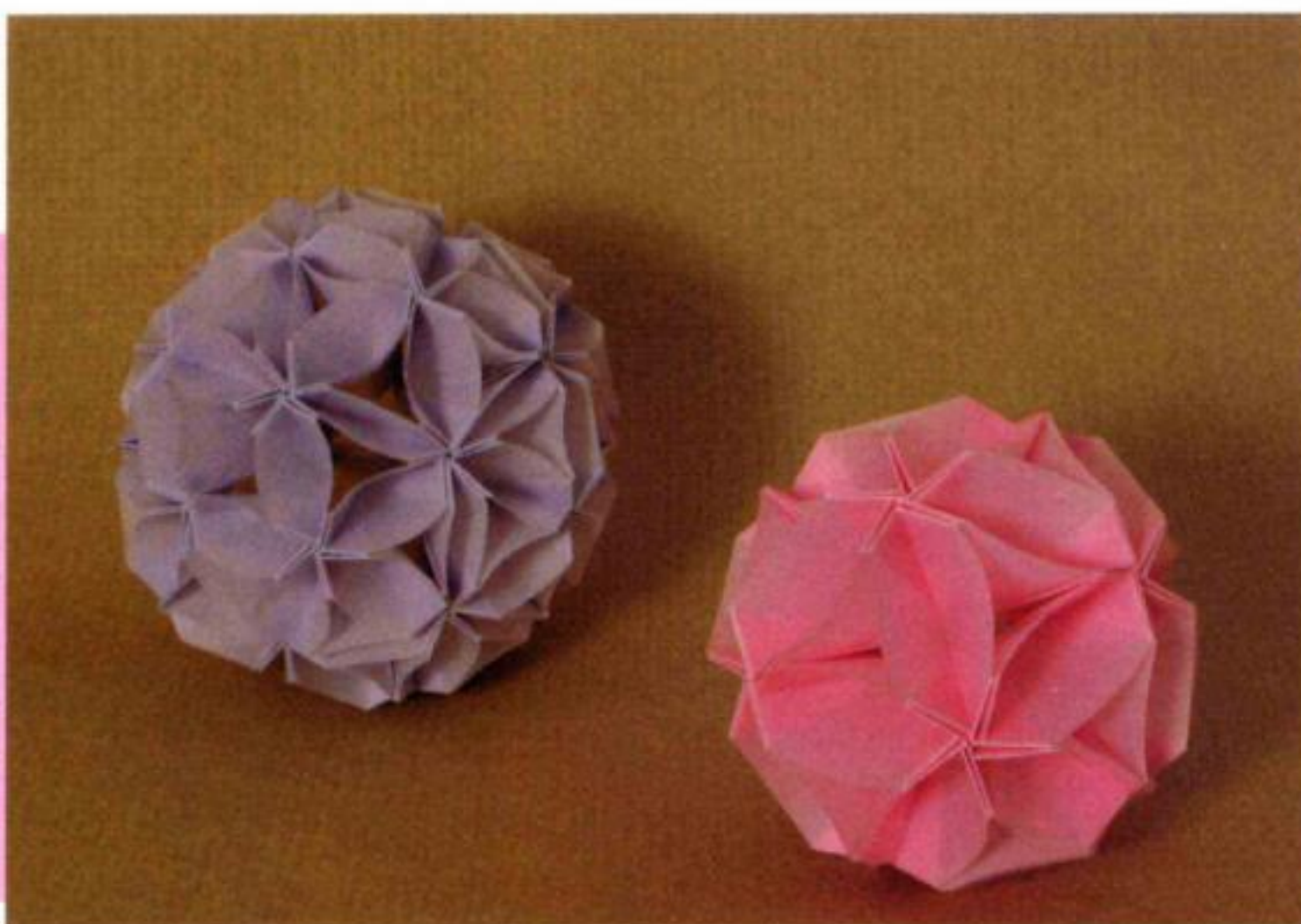
水戸芸術館の塔の模型
A Miniature of Art Tower
Mito

■外出するのがどんどん億劫になる季節、電子情報網のせいでさらに動きが鈍る懸念増大。でも、いつの時代にも「現場」でしか得られないものが必ずあります。ホンモノに触れるべく、いざ探索開始！

「ジオスフィア (30枚組、90枚組)」
作：川村みゆき (P.4)

GEOSPHERE (30 sheets, 90 sheets):
Kawamura Miyuki (P.4)

■固い外皮をひび割れさせながら成長してゆく種子が、ふと気が付くといつの間にか惑星のイメージにまで広がって、そしてまたゆっくりと元に戻ってゆく。多種多様な球体の要素を凝縮したような不思議な印象は、たおやかでありながらも質実剛健さを併せ持つパーツや、さまざまな意味で「シンプルな」構成となっていることから生み出されているのでしょう。



「コアラ」 作：渡辺 大 (P.29)

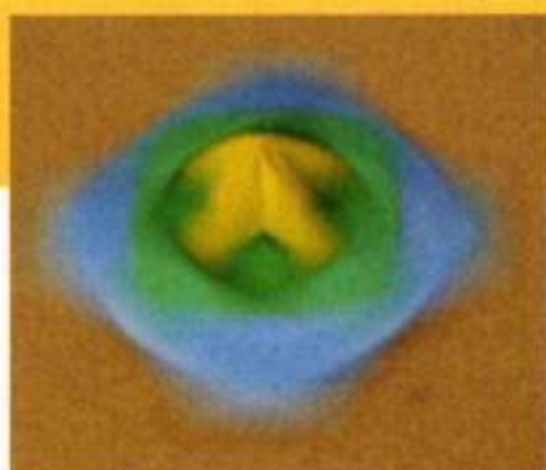
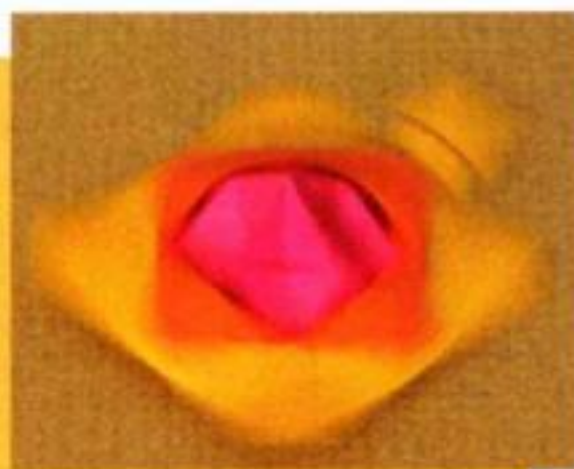
Koala Based on Nishikawa's Kangaroo:
Watanabe Dai (P.29)

■コアラがコアラであることを決定づける重要な特徴 (と言ってしまうとちょっと大げさかもしれませんが…) を見事に体現した作品。果たしてそのココロは？ ぜひ実際に折って確認してみてください。

「マコトコマ」 作：やまぐち真 (P.8)

Makotokoma (The Top of Makoto's):
Yamaguchi Makoto (P.8)

■徹底的に、情け容赦なく、理不尽なくらいによく回る (笑) 「遊べる折り紙」の真骨頂。コマの底面の「尖り」をバランスよく折り出すのは結構難しいのでは? と思いきや、意外な方法でエレガントに達成されています。題名が回文になっているところも、「対称性」に敏感な折紙者は思わずニヤリ。





「しゃちほこ」 作：川畑文昭 (P.22)

Shachihoko: Kawahata Fumiaki (P.22)

■「あの折り線の付け方が、こんなに自然にできるのか!」と驚く工程がそこそこに。本誌94号で展開図が掲載されたときにすでに折ったというかたにも、きっと新たな発見があるはずです。どっしりとしてユーモラスなあの造形が、こんなにも身近になりました。



「一角天馬」 作：勝田恭平

Pegasus: Katsuta Kyohei

■同じテーマで多くの先例があるときには、自作品ならではの新しい特徴を盛り込むべく、さまざまに工夫する過程が非常に楽しい。今号表紙のフクロウなど、鳥類の造形を多く手がけている勝田氏の作品ではやはり、翼が重要なポイントとなっているようです。余裕のある面積を存分に生かして、細かい加工を盛り込みながらもすっきりとした印象に仕上がっています。

「スティラコサウルス・バイオリン奏者」 折り手:中原正人(12歳)

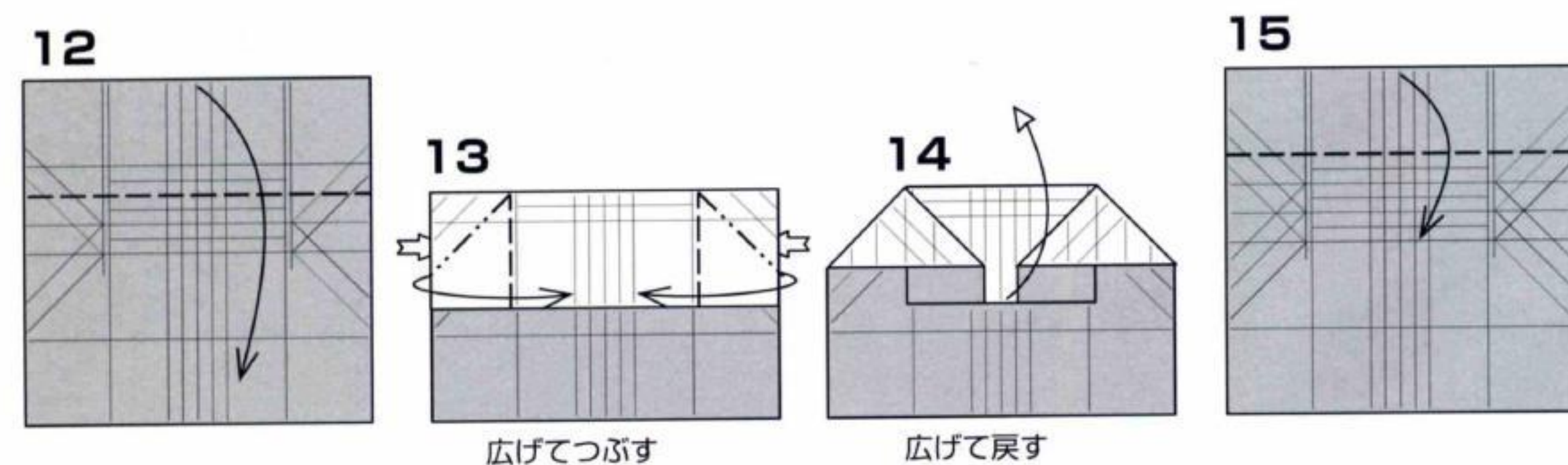
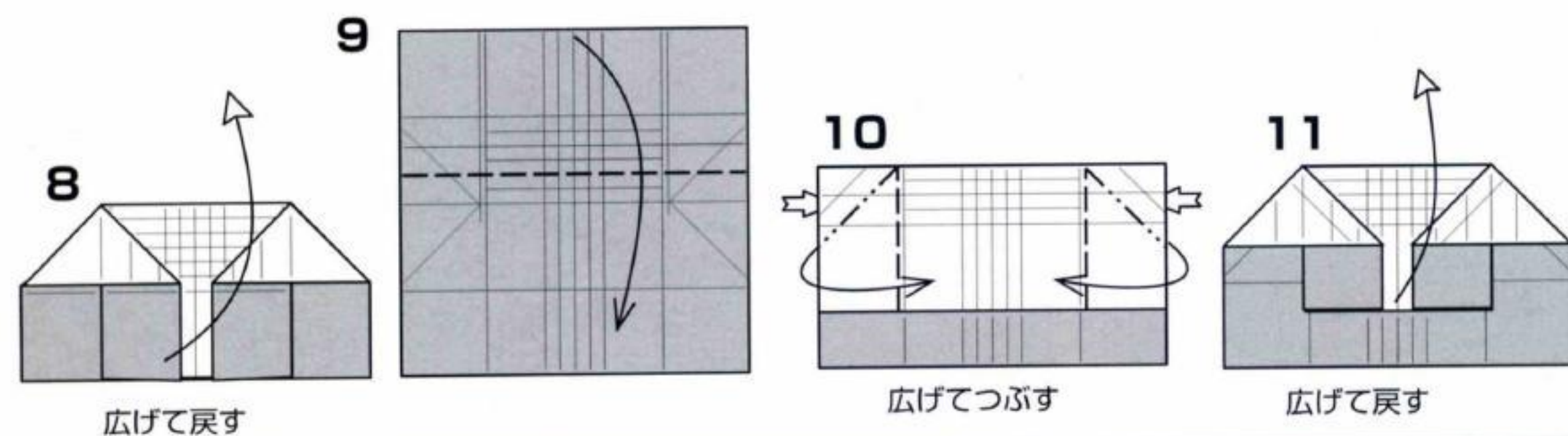
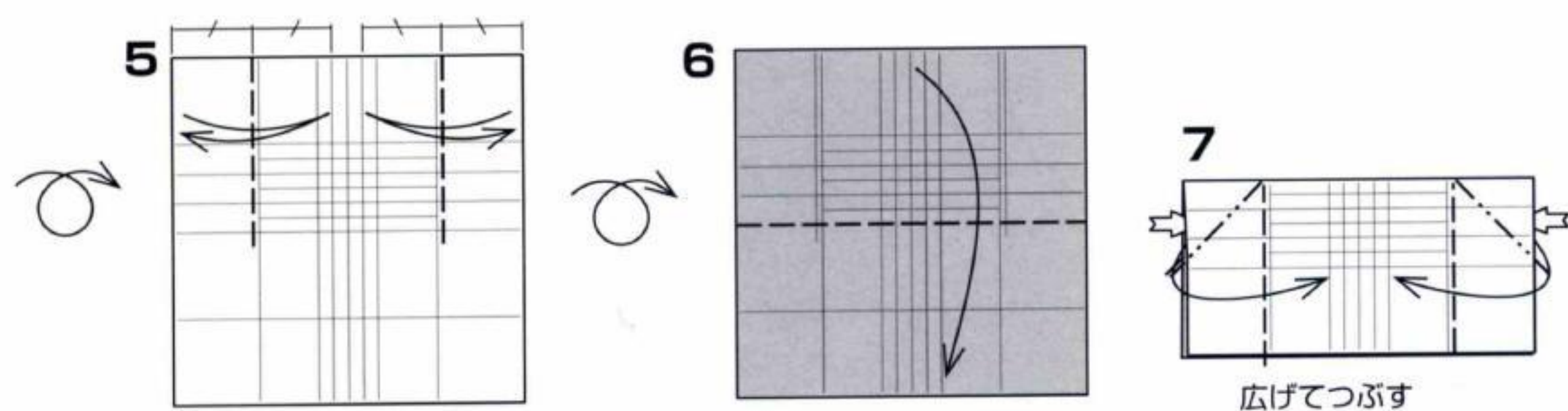
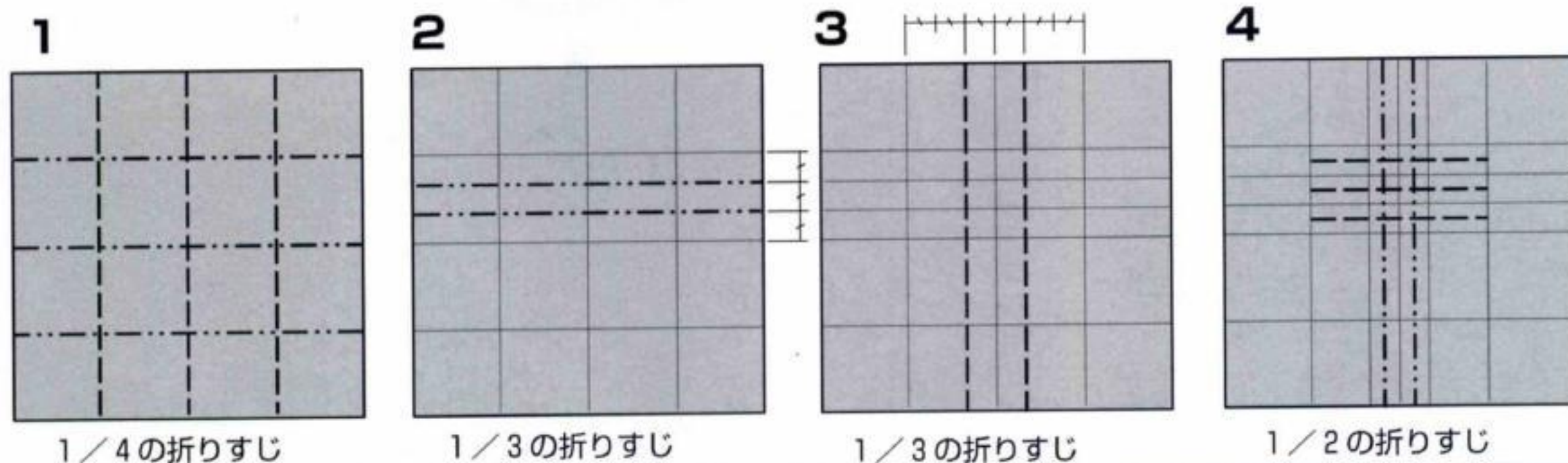
A Styracosaurus and a Violinist by Nakahara Masato (12 Years old)

■おりがみはうすの隣の「JOASホール」で開催されている神谷教室・北條教室に、期待の若手が彗星の如く出現。「ひとつひとつの折り作業を的確にこなしてゆく」という基本をきちんと押さえていることに加え、仕上げの立体化作業にも明確な見通しをもって取り組んでいることが伝わってきます。

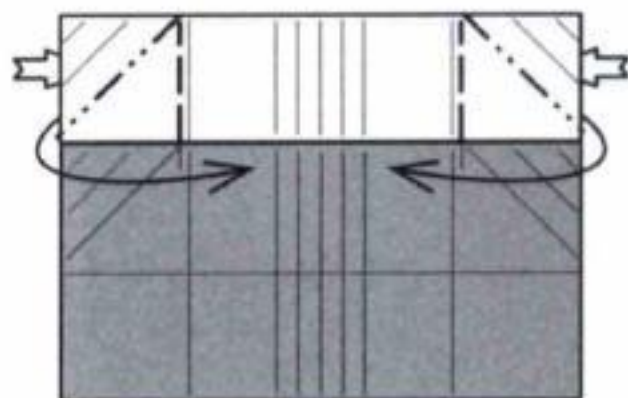


しゃちほこ

川畑文昭 Kawahata Fumiaki 2006/9/9 作図

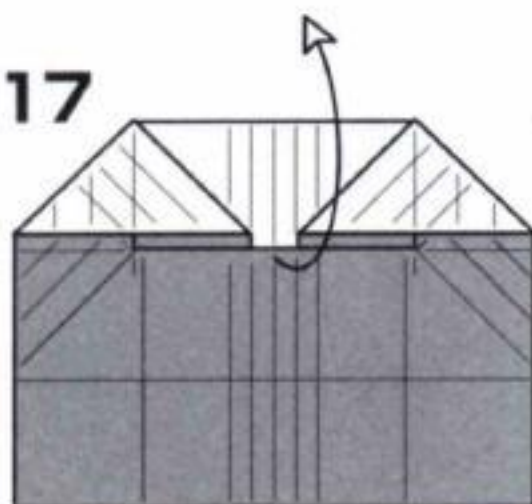


16



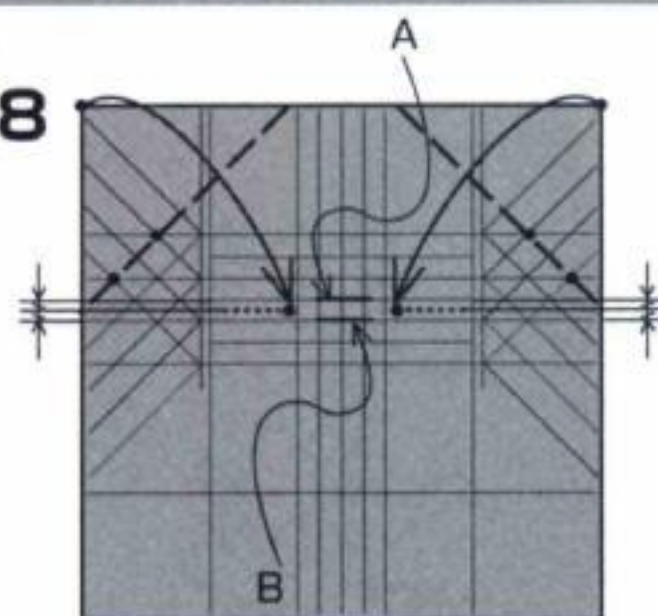
広げてつぶす

17



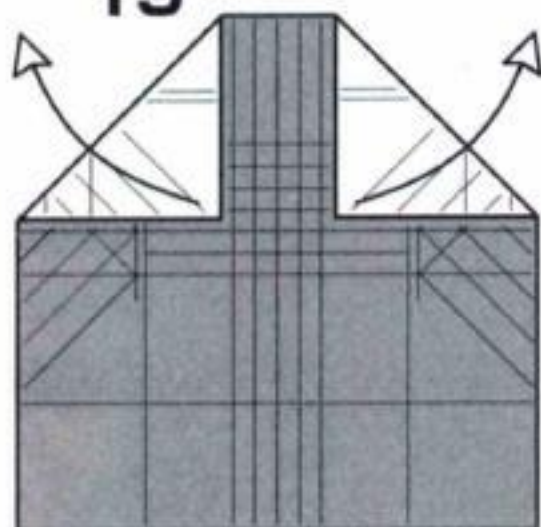
広げて戻す

18



A-B線の半分の位置を目安に折る

19

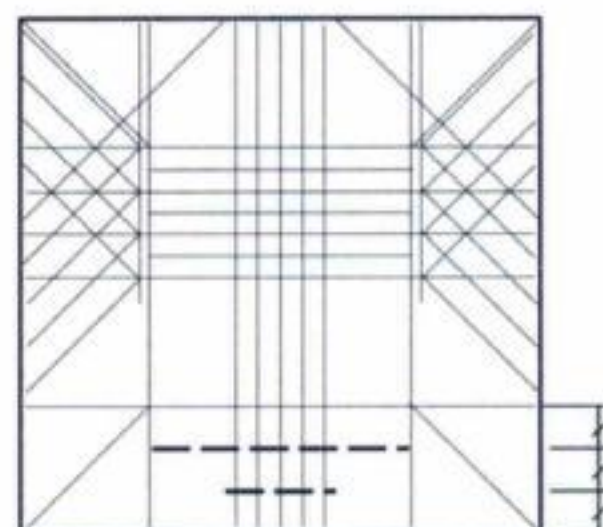


20



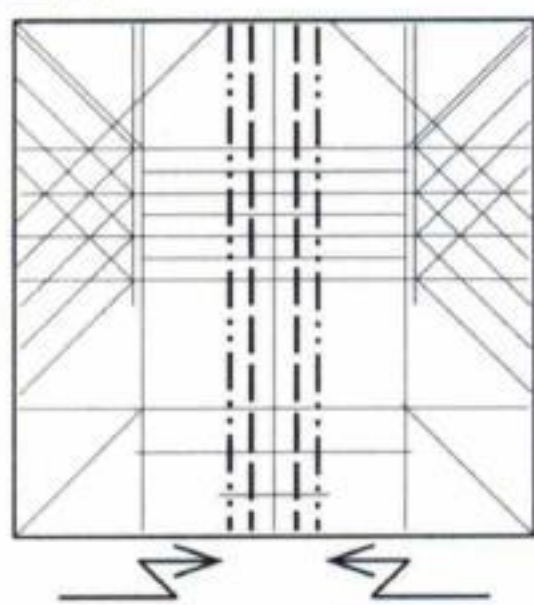
折りすじをつける

21



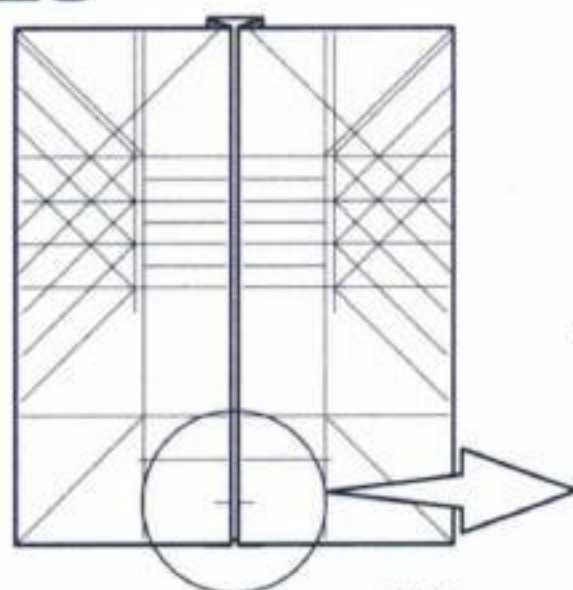
1/3の折りすじ

22



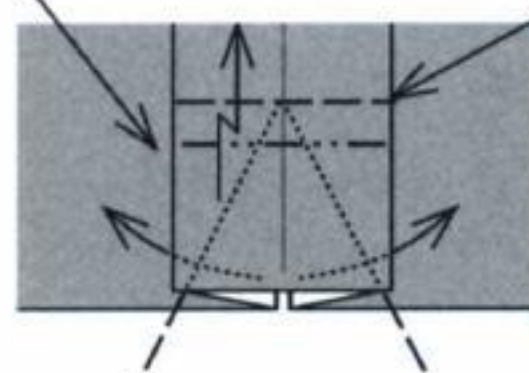
段折り

23



拡大

24

21でつけた
下側の方の折
りすじ新たに付ける
折りすじ
21でつけた
上側の方の折
りすじではない
ので注意

25

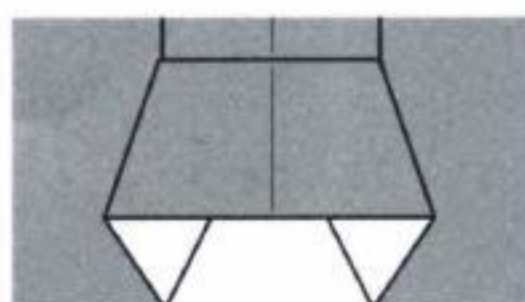


途中図



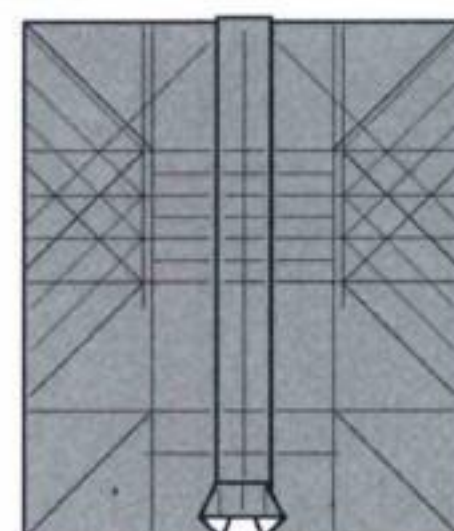
C

27



折った形

28

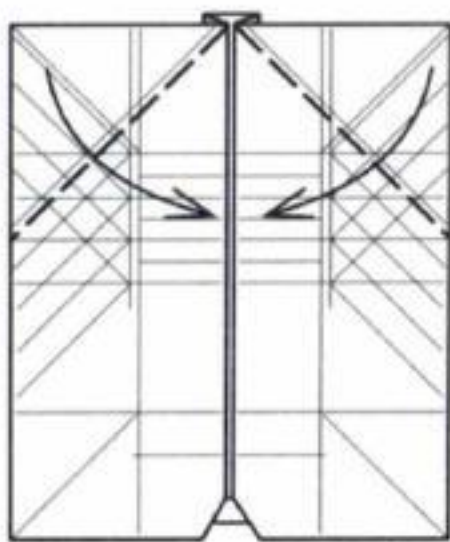


26

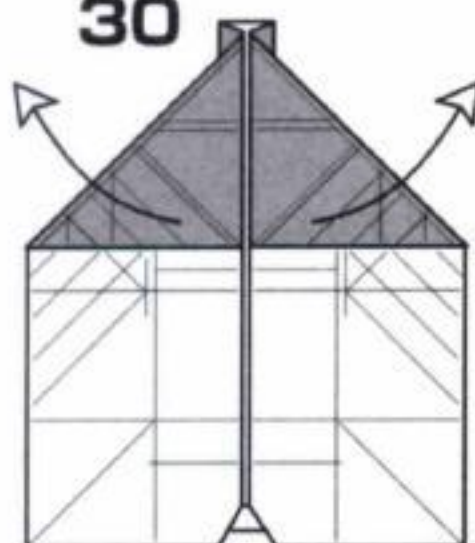


Cから見た中の形

29

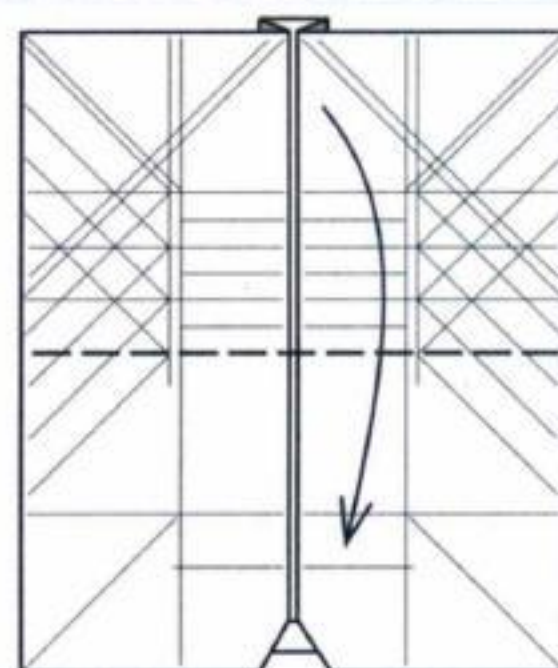


30

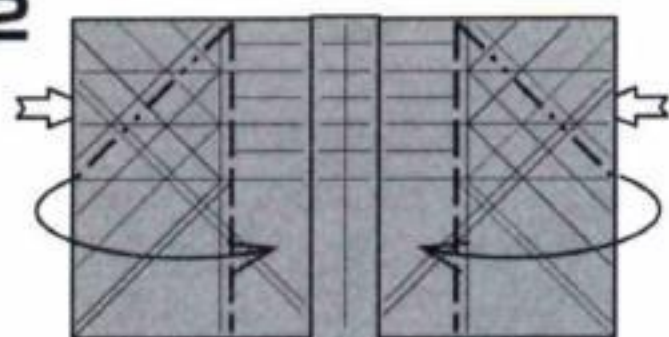


広げて戻す

31

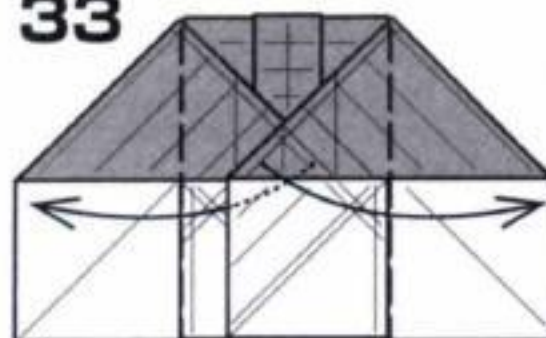


32



広げてつぶす

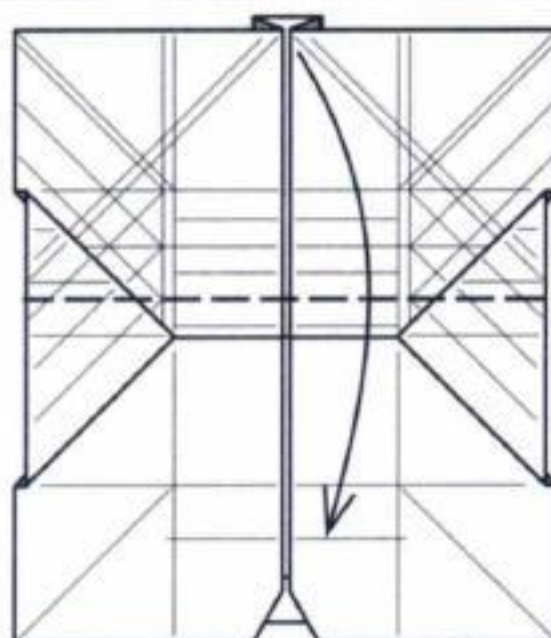
33



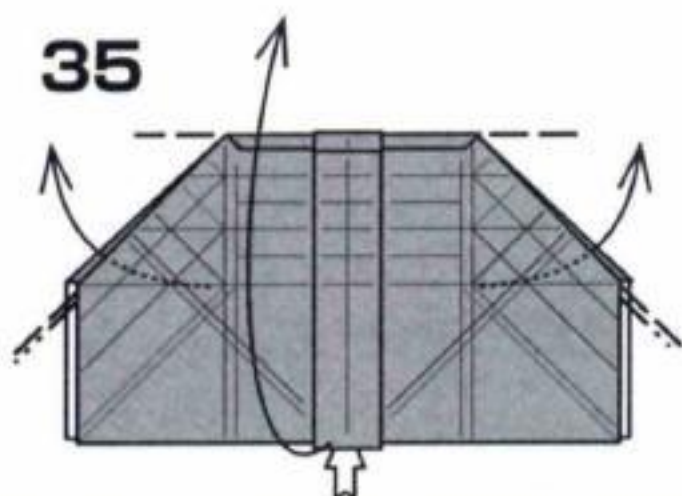
34



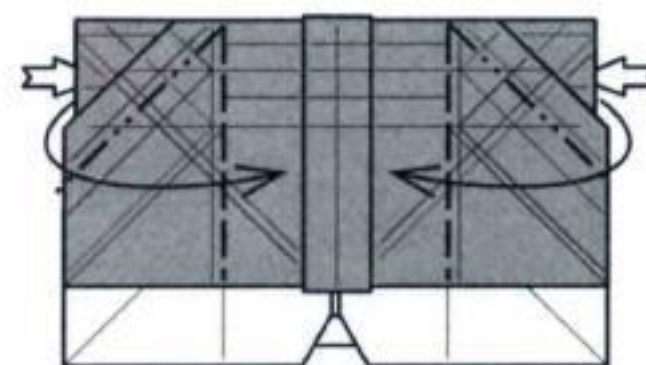
36



35

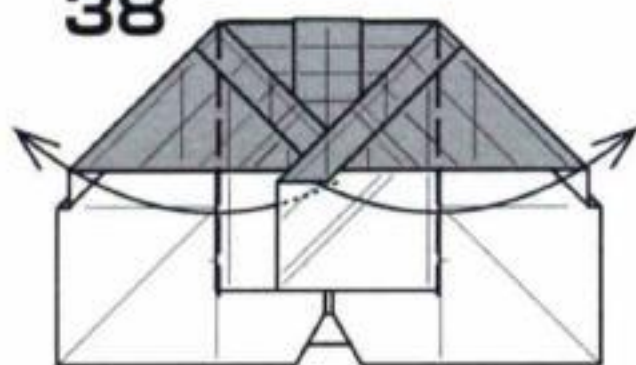


37

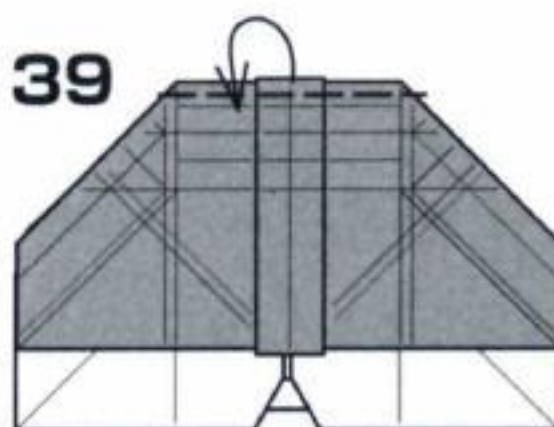


広げてつぶす

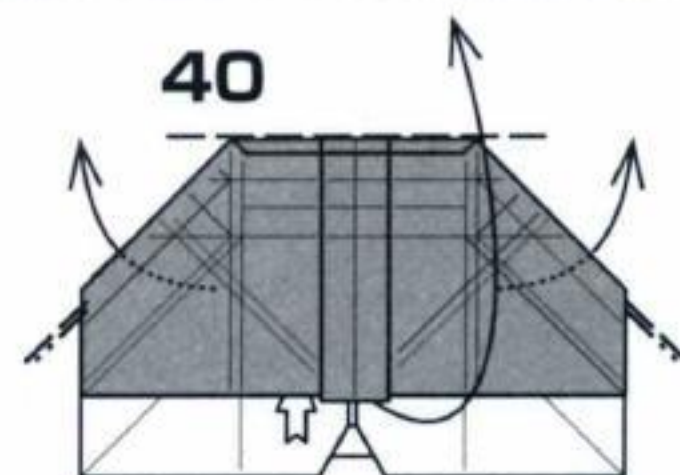
38



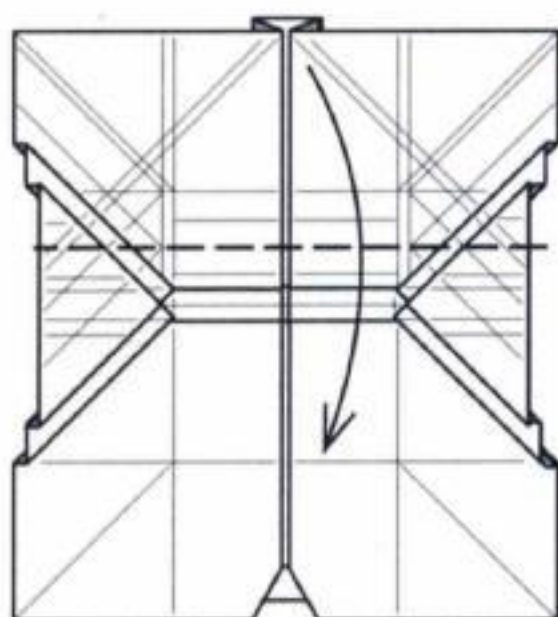
39



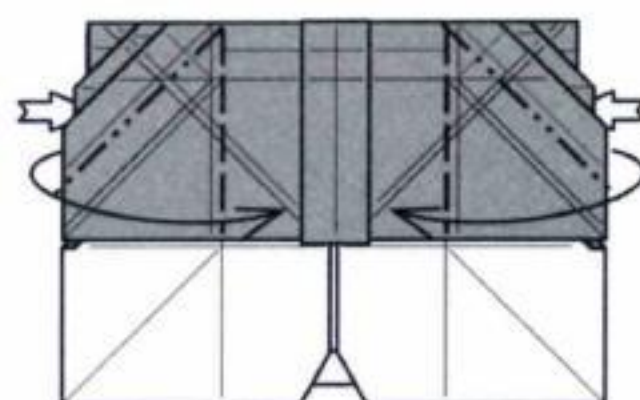
40



41

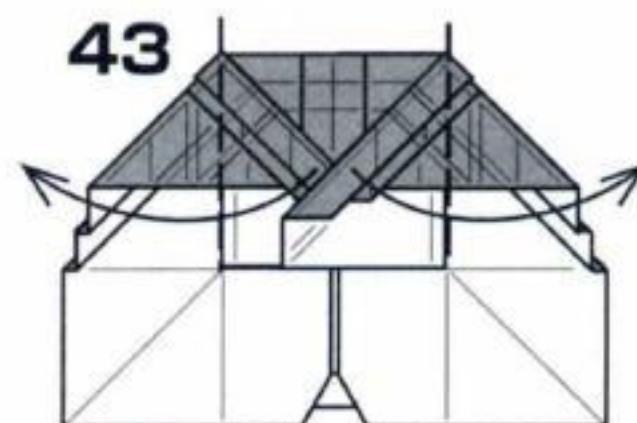


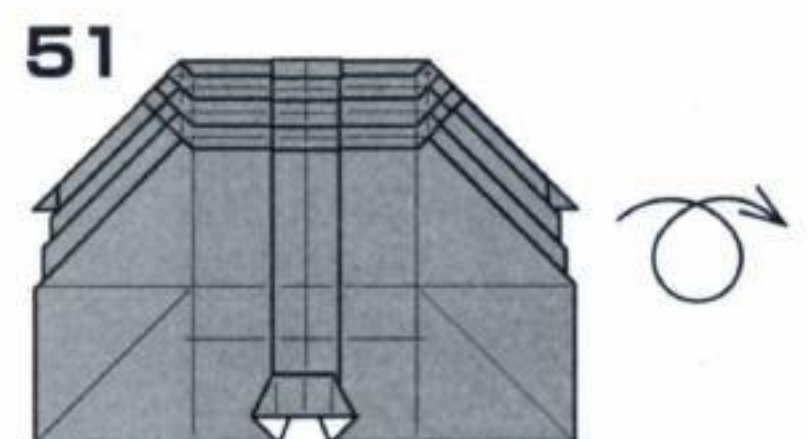
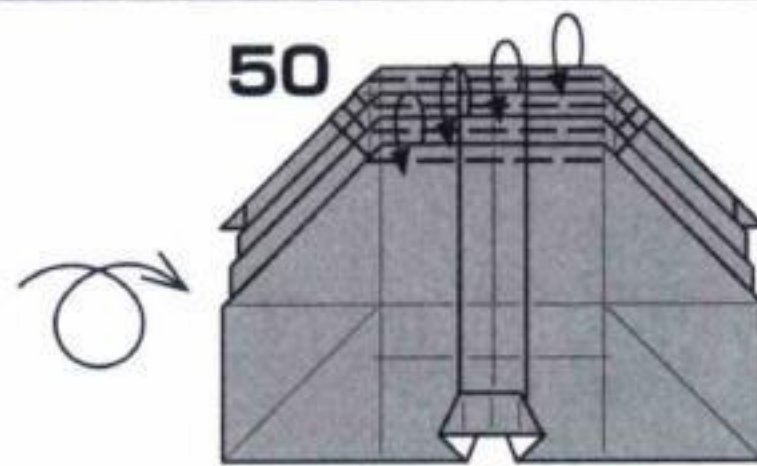
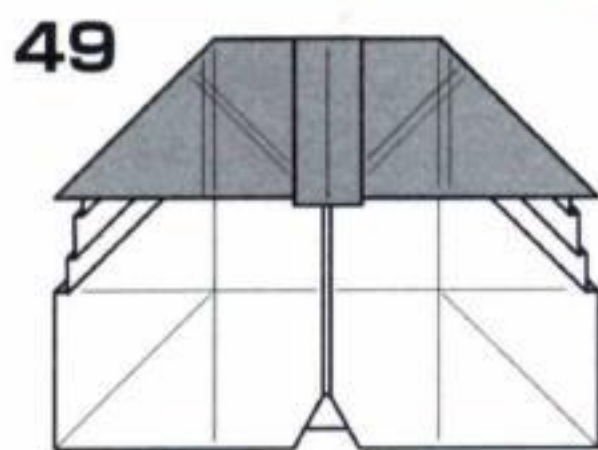
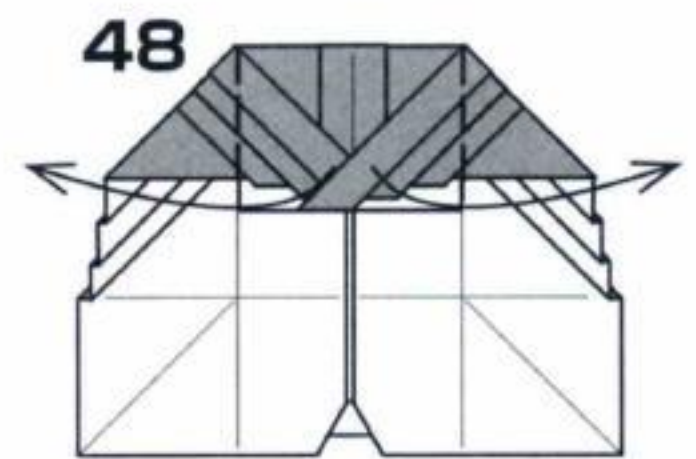
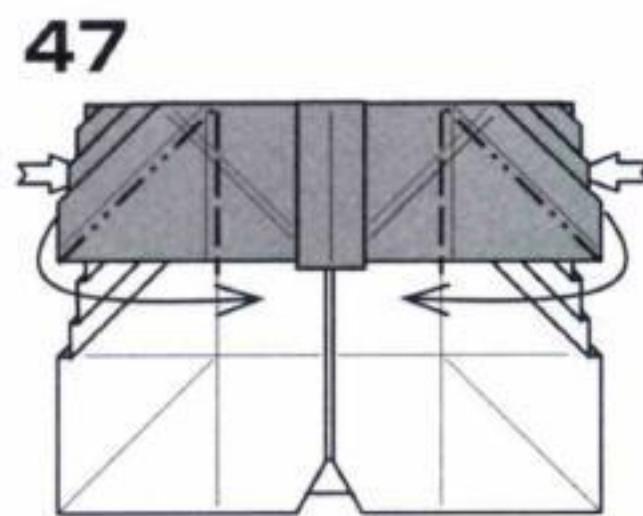
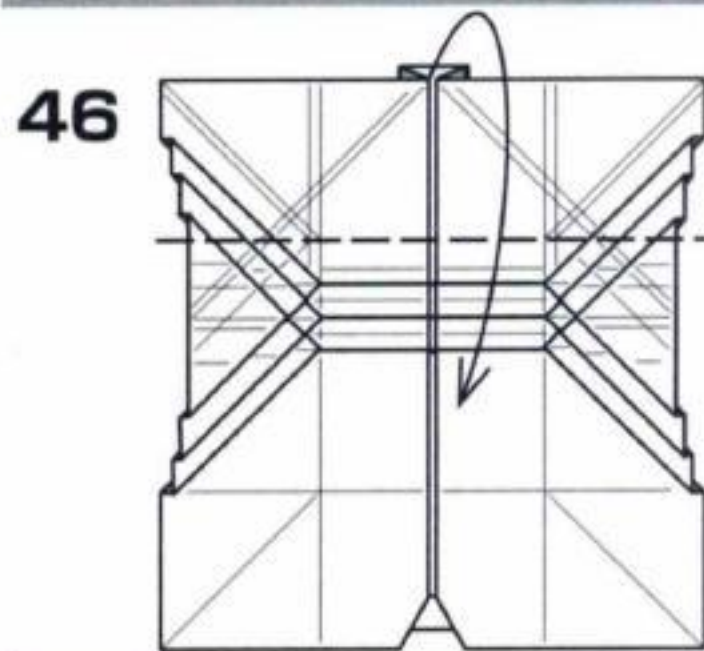
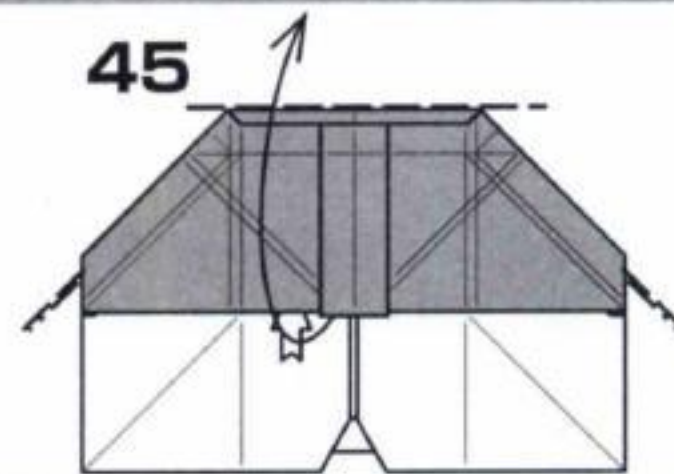
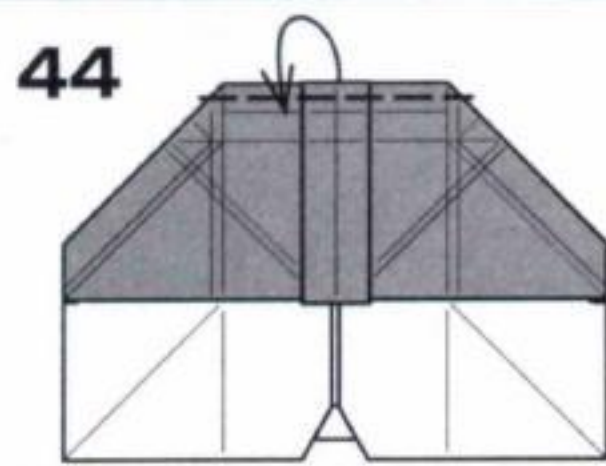
42



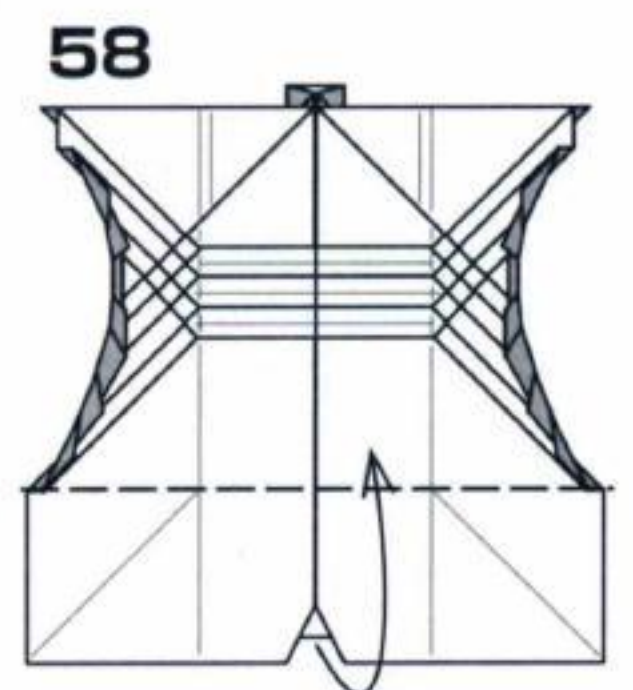
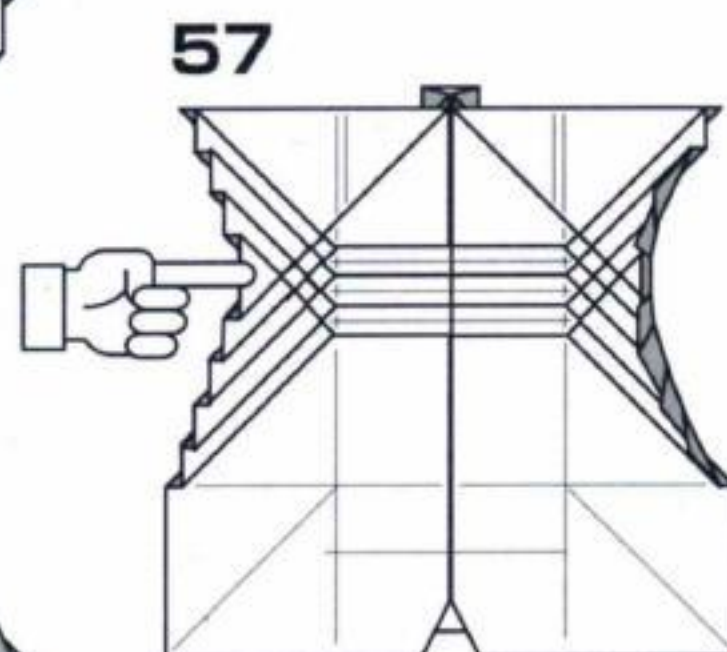
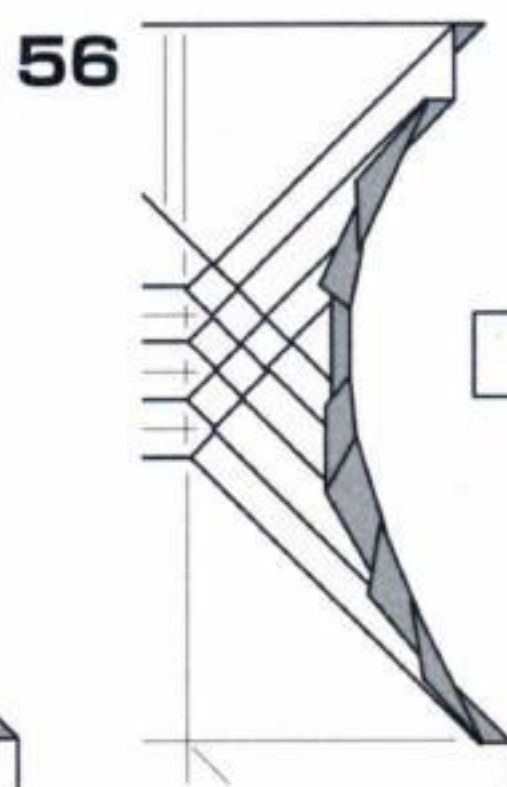
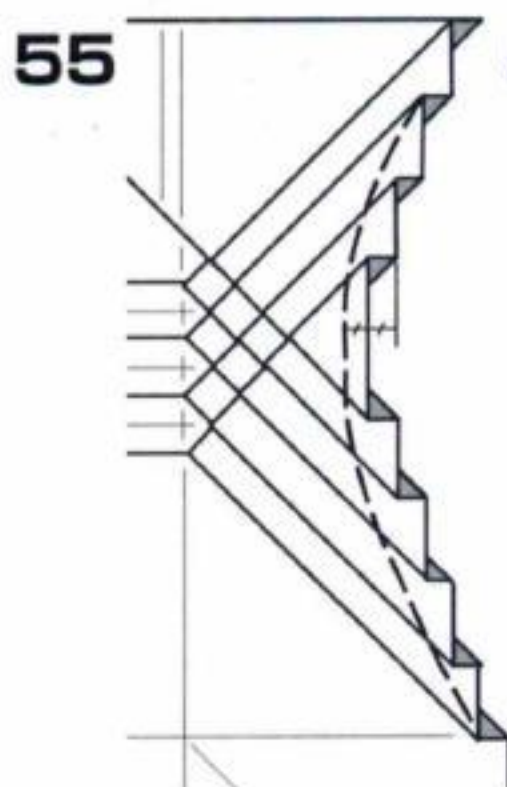
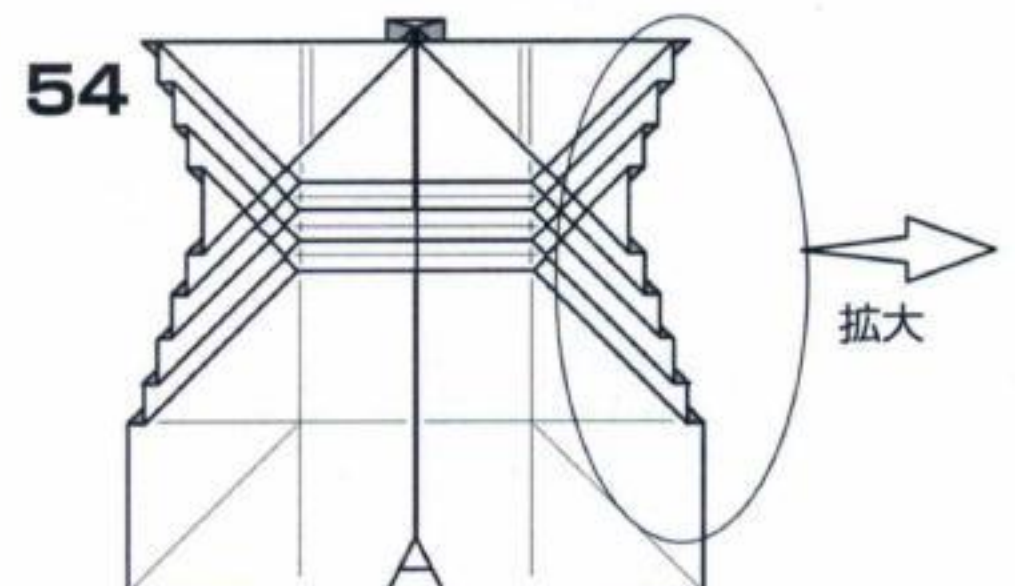
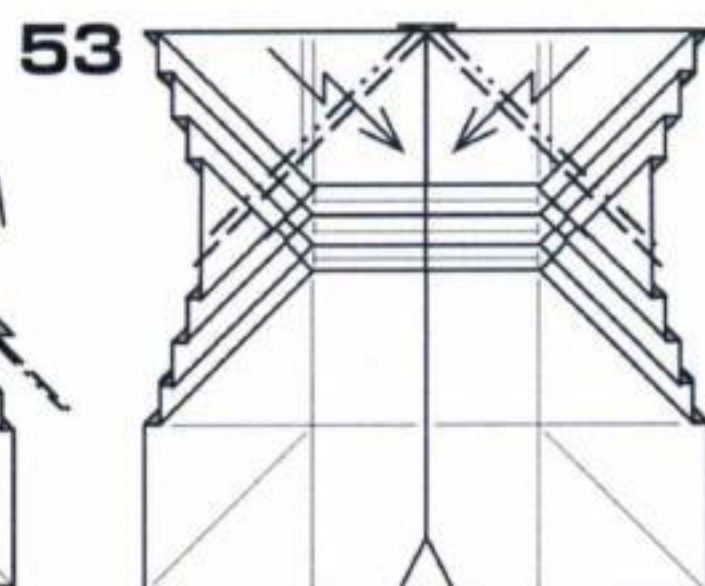
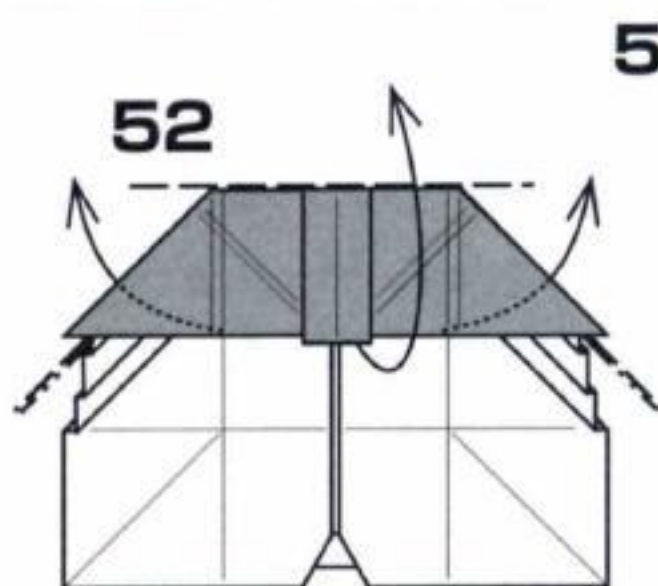
広げてつぶす

43

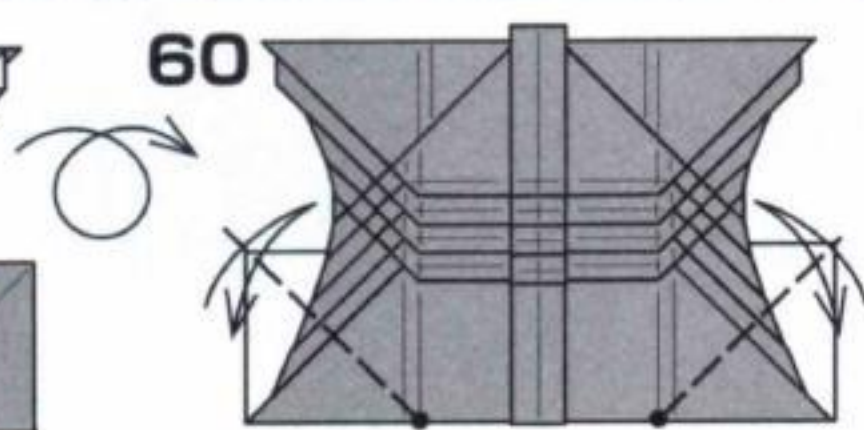
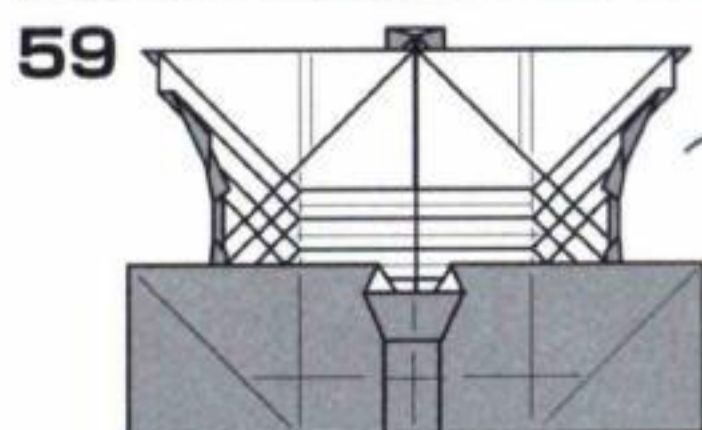




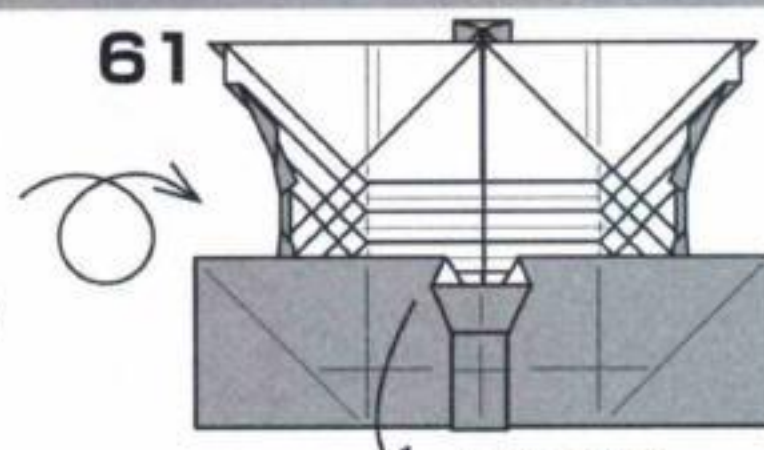
ひだを4箇所折り返す



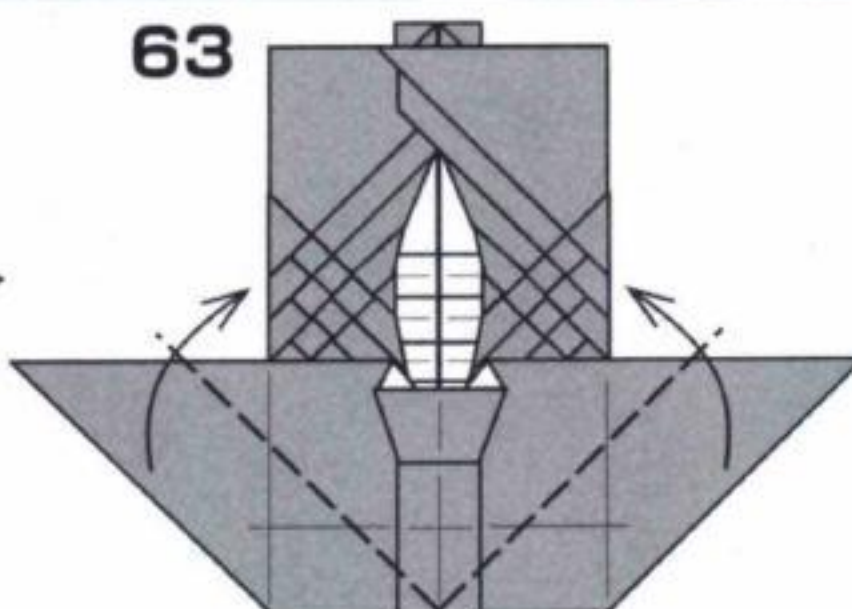
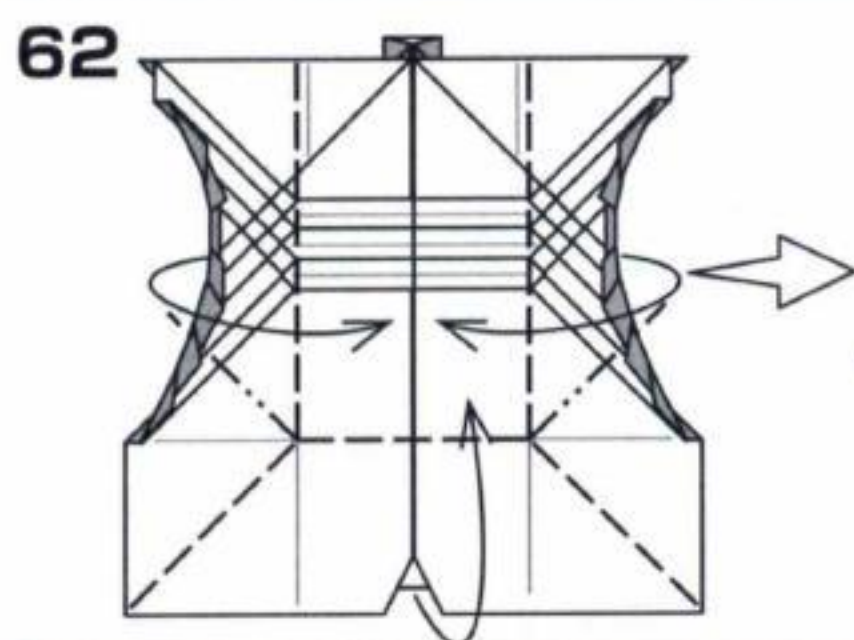
左側も55-56と同じ



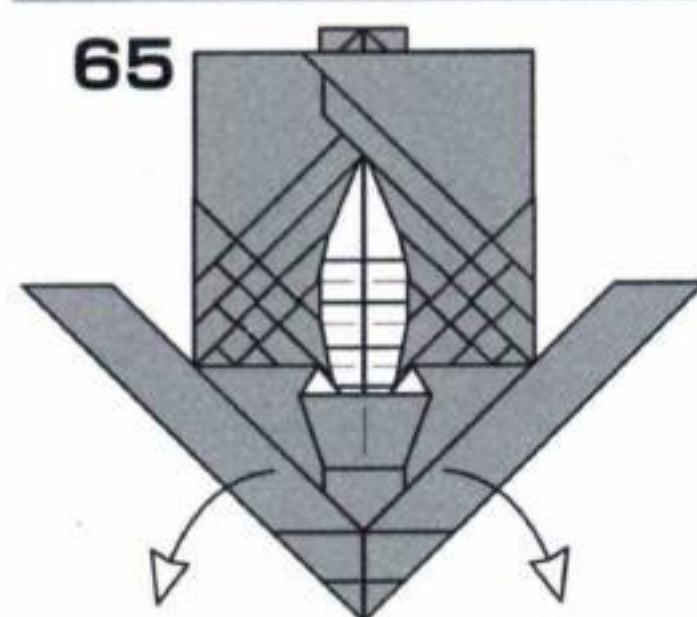
折りすじをつける



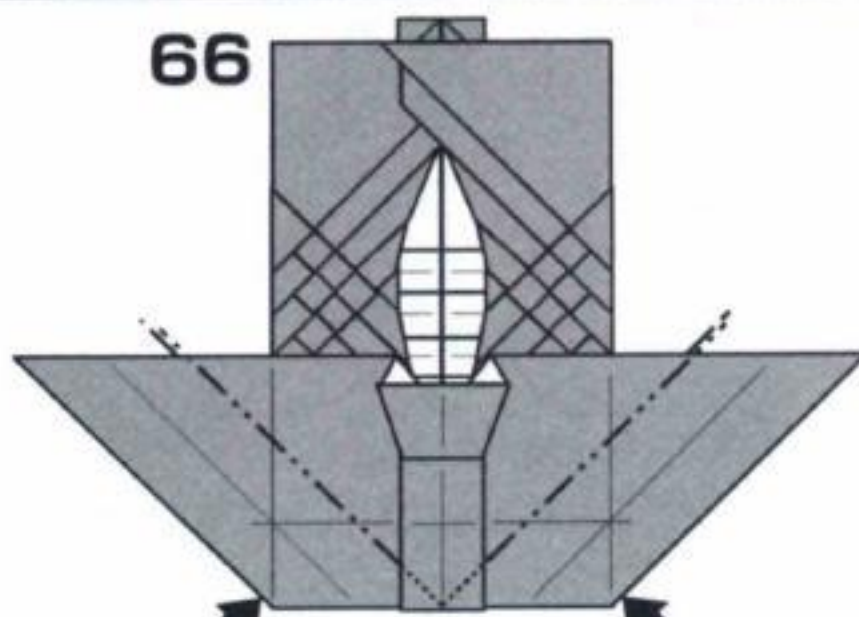
広げて戻す



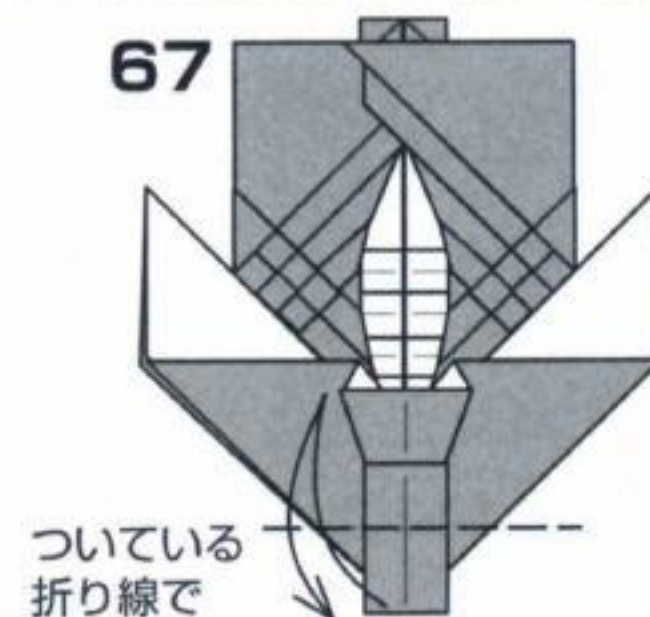
半分に折る



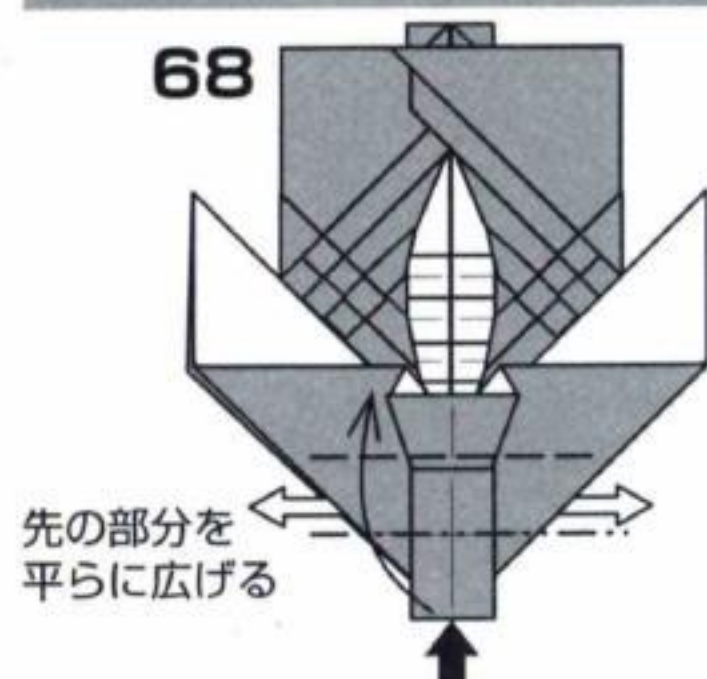
広げて戻す



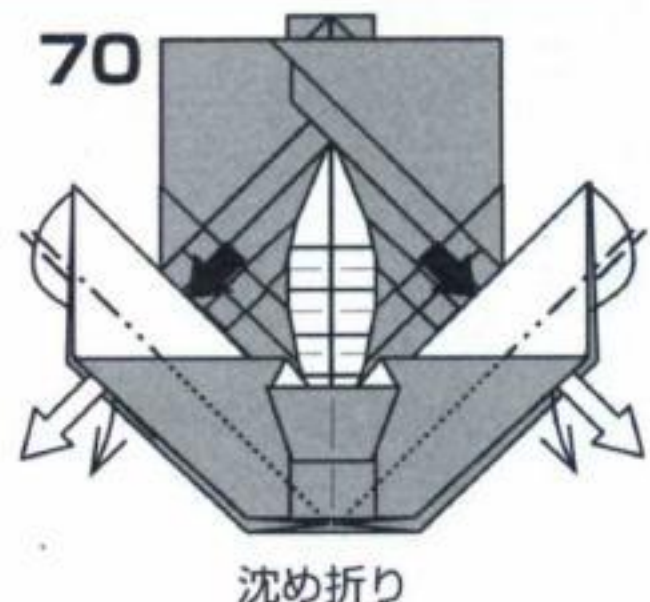
沈め折り (Close)



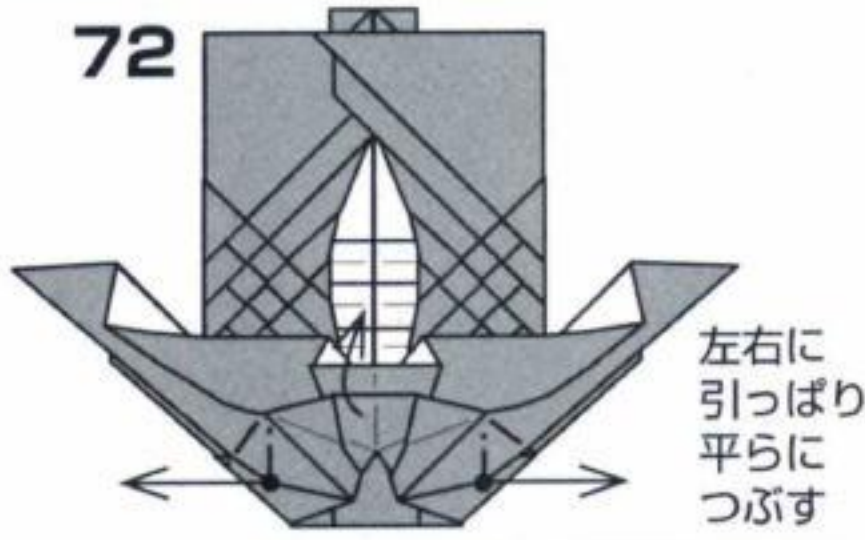
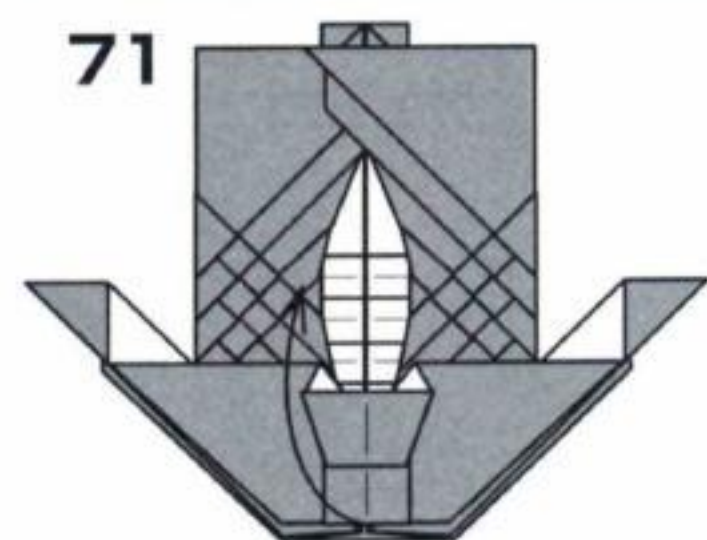
ついている
折り線で
折りすじをつける



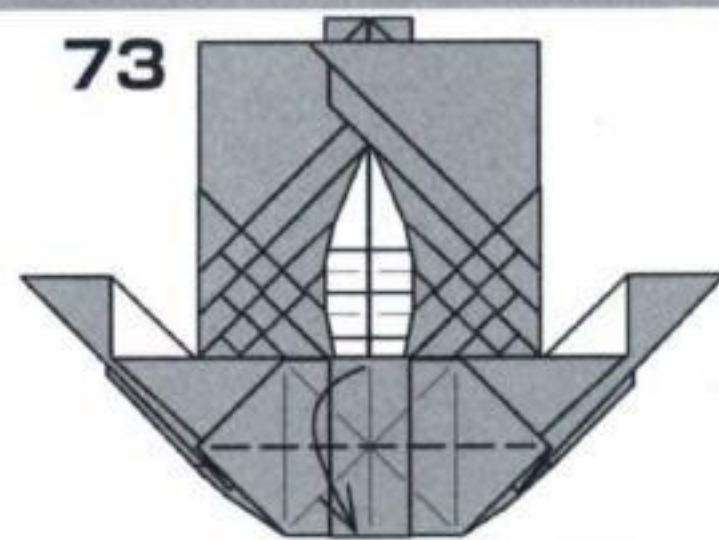
先の部分を
平らに広げる



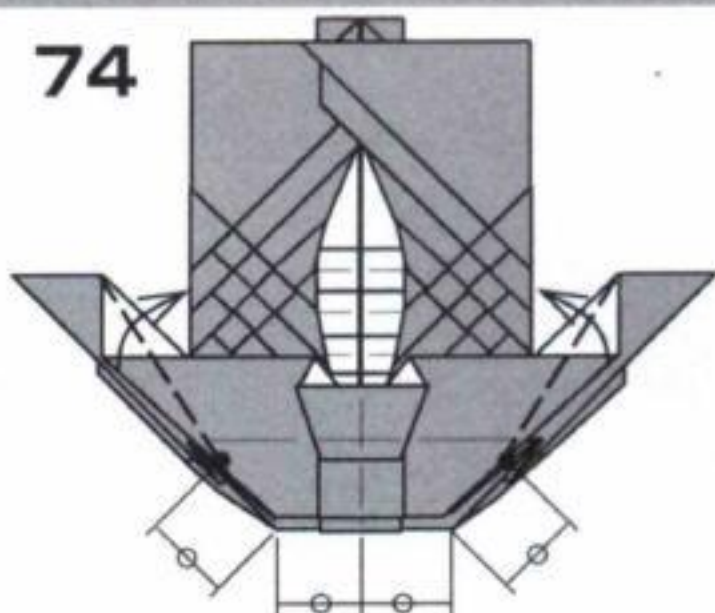
沈め折り



左右に
引っ張り
平らに
つぶす



74



75



76



77



75-76で折った
ところに戻す

78



75-76で折った線で、
段に沈め折り

79



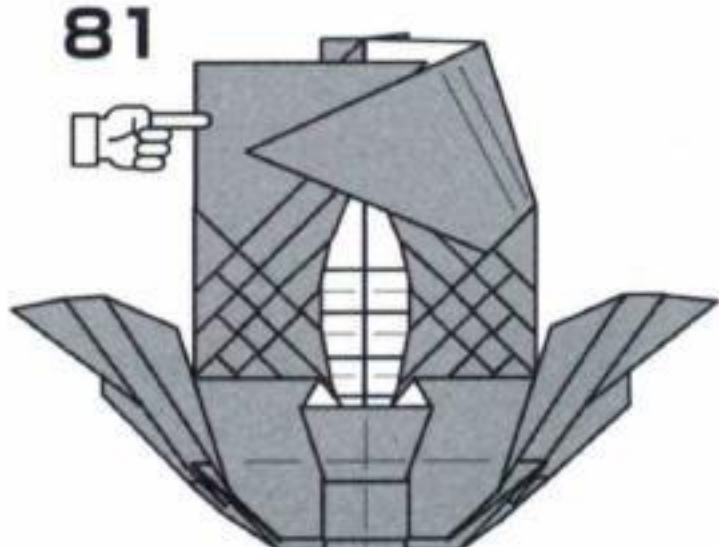
段のところを
引き出しながら
尾の部分を
引き寄せるように折る

80



裏側

81

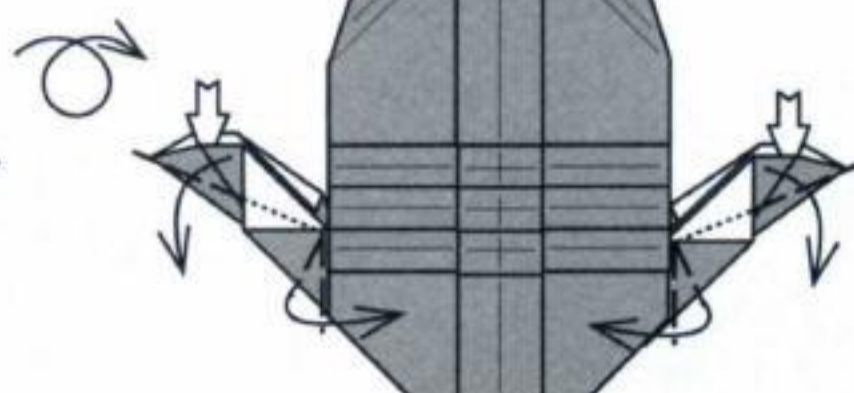


左側も 79 と同じ

82

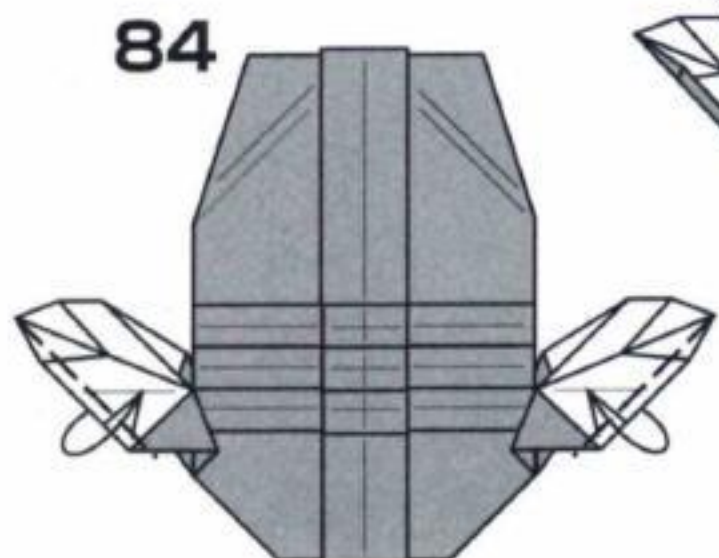


83

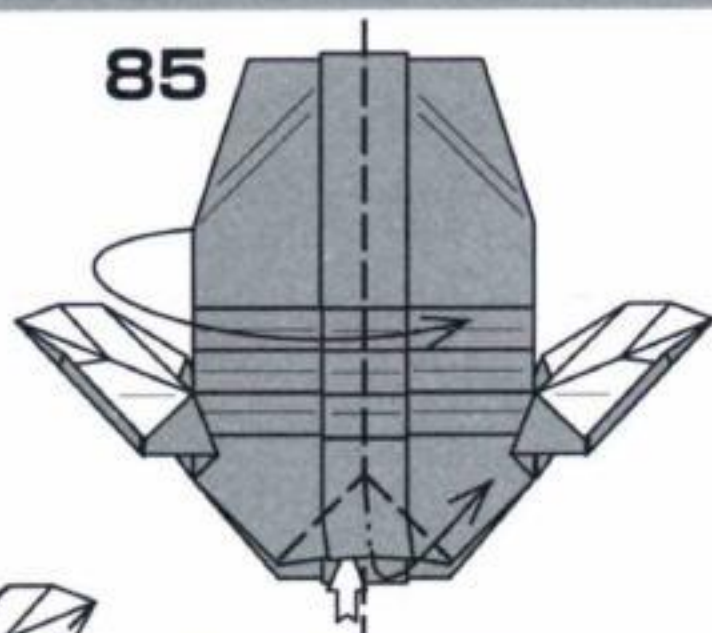


引き寄せるように折る

84

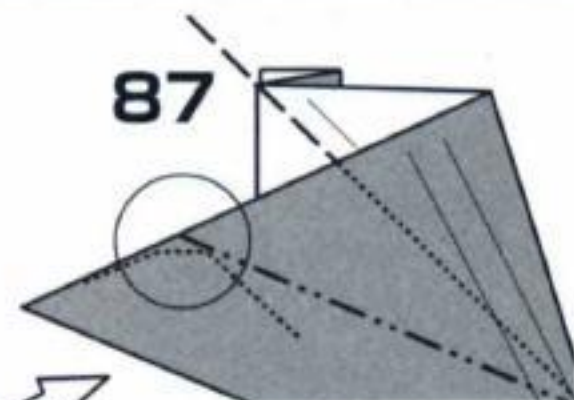


85



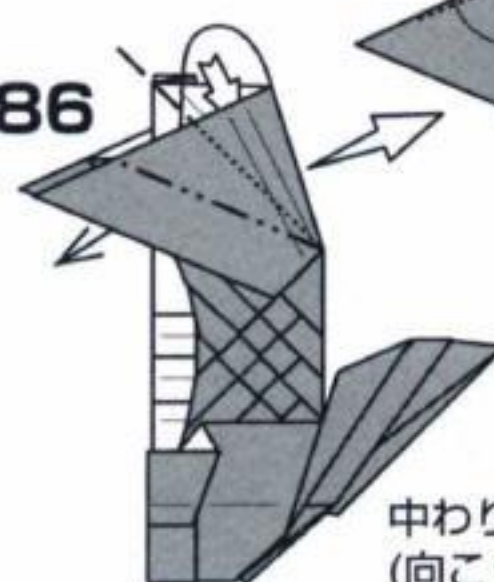
下の部分を内側に
折り返しなが
ら
全体を半分に折る

87

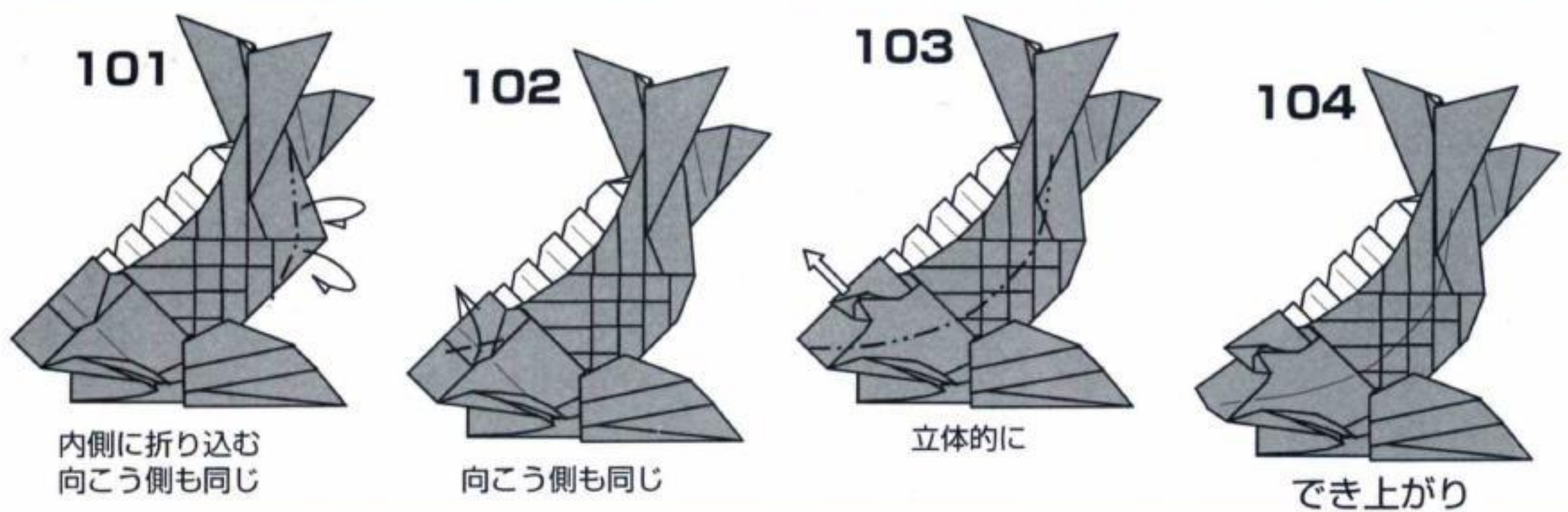
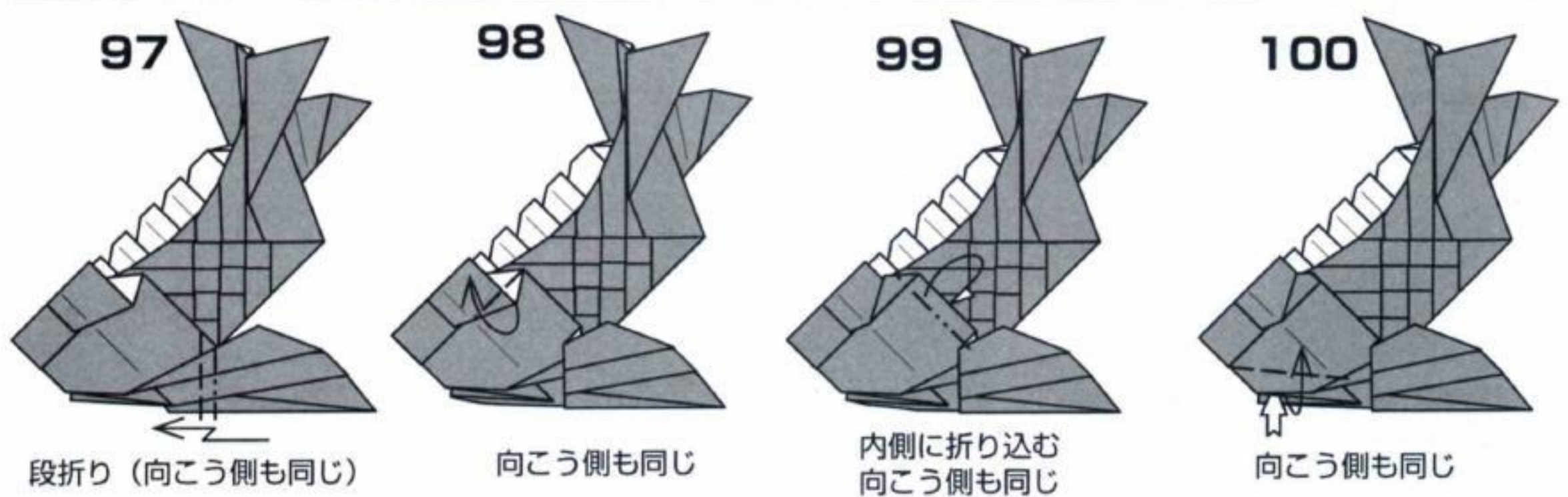
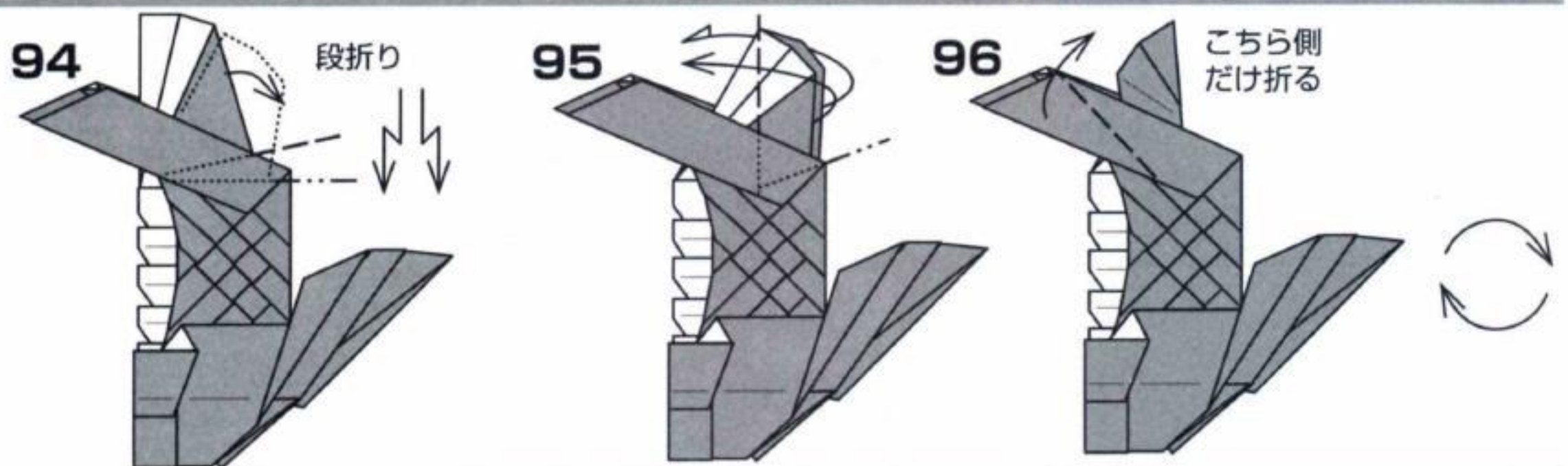
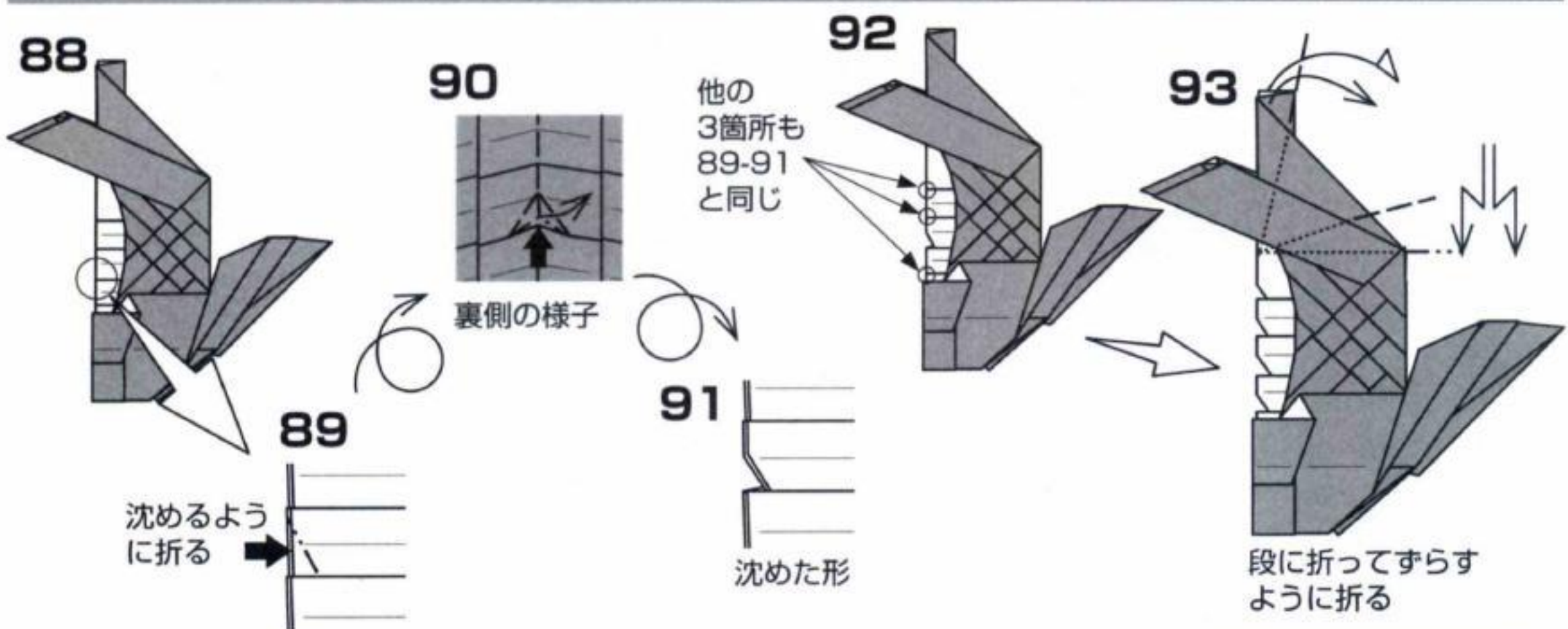


拡大図
折る位置の目安

86



中わり折り
(向こう側も同じ)



コアラ

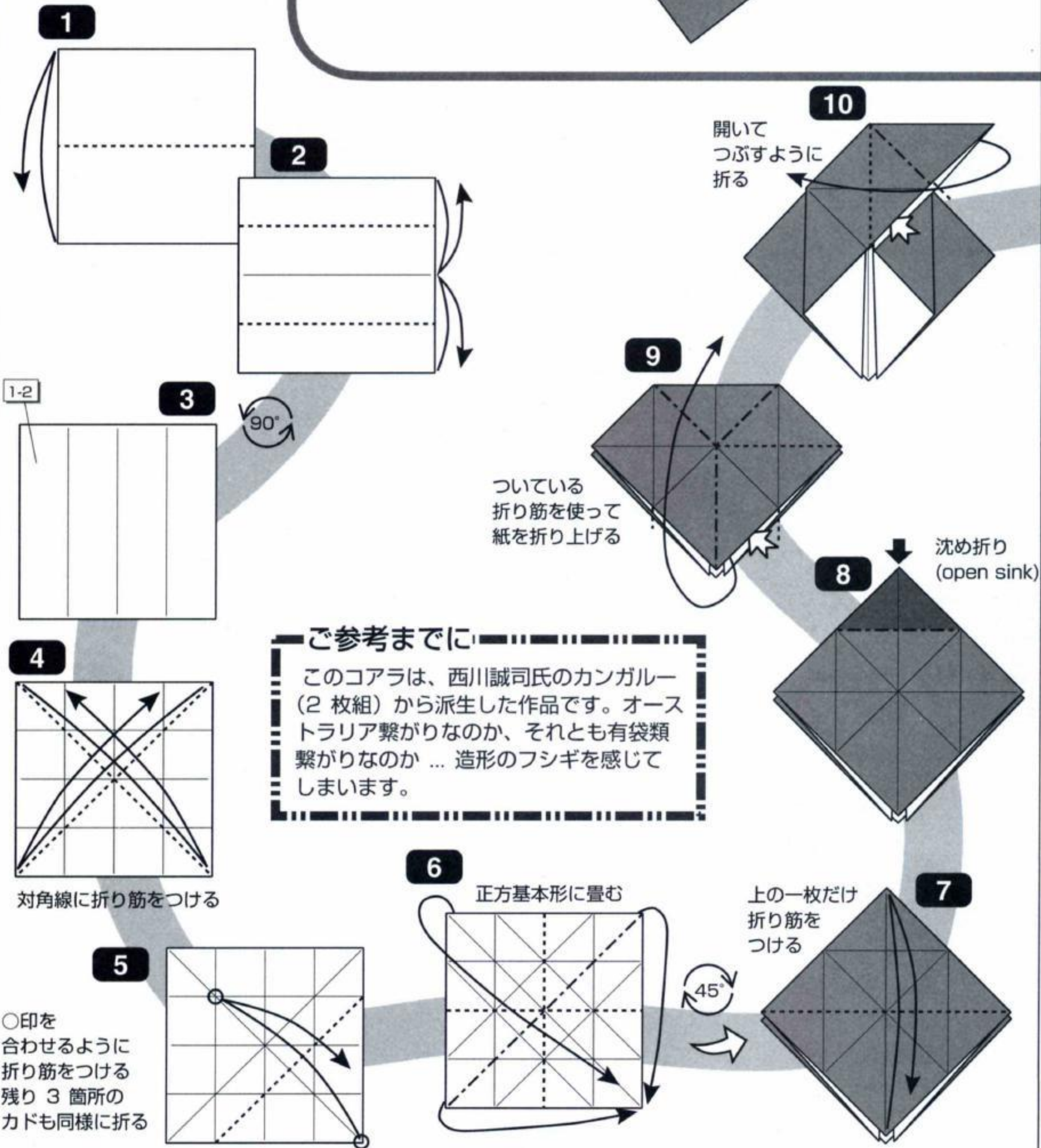
Koala Based on Nishikawa's Kangaroo

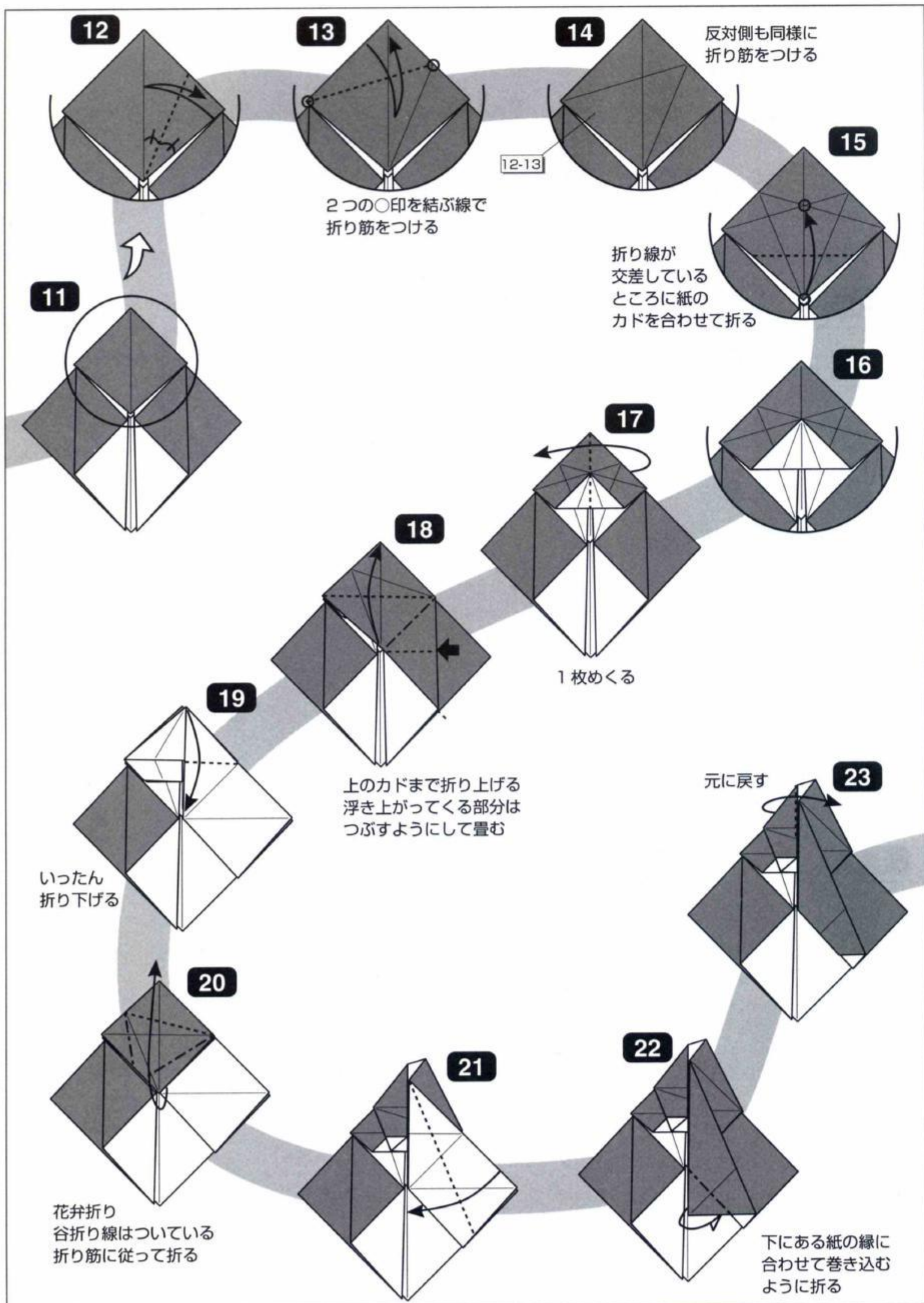
作 / 図 渡辺 大

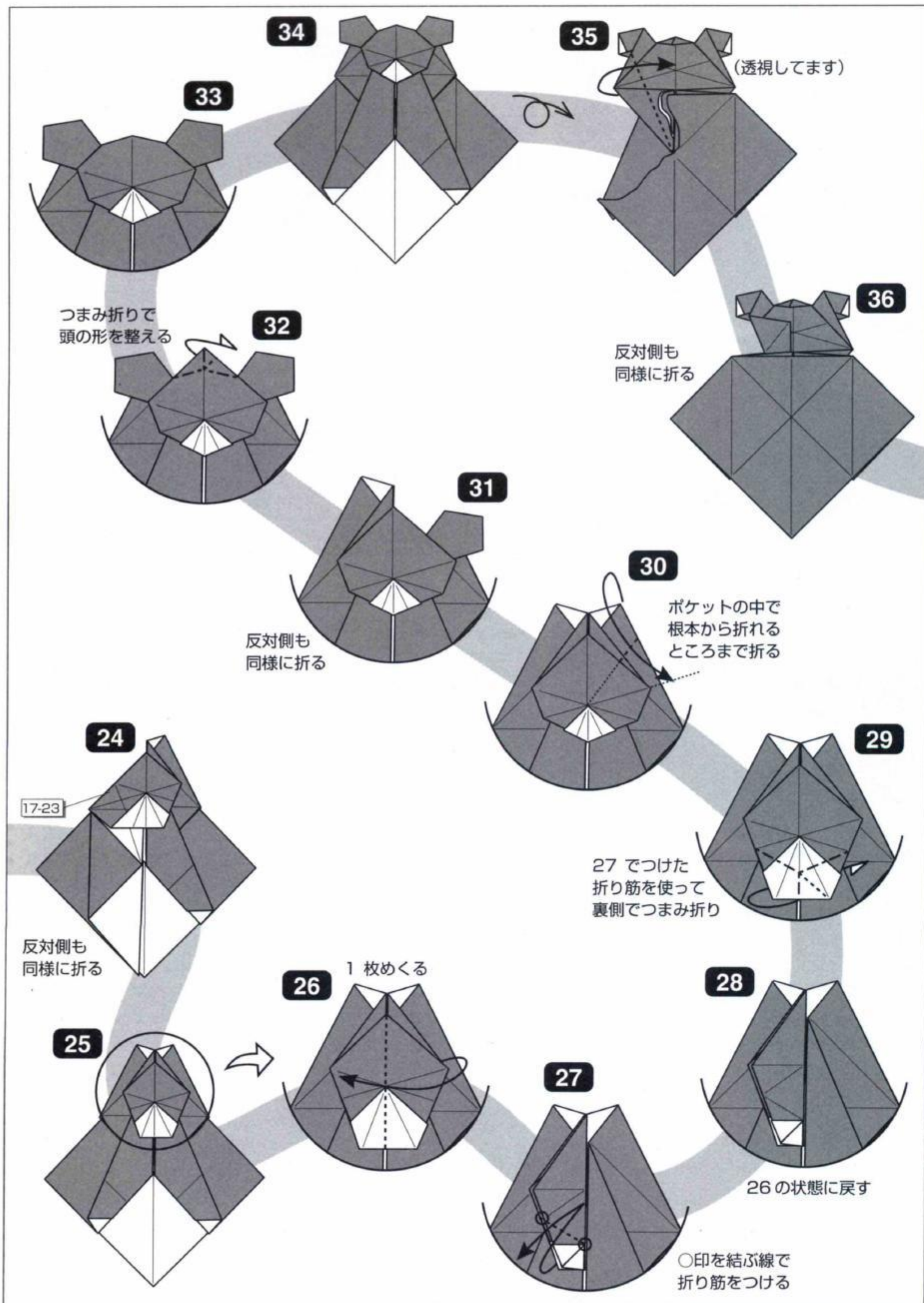
創作 2006/08/20

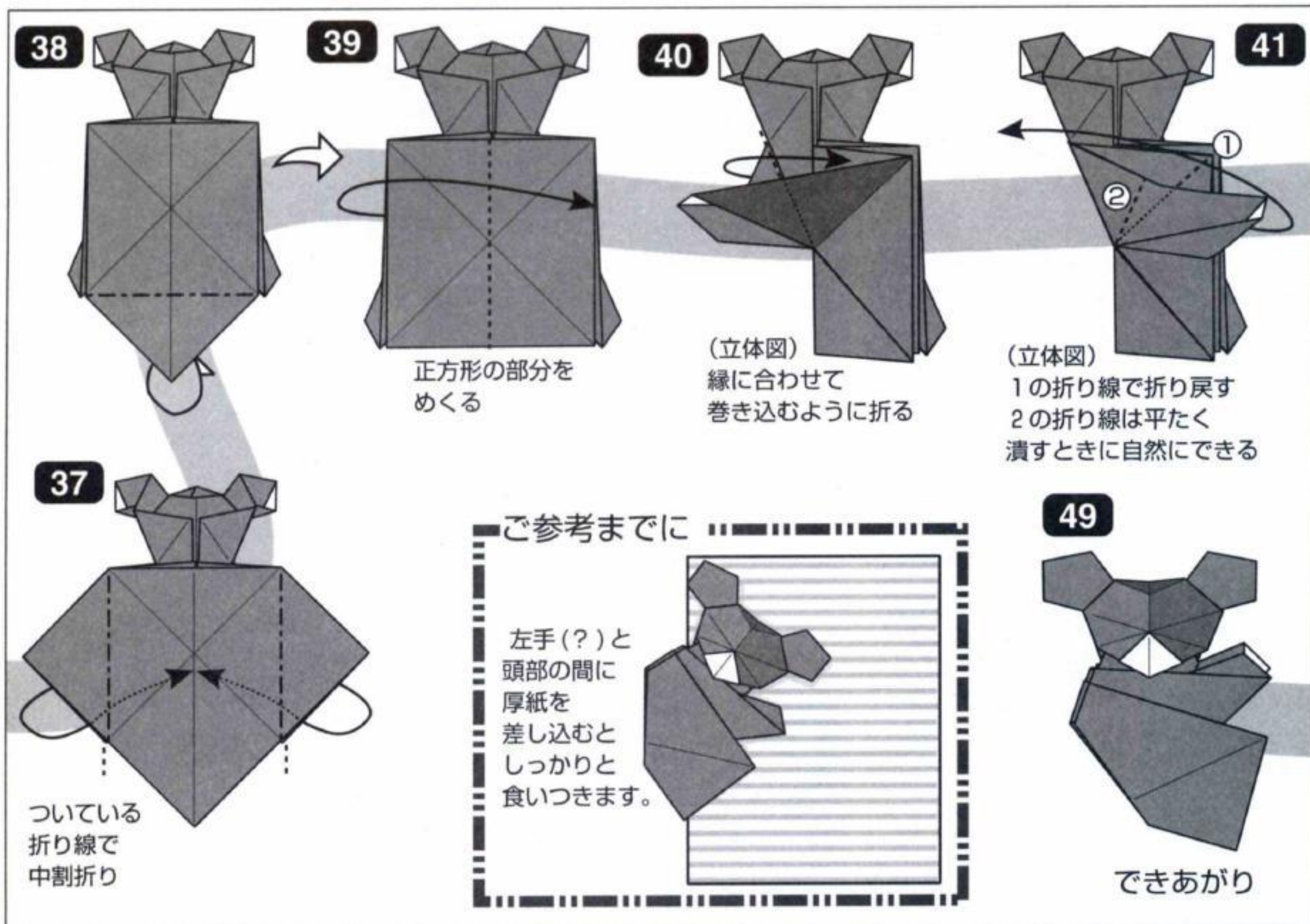
作図 2006/10/21

Model and Diagrams by
Watanabe Dai









Orisuzi ("Fold-Creases")

折ることの楽しみ

Joy of Folding by Itself

尾川 知

Ogawa Tomo

折り図と楽譜が比較されることがあります。共に作品の再現を目的とした記号表記であるという観点から。楽譜が音楽作品(楽曲)にとって折り図にあたるものだとなれば、楽曲を演奏することは、折り紙を折ることに相当するでしょう。

楽曲は、作品を再現する過程(演奏)自体が作品です。演奏は作品そのものです。これに対応させれば、折り紙は、折ることそのものが作品ということになります。

しかし、音楽と折り紙では、決定的に異なることがあります。演奏の後には何も残りませんが、紙を折った後には折られた紙が残るということです。そして、折り紙は再現の過程だけではなく、その後に残ったものも作品と

みなすということです。

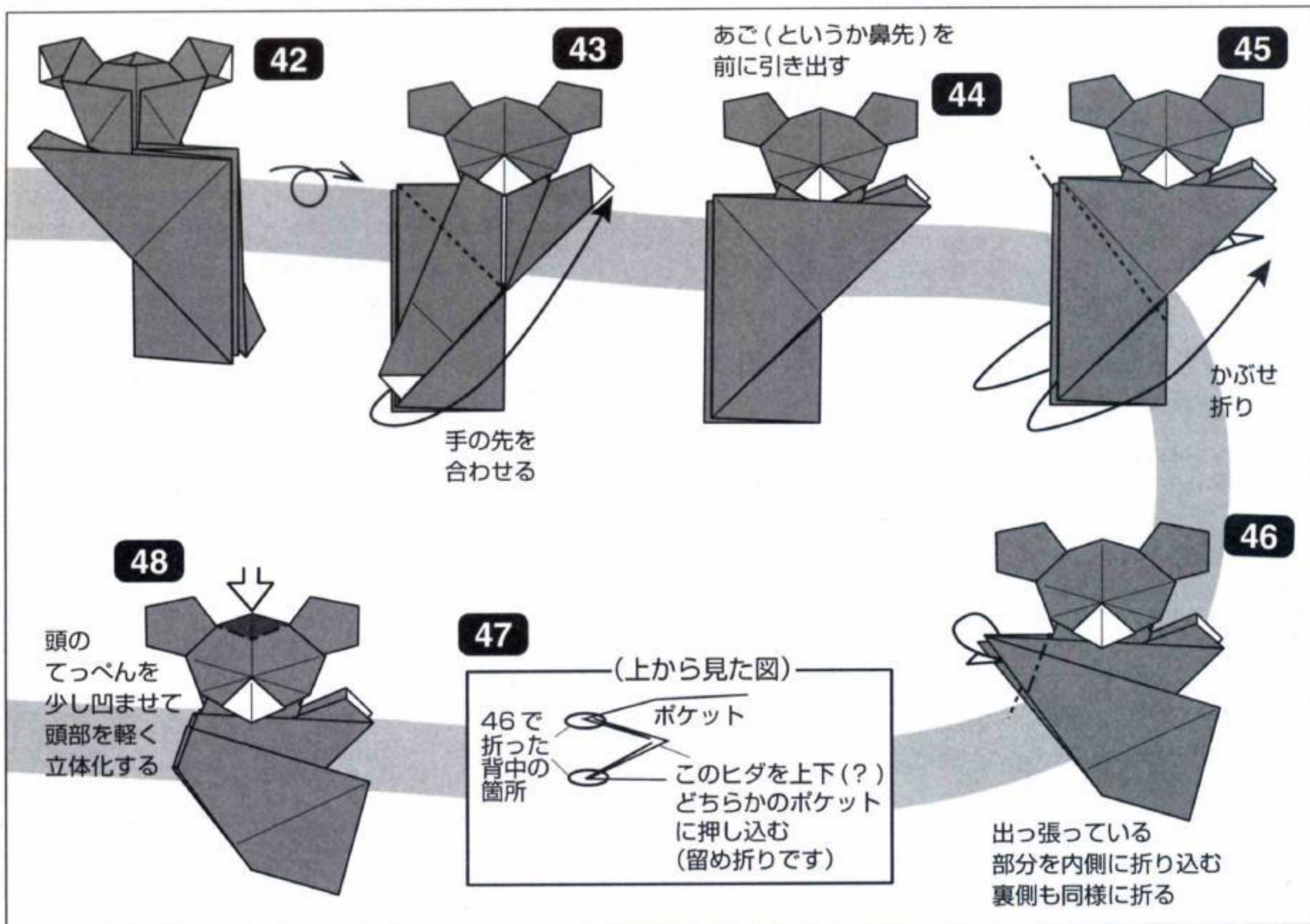
折り紙では、過程と結果の両方が作品とみなされます。これは他の創作手段と比べて特殊なことです。再現性が重視される創作手段(音楽の他に演劇等)は、再現過程のみが作品となっていることがほとんどです。作業の結果が作品となる創作手段(絵画や彫刻等)は制作過程が作品とされたり、再現性が意識されたりすることは、めったにありません。たいていの創作手段は過程か結果かどちらかしか作品とみなされません。が、折り紙作品はその両方があって成立しています。

そこで、僕が思うのは、結果(造形)に対して過程(折り方)の方は、作品として意識されることがまだまだ少ないのではないかと思います。折り方を、単に造

形に到る過程ではなく作品として意識すれば、折り紙を違った目で見られると思います。折り方こそが作品の主題で、紙の最終的な状態は結果に過ぎないといった作品作りもありだと思います。

造形や機能性や数理と結びつかなくても、折り紙作品はそれを折るということそのものが作品であり、そこに本質的な楽しさがあると思います。(実際には、この楽しさに造形等の要素が加わって折り紙の魅力を増しています。)

折り紙は、造形手段としての高い自由度と、作品の再現性とを同時に持っています。これはすごいことです。造形の完成度だけでなく、再現にもっと注目すれば新しい楽しさがあると思います。



折紙三昧

34

Origami-Zanmai (This Origami and That)

昨年4月より、開設いたしましたJOASホールを更に、折り紙教室、折り紙に関する各種研究発表会等の会場として広く活用いただくために、以下の細則に従って貸出いたします。

1) 使用資格

雑誌『折紙探偵団』の購読者を1名以上含む個人またはグループ

2) 使用料

3時間 10,000円(最大)

1日(原則10:00-18:00) 15,000円(最大)
講習内容等によって相談に応じます。

3) 申し込み方法

●使用者代表および購読者(代表者と同一の場合は必要ありません)の住所、氏名、連絡先、希望日時、講習内容等を記載しJOAS事務局宛でメールまたはFAXで申し込むこと。●JOAS主催の教室等に優先使用しますので希望に添えない場合があります。●キャンセルについては使用料の30%を申し受けます。●

折り紙教室等の開催情報を機関誌やウェブ上で告知することを希望する場合は、申し込み時にその旨を明記してください。若干の審査をさせていただく場合があります。また、希望がない場合もJOASの判断で告知等を行う場合があります。

4) 使用上の注意事項

●使用料は利用当日までに(当日含む)JOASに支払うこと。●すべてのゴミは持ち帰ること。●故意または不注意による備品の破損等については弁償すること。●ホール内では火気を取り扱わないこと。●ホール内で飲食する場合は節度ある範囲で行うこと。●その他、利用に際しては管理者の指示に従うこと。

◇JOASホール概要

●定員40名(椅子とテーブル完備) ●プロジェクター(RGB、ビデオ端子あり)、書画カメラ、100インチスクリーン ●トイレあり

◇これまでのJOASホールでの教室/集会

2006年4月1日(土)東京友の会例会
2006年4月8日(土)JOASホールオープニングセレモニー
2006年4月15日(土)布施知子氏教室「知子の部屋」

JOASホールの活用を

Application for the Use of the JOAS Hall

日本折紙学会

Japan Origami Academic Society

2006年4月23日(日)北條高史氏教室「現代折り紙」
2006年5月6日(土)東京友の会例会
2006年5月28日(日)北條高史氏教室「現代折り紙」
2006年6月3日(土)東京友の会例会
2006年6月17日(土)布施知子氏教室「知子の部屋」
2006年6月24日(日)神谷哲史氏教室「ある折り紙作家の教室」
2006年7月1日(土)東京友の会例会
2006年7月9日(日)神谷哲史氏教室「ある折り紙作家の教室」
2006年7月15日(土)布施知子氏教室「知子の部屋」
2006年8月5日(土)東京友の会例会
2006年9月2日(土)東京友の会例会
2006年9月16日(土)布施知子氏教室「知子の部屋」
2006年9月24日(日)北條高史氏教室「現代折り紙」
2006年10月7日(土)東京友の会例会
2006年10月21日(土)布施知子氏教室「知子の部屋」
2006年10月29日(日)神谷哲史氏教室「ある折り紙作家の教室」
2006年11月4日(土)東京友の会例会
2006年11月25日(土)布施知子氏教室「知子の部屋」
2006年11月26日(日)北條高史氏教室「現代折り紙」
2006年12月2日(土)東京友の会例会
2006年12月16日(土)布施知子氏教室「知子の部屋」
2006年12月17日(日)第1回「折り紙の科学・数学・教育研究集会」
2007年1月6日(土)東京友の会例会
2007年1月20日(土)布施知子氏教室「知子の部屋」
2007年1月28日(日)神谷哲史氏教室「ある折り紙作家の教室」
2007年2月3日(土)東京友の会例会

展開図折りに **挑戦**

Crease Pattern
Challenge!

第45回 フクロウ

Owl

勝田恭平

Katsuta Kyohei

Created: 2006.08

Paper Size: 64×64cm

Width: 32cm



フクロウが獲物を獲る時の写真や映像を見て、ああ、これを折りたいと思ったのはもうかなり前のことです。今回、簡単なフクロウの頭部を蛇腹から折ることを思いついたので、続いて蛇腹ならではの紙の重なりを上手く使った翼が折れないかと模索して、この作品ができました。

では、簡単に説明をしたいと思います。展開図左半分は見やすいようにカドを倒したときに出来る線は入っていません。が、左右どちらにしても展開図を読める人なら何箇所か気になる点があるかと思います。ちゃんと畳めない場所ですが、それは立体化のための線で、逆に言うと、この作品は平らには折り畳めず、立体化した状態での多少不安定な作品になるわけです。

造形の簡単な説明をします。翼ですが、22.5度ではなく1:2の角度で中割り折りし、それをずらして、さらにそこで付いた線を一度開いて山谷を直します。翼はここまでが右半分の展開図に示してあります。あとは中割り折り、段折りなどで仕上げてください。横の辺から1段目の、脚の方から伸びる中途半端になっている線の周辺は適当に潰してください。畳めないことは無いですが、どちらにしても浮く形になります。また、そのとき発生するズレを翼の段にも利用しています。

展開図で畳むと翼が下に向きますが、めいっぱいの位置で背中を広げながら横に折り上げると身体が曲がり、立

体化します。このときの線はわかり辛くなるので書いてありません。

上の辺の中央の長いカドは背中に回して、翼を開くことによって出来る穴を隠す役割をして、背中からの観賞にもある程度耐えられますが、留まらないので糊付けが必要になります。

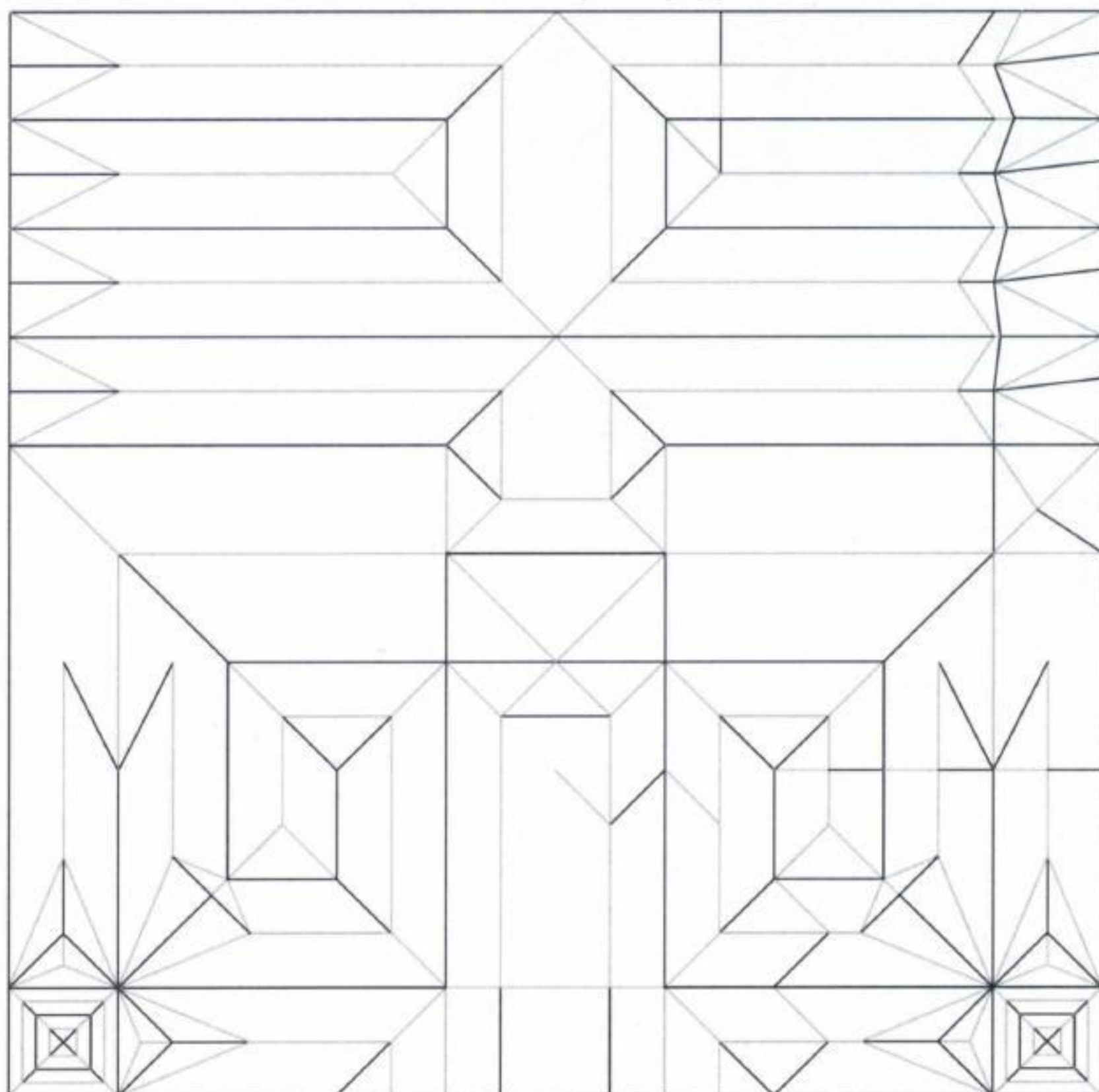
脚の指は前後2本ずつで、内部カドと辺の1つを前方に持ってきます。頭部の造形は、どうなっているのかはわかると

と思いますが、紙が破れやすいので注意してください。尾羽は段折りの連続です。

こんなものでしょうか。展開図を折り畳むまでは蛇腹作品としてはそんなに難しくない部類に入ると思いますが、造形だけ頑張ってください。どうしてもわからなくて、でも折りたい!という人は

「おりがみ新世代」

<http://loughmaker.hp.infoseek.co.jp/>までどうぞ。



File-21

ジャン・ポーリッシュ

Jan Polish

Jan Polish(ジャン・ポーリッシュ)=1988年より
The Friends(現在のOrigamiUSA)評議員。
OrigamiUSAの副会長などを歴任。海外のコン
ベンションに積極的に参加している。



■折り紙を始めたきっかけは何ですか？

1983年か84年頃のことですが、工芸教室に通っていた私の友人がクラブを作り、市役所のクリスマスツリーに飾る折り紙を折っていました。私は彼女を手伝おうと思ったのですが、うまく折れませんでした。そこで伝承の「あやめ」を教えてもらい、折り紙に惚れてしまったのです。ただの正方形の紙から、自分の手でこんなに素敵な花を作ったとは、信じられませんでした。

■OrigamiUSAに参加したのはいつですか？

1986年です。リリアン・オッペンハイマーさんが自宅の2階で折り紙の本や紙を販売していたので、私は友人と一緒に買いに行きました。リリアンさんが言うには、The Friends of The Origami Center of America(以下、The Friends)という団体に加入すれば割引きするということだったので、入会しました。この団体が、後にOrigamiUSAと改名したのです。

■リリアン・オッペンハイマーさんはOrigamiUSAの創設者の1人ですね。どんな人でしたか？また、OrigamiUSAはどのようにしてできたのですか？

リリアンさんは1950年代に折り紙と出会いました。彼女は、教わったことは人に教えないと気がすまない人で、しかもその情熱を周りに伝染させるようなカリ

スマを持っていました。

彼女は活発な性格で、吉澤章さんやリジア・モントーヤさん、ロバート・ハービンさんなど世界中の著名な折り紙作家と知り合い、またフレッド・ロームさん、ロバート・ニールさん、ニール・イライアスさんなど国内の先駆者たちを見出しました。そればかりでなく、彼らのあいだの交流を促し、50年代のうちにThe Origami Center of Americaを設立しました。

リリアンさんが高齢になるにつれ、彼女の活動を引きつぐことが求められていました。そんな折、リリアンさんがアリス・グレイさん、マイケル・シャルさんと知り合い、その2人が中心となって、1980年にThe Friendsが設立されました。アリスさんがアメリカ自然史博物館で働いていたので、そこに事務所が置かれました。1993年にリリアンさんが亡くなったとき、The FriendsがOrigamiUSAという名称に変わりました。

■ご自身はOrigamiUSAでどのような活動をしてきましたか？

入会したときに、自然史博物館で例会があるということを知って、毎週参加するようになりました。すると、アリスさんがニュースレターのタイピストを探していたので、私はボランティアを買って出ました。翌年のコンベンションでは、マイケルさんを手伝って紙の袋詰めをしました。それが急速に拡大して、ニュースレターの編集やコンベンションの運営をするようになり、1988年に評議員に選ばれました。現在は会計やコンベンション実行委員長などを担当しています。仕事からは引退したので、午後はほとんどOrigamiUSAの事務所で働いています。

■OrigamiUSAはどのように運営されているのですか？

OrigamiUSAは、創設者の3人から、教えるということ、分かち合うということ、

そしてボランティアの精神を受けついでいます。特にマイケルさんは、誰に会っても、その人はきっと何か手伝うに違いないと考えるような人で、彼に仕事を頼まれると、みな自分から進んで仕事をするようになり、仕事を楽しむようになるのでした。

常勤の事務員が1人と、パートタイムで働いている人が何人かいますが、それ以外は、評議員も含め、すべてボランティアです。それぞれの活動ごとに委員会があって、1人の責任者の下に多くのボランティアが働いています。それぞれの委員会は月に1度評議員会に報告をしています。

■ご自身は今度どのような活動をしたいと思いますか？

OrigamiUSAの財政は少々不安定です。折り紙の楽しさをもっと広げるために、会の収入をしっかりさせたいと思います。また、教育やセラピーに折り紙を活用することにも興味があります。すでに効果的な実践をしている人たちがいるので、それを世界中に広げられるのではないかと思います。

折り紙作品は国から国へ伝わり、その過程で世界中の人が作品への愛を共有します。世界が折り紙から学ぶことができるのではないのでしょうか。



▲昨年の名古屋コンベンションでスピーチするジャンさん。通訳は筆者



▶クロウズアップでも紹介されていた故、マイケル・シャル氏。誰でも一瞬のうちに友達にしてみよう人柄はまさに折り紙の伝道師のような人

Rabbit Ear つまみおり Information



◀ 多彩な顔触れで一杯になったJOASホール

▶ 「ミウラ折り」を歴史も含めて発表をする三浦公亮氏



第1回 折り紙の科学・数学・教育研究集会報告

去る12月17日(日)に、日本折紙学会の専用施設であるJOASホールで、第1回折り紙の科学・数学・教育研究集会を持つことができた。今回の会は、9月にカリフォルニアで行われた第4回折り紙の科学・数学・教育国際会議の成果を引き継ぎ、折り紙研究者・愛好家の情報交換を促進していく試みのひとつである。当日は、教員、学生、一般の折り紙愛好家など、多彩な顔触れが約40名集まった。

まずは、川崎敏和さんから、川崎英文さんの協力を得て、プレプリント(正式な論文として発表する以前の論文)集を作成するというかたちで、折り紙に関する論文の収集制度が緒についたことが発表された。詳細は、決定しだい本誌で明らかにする予定である。このシステムは、折り紙の扱う領域があまりにも学際的で研究の幅が広いために、研究成果をどこに発表してよいかわからない研究者などにとっても朗報となるはずだ。

そして、国際会議の発表者からピックアップした4人、三浦公亮さん(宇宙工学)、池上牛雄さん(数学専攻学生)、館知宏さん(建築専攻学生)、三谷純さん(計算機科学)の発表が続いた。どれも内容の濃いもので、「とても面白かったけれど、頭がパンク寸前です。もったいないので、1回の会では3人まででよいかも」といった声も聞こえたほどである。質問もたくさんあり、充実した時間であった。

三浦さんの発表は、有名なミウラ折りを、研究の歴史をも含めて説明するもので、その内容は、今期末に会員特別資料としても配付される予定なので、楽しみにしてもらいたい。

池上さんの発表は、国際会議のシンボルマークにもなったフラクタル折り紙に関

するもので、いわば、折り紙を用いた数学の「実験」と言えるものである。理論としてまとめてほしいという数学者からの意見もあったが、奇妙な幾何学的風景が目の前に広がる刺激的な発表であった。

館さんの発表は、剛体面(歪まない面)の組み合わせとしての折り紙をCGでシミュレーションする研究と、襷を使って折るだけで精緻な多面体モデルを製作する方法に関するものであった。いずれもきわめて理論的でありながら、あくまでも折り紙マニアの情熱が根底に感じられる発表であった。

三谷さんの発表は、氏の近年の折り紙に関する研究を概観するものであった。それぞれのトピックに興味深い点があったが、以下、9月の会議では発表されていなかった最も新しい研究について、簡単に紹介しよう。

その研究とは、展開図が決められたとき、紙の面の可能な上下関係を数えあげるというものである。常識に反さない結果としては、山折り谷折りを正しく指定した、対称線で切った半分の折鶴の展開図からは、ひと通りの造形しかありえないことが示された。半分であるのは、折鶴全体とすると、現状では計算が困難になるからとのことである。一方、伝承の兜の展開図から

は、山折り谷折りを指定していても、9種類の異なった造形が可能であることが示された。じっさいにどのようなものか、また、折鶴と兜の展開図にどのような違いがあるのかを考えてみると面白い。

この問題は、いわゆる計算複雑性という分野にも関係している。面の上下関係や山谷の決定は、折り目(折り線)が多くなると、検証すべき場合の数が階乗的、指数的に増え、それを数えあげることが難しくなる、といったことである。したがって、数えあげにおいても、工夫されたアルゴリズムが必要になる。

一方で、折り紙における計算複雑性は、単純な折るという操作からなる折り紙が、豊かな造形を生み出すことができる理由の一端を示している、とも言えるかもしれない。17文字の俳句の種が尽きないことに似て、折り紙の世界はどこまでも限りがないのである。

今回の会の反省もあげておこう。まずは、発表内容の専門性が高いわりには、盛りだくさんにし過ぎたかもしれないことがある。関連して、会の名前に「教育」も冠しながら、それに直接関係する発表がなかったこともあげられる。

会場の雰囲気は堅苦しくなく、自由に意見交換ができるものだったと思うが、発表とは関係なくても、また、短い時間でもよいので、出席者のうちの希望者が、自分の興味や成果を発表するような時間を設定してもよかったのではないかと考えている。

以上のことなどは、次回からは改善したい。なお、今回は、早くとも3ヶ月後ぐらいではないかと思っている。各地の友の会の定例会、コンベンション等と合わせて、楽しみにしてもらいたい。(前川 淳)

第2回折紙探偵団名古屋コンベンション



▲会場入り口では昆虫巨大折り紙がお出迎え

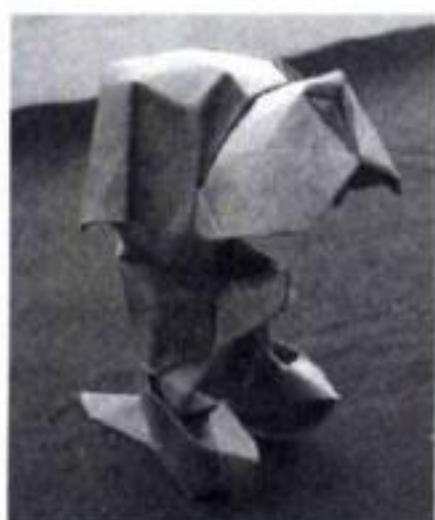


▲全体会会場

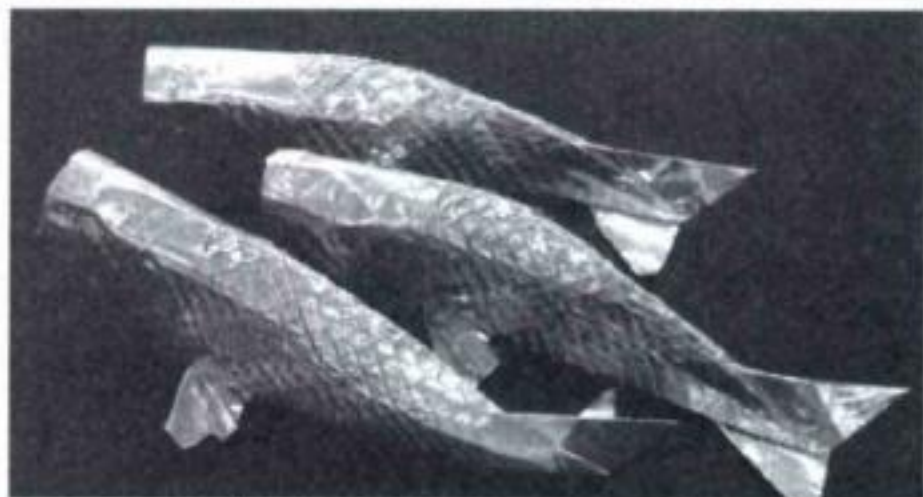
第2回折紙探偵団名古屋コンベンションが昨年に続いて名古屋芸術大学で開催された。

今回からは海外からスペシャルゲストを招くことになり、第1回目のゲストとして、OrigamiUSAのジャン・ポーリッシュさんを迎えた。(ジャンさんのことはペーパーフォルダーの横顔を参照。)また、今回から人気コンテストが開かれた。コンテストに応募した作品の中からコンベンション参加者による投票で人気作品が選ばれた。1位に選ばれたのは千葉から参加の霞誠志氏。賞状と商品が贈られた。大会も2回目とあって、スタッフの動きよく、好評のうちに無事終了した。

▶作品の展示会場は一般にも解放、賑わいを見せていた



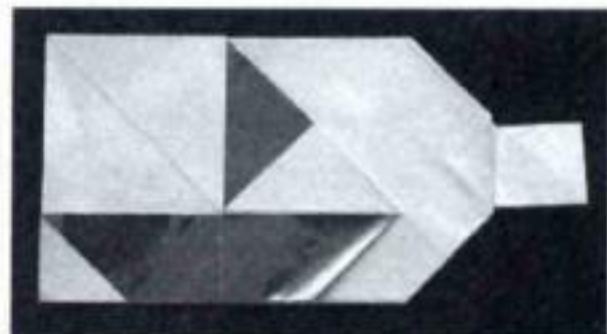
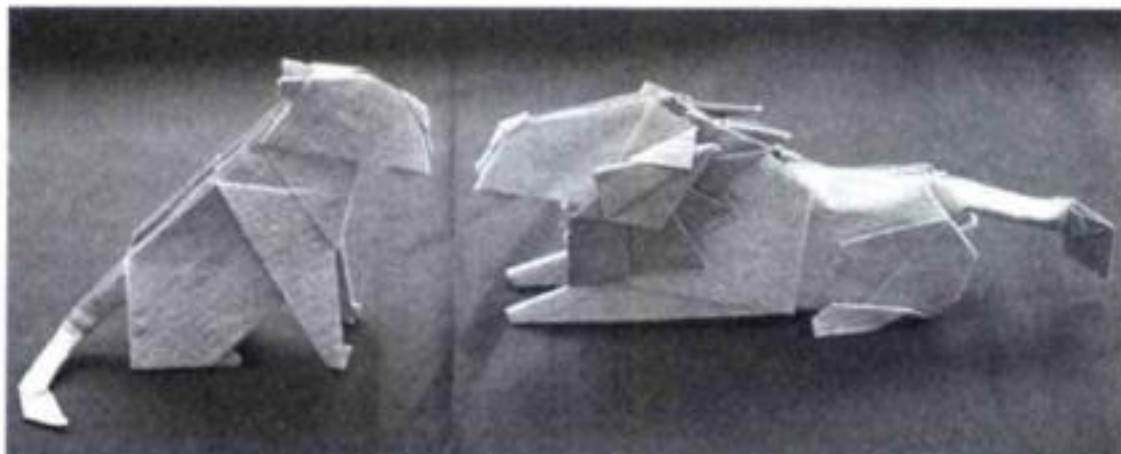
▲人気投票で1位になった「お願いじゃ犬」



▲ホイル紙で折られた亀井理明氏の鯉の「群泳」



▲東海友の会代表の川畑氏から賞状をうける霞誠志氏



▲宮本宙也氏のボトルシップ

▲各務均氏のライオン

◆シアトルの街で見つけた折り紙

昨年末から、シアトル在住の購読者、早津あゆみさんのところに3ヶ月の予定でホームステイをしています。シアトルの折り紙事情を紹介したいと思います。

シアトル折り紙事情

ダウンタウンのショッピングモール、Pacific Placeで見た折り紙は、Mesmerizeという化粧品店のディスプレイ。赤や黄色のコピー紙に、モノクロで模様を印刷した紙を使い、様々な形に折った折り紙を、モビールのようにつなげて天井からつり下げたもの。ウィンドウは勿論、店舗の中のあちこちに飾られていました。お店の人に聞いたところでは、アメリカ中にあるこのメーカーの店舗で展開しているディスプレイで、考案したのは美術専門学校生とのこと。制作もその生徒が行ったのだとか。肝心の折り紙なのですが、基本的にはどれもシンプル。花のようなものや二双舟の基本形など、形が抽象的。沢山の人が折った為に、正しく折れていないのでは、と思われるものもありました。

お次はあゆみさんが「前から日本の折り紙好きに見てもらいたかった」と言う、巨大な鶴のランプシェード。宇和島屋という日本

食材を中心としたスーパーの、フードコートから一番近い出口にあります。折り鶴の形に組んだ針金に、和紙を貼ったようなつくり。残念ながら折ってはいないのですが、折り鶴の形はよく表現されているのではないかと思います。(松浦英子)



▲MesmerizeのOrigamiディスプレイ



▲宇和島屋のフードコートにあるお店で

河合豊彰氏ご逝去

長く折り紙の世界で活動をされ、多くの折り紙愛好家を育て、愛されてきた河合豊彰さんが2007年1月11日に癌のためご逝去されました。

1月14日、日本折紙学会宛にその知らせが届きました。

河合豊彰先生がご逝去されました。享年74歳、1年ほど癌の闘病生活であったとのこと。機会あるごとに書かせて戴いていることですが、私が創作折り紙に魅せられたのは河合先生の著書に出会ったからです。保育社のカラーブックス「おりがみ」はどれほど繰り返し折ったか



写真：季刊『をる』より

は、何と手紙を添えたか覚えていませんが、数ヶ月後に戴いたお返事のお手紙は今も大切に取ってあります。送った作品については「大変結構です。」一言ほめていただきました。中学生がどれほど喜んだことか。そして、あ

わかりません。中学生になって少し創作めいたものがたまったところで、自作を先生に送りました。今となっては、

やめ池遊園地での展覧会のために奈良に滞在するというものでした。お手紙を戴いた翌月、父に連れられ先生の滞在されたホテルを訪ね、しばらくお話をさせていただきました。どれくらいの時間であったのでしょうか、自信に満ちて折り紙をされる先生にどれほど勇気づけられたことか。今こうして折り紙を続けているのは、間違いなくこの機会を得たおかげです。

私が上京した折り、ご挨拶に伺い、大変ごちそうになったりもしましたが、もう一度、感謝の気持ちをお伝えできなかったのが残念でなりません。お通夜の霊前で、ご冥福をお祈りするとともに「ありがとうございました」と申し上げました。 西川誠司

◆飛翔リアル鶴のライフサイズ展示

第10回メディア芸術祭併設展「先端技術ショーケース07 -未来のアート表現のために-」において、神谷哲史氏作のライフサイズの飛翔リアル鶴が展示される。

これは折り紙の科学・数学・教育研究集会のところでも紹介されている筑波大学の三谷純氏(コンピュータサイエンス専攻)の依頼によるもので、東京都写真美術館に展示される。

ほかに三谷氏が作成した展開図に関する解説パネルの展示・その他、折り紙作品(数点)の展示などがある。

作品製作に使用される用紙の大きさは4メートル。広げた羽の大きさは約2.8メートル。これが会場の天井に吊される。

この作品製作が2月18日にJOASホールで行われる。当日見学可、ただし、会場が

狭く見学できる人数に制限があるので事前に問い合わせを。

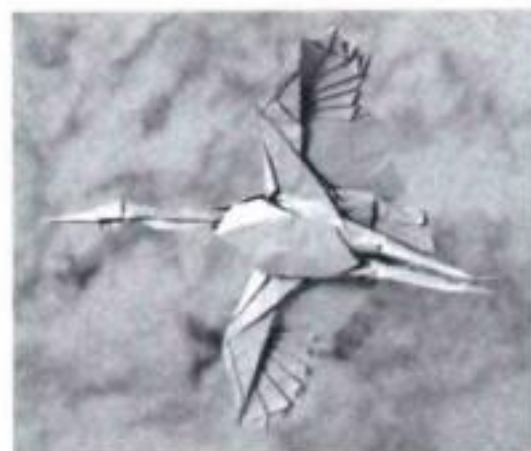
■会期=2007年2月24日(土)~3月4日(日)

■会場=東京都写真美術館

地下一階 映像展示室エントランス他
東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

■入場無料/開館時間10:00~18:00

■主催=文部科学省/独立行政法人科学技術振興機構



当日4メートル四方の用紙で折られる「飛翔リアル鶴」折り手 神谷哲史、勝田恭平ほか

います。/G205教室/作品、講師未定。

●3月24日(土)(予定)会場=名古屋芸術大学 西キャンパスG棟204・205/作品、講師未定。

関西友の会 ※折り紙は各自持参

●2月18日(日)/会場=長岡京市産業文化会館/14:00~17:00/参加費=高校生以上500円/講師:肥下徳志・坪正/作品:ウサギの指人形(坪正 作)他

静岡友の会 ※折り紙は各自持参

●3月4日(日)会場=「紙友館ますたけ」増武ビル3F/参加費=500円/時間=10:30~12:00/問い合わせ:054-254-4541(増武内 山口16~20時)

東京友の会 ※折り紙は各自持参

会場=JOASホール/参加費=500円(中学生以下300円)/講習会=14:00~/研究会=16:00~

●2月3日(土)/JOASホール/講師:西川誠司/作品:いのしし

●3月3日(土)/JOASホール/講師:未定/作品:未定

東海友の会 ※折り紙は各自持参

●2月17日(土)会場=名古屋芸術大学 西キャンパスG棟204・205/参加費=大人500円(中学生以下は200円)/時間=13:00~16:30/G204教室/フリースペースとして教室や折り紙交流ができる場所になって

■ORIGAMITANTEIDAN / No.101 / Published on 25, January 2007 by Japan Origami Academic Society, 1-33-8-216 Hakusan Bunkyo-ku 113-0001 Tokyo JAPAN / Cover Photo: "Owl" Produced by Katsuta Kyohei / Photographed by Yamaguchi Makoto / Publisher: Maekawa Jun / Editor in Chief: Yamaguchi Makoto / Editor: Kamiya Satoshi / Editorial Design: ORIGAMI HOUSE / Translator: Tateishi Koichi

JOASホール今後の予定

◆2月17日(土)「知子の部屋」布施知子。

参加費=2,500円。12:30-16:00

◆3月17日(土)「知子の部屋」布施知子。

参加費=2,500円。12:30-16:00

◆3月25日(日)「ある折紙作家の教室」神谷哲史。

参加費=3,000円。11:00-16:00

講習作品「小鳥」

■参加の申し込みはFAX(03-5684-6080)か、メールinfo@origamihouse.jp宛でお願いします。これをできない場合は電話でも受けます。上記の予定は講師の都合により変更される場合があります。事前にお問い合わせください(03-5684-6040)。

編集後記

■入稿間際に訃報が届いた。■また、大きな方が逝ってしまった。■日本折紙協会の事務局で雑誌「おりがみ」の編集をやっていた頃に取材でお宅にお邪魔した。■通されたアトリエのような部屋に積み重ねられた溢れんばかりの資料(?)を目にし驚いたことを今でも思い出す。■その後はあまりお会いしたことはなかったが、季刊「をる」で一度一緒した。■作品は勿論だがいい意味でとても個性的な方だった。■残念です。■ご冥福をお祈りいたします。(や)

ホームページ

折紙探偵団 <http://www.origami.gr.jp/>
団員パスワード/Pyramid(大文字・小文字別)

折紙探偵団

2007年1月25日発行 第17巻5号通巻101号
発行所/日本折紙学会

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

Phone & Fax / 03-5684-6080

発行人/前川 淳

編集人/山口 真

編集スタッフ/神谷哲史

デザイン/おりがみはうす

翻訳/立石浩一

発売元/おりがみはうす

●本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

定価635円(本体605円)

※このページの商品の取扱いはいすべて おりがみはうす です。日本折紙学会とは別になります。

広告のコーナー



おりがみはうす商品案内

website = <http://www.origamihouse.jp/>

E-mail = info@origamihouse.jp

ATTENTION! : This advertisement is for Japan-internal use only.
For overseas shipment, please refer to the OrigamiHouse Web Site.

限定版 折紙探偵団Tシャツ

折紙探偵団のロゴが入ったTシャツ。
Origami Tanteidan Convention
Tokyo Nagoya Kobeの文字が
入っています。色は黒のみで布は厚手。
XS,S,M,L,XL各サイズ 定価
2,000円/2着まで送料500円
数に限りがありますので、ご注文の際には在庫を確認してください。



胸のロゴ



後ろの首のところには
左右7センチのロゴ



書籍名/著者・編者	価格(税込)	送料	内 容
神谷哲史作品集 神谷哲史 著 山口 真 編 立石浩一 訳	4,000円	国内一律 1冊 420円 (梱包込) ※ 複数冊は 異なります	B5判/全228頁/カラー口絵4頁/19作品収録 超複雑系折り紙の創作活動8年間の集大成。
西川誠司作品集 西川誠司 著 山口 真 編 立石浩一 訳	3,200円		B5判/全196頁/カラー口絵4頁/32作品収録 シンプルからコンプレックスまで幅広く楽しめる本
折紙図鑑「昆虫1」 川畑文昭・西川誠司 共著 山口 真 編	3,100円		B5判/全196頁/カラー口絵 4頁/17作品収録 '93~'94年の「昆虫戦争」で誕生した作品の記録
折紙図鑑「昆虫2」 ロバート・J・ラング 著 山口 真 編 立石浩一 訳	3,500円		B5判/全196頁/カラー口絵4頁/18作品収録 初心者お断り、世界で一番難しい昆虫折り紙の本
折り紙色紙百花 田中具子 著 山口 真 編	2,500円		B5判/全120頁/カラー口絵8頁/31作品収録 色紙に貼り込んで飾る花の折り紙作品集
一生 スーパーコンプレックス おりがみ 吉野一生 著 完売御礼	—		B5判/全200頁/カラー口絵8頁 トリケラトプス全身骨格を含む14作品収録
面~The Mask~ 布施知子 著 山口 真 編	3,300円		B5判/全200頁/全27作品カラー写真紹介 作者がユニットに出会う前の、お面だけの作品集
空想おりがみ 川畑文昭 著	2,900円		B5判/全180頁/カラー口絵4頁/18作品収録 1995年6月初版発行の恐竜と空想動物の本
第12回折紙探偵団 コンベンション 折り図集vol.12 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作52作品を収録
第11回折紙探偵団 コンベンション 折り図集vol.11 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作55作品を収録
第10回記念 折紙探偵団 国際コンベンション 折り図集vol.10 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作50作品を収録
第9回折紙探偵団 コンベンション 折り図集vol.9 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外から集まった秀作45作品を収録
第8回折紙探偵団 コンベンション 折り図集vol.8 日本折紙学会 編	2,000円		B5判/全256頁 国内・外の作家の秀作51作品を収録

※第1回~第7回の折り図集は全て絶版です

※書籍は郵便の「冊子小包」で発送しております。送料には梱包材代が含まれています

書籍2冊の送料は530円/書籍3冊の送料は670円(例外を除く・下記参照)
例外:「折り図集」又は「色紙百花」だけを3冊の場合(例:折り図集8、9と色紙百花各1冊)のみ530円

上記以外の場合はお問い合わせください/書籍と紙製品は別発送となりますのでご了承ください

商品名	価格(税込)	送料	内 容
恐竜柄おりがみ用紙	1,000円	国内一律 1~2セット 440円	35×35cm/10枚入/70kgの 洋紙に細かい恐竜模様を印刷
恐竜柄おりがみ用紙 折り図つきセット 3種類から 選べます	1,200円	3~5セット 630円※	1. ドラゴン(北條高史作) 2. ティラノサウルス(神谷哲史作) 3. カルノタウルス(神谷哲史作)

※紙製品は定形外郵便で発送しております(書籍とは別発送になります)。
送料には梱包材代が含まれています

只今制作中

発行日は未定です。気長に待っていて下さい
折紙図鑑「犬」/佐野康博・著 犬の折り紙第一人者の作品集
北條高史作品集/北條高史・著 あの名作の折り図も掲載予定

本ページに記載していない商品は、現在取り扱っておりません
ご送金頂いてもお送りできませんのでご注意ください

商品の申し込み方法

冊数と料金をよくお確かめの上ご注文ください。

先に**郵便振替**か**現金書留**で料金(商品価格+送料)をお送り下さい。入金を確認後、商品を発送させていただきます。ご希望の商品名と連絡先の記入(郵便振替の場合は振替用紙の「通信欄」に記入)をお忘れのない様お願いします。

郵便振替番号 **00120-9-715400**

加入者名 **おりがみはうす**

※折紙探偵団の購読申込みとは別の口座です。くれぐれもご注意ください。
※郵便振替用紙は郵便局備え付けのものをご利用ください。
※現金書留の場合は左記の住所へお送りください。
※商品のお届けは通常、送金から約1週間~10日です(お盆・年末年始等を除く)。



ギャラリー

おりがみはうす

〒113-0001 東京都文京区白山1-33-8-216

TEL:(03) 5684-6040 FAX:(03) 5684-6080

E-mail: info@origamihouse.jp 10時~18時 日・祝休

■商品を複数ご注文の場合は、送料が変わってきます。電話又はメールでお問い合わせください。

広告有効期限:2007年3月25日

季節の彩りを千代紙に

四季の千代紙

春柄

¥200
(税抜き)



しつめ草



桜舞う頃



春の野原



菜の花畑



株式会社トーヨー

ホームページ <http://www.kidstoyo.co.jp>

●写真は印刷ですので実際の商品とは色は違う場合があります。
※表示価格には消費税は含まれておりません。※内容・デザインは一部変更になることがあります。
本社 〒120-0044 東京都足立区千住緑町2-12-12 TEL03-3882-8161
大阪支店 / 名古屋営業所 / 福岡営業所 / 札幌出張所 / 松山出張所